

—CLA-アーカイブズ 21

図書館に展開する半学半教の場作り

—「学生の学習環境を整える」プロジェクト 2008・2009 活動報告書—

The Liberal Arts
The Liberal Arts

はじめに

教養研究センター所長 横山千晶

学生は勉強で困ったことがあったときに教員や友達以外、だれに相談しに行くのでしょうか。こんな素朴な疑問を教員はふだんはじっくりと考えないものです。慶應義塾大学の1, 2年生が集まる日吉キャンパスでは、学習の基本的な問題についてさえも学生はどこに相談しに行ったらいいいのか分からないために、同じ質問でありながら異なった学生が、さまざまな場所に聞かされているという現状があります。つまりある者は図書館へ行き、ある者はインフォメーション・テクノロジー・センター（ITC）、その他学生相談の窓口である学生部（学事担当、学生生活担当）に行くなど、その場所はばらばらです。

それだけではありません。学生は自分の躓いている実際の箇所がいったい何なのか分かっていないことすら多いのです。同時に教員のアドバイスが適当でない場合もあります。学生の躓きは単なる理解力の問題ではないこともあるからです。精神的悩みや学習障害が躓きになっていることもあるでしょう。もちろん学生と密に接している教員が個人的にすべての学生の悩みや問題に答えられるわけがありません。

学生一人ひとりの問題に向き合っていくためには上で述べたようにさまざまな組織や人をつなげた「学びの場」のネットワークの構築こそが重要になってきます。つまり、教員、学生、図書館、学生総合センター、学事担当部署、ITC、他キャンパス、および各研究センターの研究者が協力して学びの場と生活の場としての大学環境を考えることで、それぞれのリソースを活かしながら、学生がどの場所に質問に来ても、各部署と人が協力し合って個別の問題に対応し、アドバイスできるようにするシステムです。

慶應義塾大学日吉キャンパスで活動を展開している教養研究センターが、そのネットワークの中心にすえたのが図書館です。図書館は集い、調べ、発見し、話し合うすべての機能をそこに内包しています。

学生はまずピア・グループとともにいて、助け合うことで互いに学ぶことができます。これは最も初歩的、かつ理想的な学びの形態でしょう。グループワークやグループディスカッションの形式はさまざまな授業で採用されています。しかし、実際に自分の学んだことを使ってピアをしっかりと支えていく機会が積極的に与えられるとすれば、学生の学びはもっと能動的になります。これがピア・メンター・システムです。教養研究センターではこの新たな学びの場所として、図書館を見直す作業を始めました。こうして始まったのが図書館のレファレンス・デスクでのピア・メンターによる学習相談アワーの開設です。

この報告書はその2年間の試みの軌跡です。教員や専門職員だけではなく、大学院生や学部上級生たちが協力しながら、一人ひとりの仲間としての学生と向き合っていくこのシステムは、かかわっていくピア・メンターもまた、アドバイスをしながら常に学び続けています。仲間の悩みを自分の経験に照らし合わせながら、聞き、ともに解決の糸口を模索し、自分では解決できないところは相談に来た学生とともに上級生や専門職員、教員にアドバイスを受けることで、スキルは確実にピア・メンターの身につけていきます。こうして構築されたスキルを次の相談のときに活かしていくことで学習相談の経験は、まさに「半学半教」の絶好の機会となるのです。

このような学習アドバイザーとしてのピア・メンターの導入は、現在まだシステム作りとトレーニング・プログラムの構築の段階ですが、その一歩一歩がかかわる教職員・学生にとって非常に大切なステップです。

またこのように教員・職員・学生が協力し合うことを通して、アドバイスを求める側にも与える側にも大学に対する大きな帰属意識が生み出されることはまちがいありません。

先にも述べたように、学生たちの学びの躓きは、非常に多岐にわたります。ゆくゆくは図書館を中心に、学生支援の組織、実際の科目履修に関わる学事関係部署、あるいはITCなどが協力し合ってネットワークを構築し、どの場所に学生が来ても対応できるようなシステムを作っていくことが「学び場」としての大学の目標です。ピア・メンターのシステムはまさにその一歩でもあります。これから先、皆さんでこのシステムの成長の過程をみまもるだけでなく、積極的に水を撒き、光を当て、育てていただきたいと思います。

なお、この報告書は、本プロジェクトに関わった学生相談員・メディアセンター職員・教養研究センターの本プロジェクト担当教員の三者によって作成されました。特記しておきたいことは、「Ⅳ. 活動結果・活動から見えてきたもの」は、2008・2009年度に学習相談員として活動を支えてくれた間篠剛留君（社会学研究科修士課程在籍）の執筆によるということです。もちろん、それはピア・メンター全員によって蓄積された学習相談のデータ、種々の作成資料、また活動を充実させるためにメーリングリストや会議などを通じてそれぞれがアイデアを出し合い工夫しながら実現してきた経験がもとになっています。この他にもピア・メンターの諸君には、本報告書作成にあたって様々な協力をいただきました。本報告書は、我々のプロジェクトが学生の自律的な意欲と努力によって成り立っていることと、ピア・メンターとしての活動を通して、彼らが大きく成長してきたことの証しです。

ごあいさつ

日吉メディアセンター所長 羽田 功

2009年度「学び場」プロジェクトの報告書の刊行にあたり日吉メディアセンター所長として一言ご挨拶を申し上げます。

と言いながら、冒頭から私事で恐縮ですが、この文章を書きながら思い出されるのは、2001年から02年にかけて私が座長となって活動した教養教育研究会の事です。教養教育研究会は、大学を中心とした高等教育機関における新たな教養教育の汎用的モデル構築を目的とした文部科学省の委託研究として組織された研究会でした。日吉キャンパスの教員が中心となり、慶應以外の大学の先生方にもご協力いただいて、月一度、合宿形式での議論を積み重ねていきました。いま振り返っても、かなりハードな、しかしひじょうに面白い研究会であったと思います。そして、この研究会の活動から生まれたのが報告書『教養教育グランドデザイン——新たな知の創造——高等教育における教養教育モデル』です。文部科学省への提出は言うまでもなく、この報告書は全国400近くの大学にも送付させていただきました。

ところで、この報告書に提示したモデルにおいて、研究会のメンバーが最も重要な軸の一つと位置づけていたのが現在教養研究センターで行われている「アカデミック・スキルズ」（報告書では「スタディ・スキルズ」）にほかなりません。大学における「学び」の基盤として、と同時に生涯に渡って続く教養教育の出発点として、メンバー全員が熱い期待を抱きながら具体化していった授業モデルでした。その後、このアイデアは教養研究センター設置授業「アカデミック・スキルズ」として実現したわけですが、座長の日からすれば、実際に授業化され、多くの学部によって単位認定されたことだけでも、慶應の教養教育にとってとても大きな前進だと思っておりました。ところが、それにとどまらず、「学び場」プロジェクトの一環としていまや「アカデミック・スキルズ」履修者が日吉図書館のレファレンス・デスクの一角で学生たちの「学び」の相談役として活躍するようになったのですから、いささか大げさかもしれませんが、隔世の感すら覚えます。

さて、「学び場」プロジェクトですが、詳細については本報告書をお読みいただくとして、学生たちの本離れ・図書館離れに危機感を抱き、さまざまな改善の試みをしてきた日吉メディアセンターとしても、教養研究センターとの連携・協力関係に支えられたこのような活動はたいへん重要なことと考えています。とりわけ、学生たちが現場の最前線に立って活動してくれることが何より素晴らしいことだと思っております。ただ、こうした活動は継続こそが大切ですので、現在のような半ばボランティア的な性格では安定性を欠くことも否めません。活動の重要性に鑑みて、今後は義塾による強力な支援が得られるよう、プロジェクト自体のいっそうの充実化を目指して努力していきたいと思っております。

そのためにも皆様のこれまで以上のご理解とご協力をお願い申し上げます。

目次

- はじめに 教養研究センター所長 横山千晶 1
ごあいさつ 日吉メディアセンター所長 羽田 功 3

第1部 活動報告編..... 7

I. プロジェクト概要..... 8

1. 全体趣旨
2. 学習相談アワー概要
 - (1) 趣旨
 - (2) 意義
 - (3) 特徴
 - (4) 方針
 - (5) 学習相談アワーの共通ルール
 - (6) 相談手順

コラム「図書館スタッフから見た学習相談アワー」

II. プロジェクト活動実績..... 22

1. 活動日程
2. 学習相談アワーの運用体制と実績
 - (1) 運用体制
 - (2) 実施場所
 - (3) 実施日時・日数
 - (4) 相談受付件数と内訳
 - (5) 学習相談員による資料作成
3. その他の活動
 - (1) アカデミック・スキルズ公開講座
 - (2) 学習相談員企画展示「レポートに困っていませんか？」

III. 活動成果・活動から見てきたもの..... 30

1. 2009年度学習相談メモまとめ
2. 相談内容の分析
3. 相談内容とそれへの対処法
 - (1) 「資料が見つからない」という相談
 - (2) 「レポートとは何かが分からない」という相談
 - (3) レポートに取り組む際の躓きに関する相談
 - (4) 課題ごとの性格に対応したいという相談

3. 学習相談をめぐる問題とそれに対する取り組み

- (1) 2008年度の成果
- (2) 2008年度の課題
- (3) 2009年度の取り組み
- (4) 2009年度の取り組みの中で生じた問題とそれに対する取り組み
- (5) 2010年度の活動に向けて

IV. 今後の活動の計画と展望..... 44

1. 2010年度の相談員体制と活動計画

- (1) 学習相談アワー
- (2) 学習相談アワー以外の活動

2. 学び場の構築の展望

- (1) 学習相談アワーの展開の可能性
- (2) 様々な機関との連携
- (3) 学習相談活動のあるべき体制

第2部 資料編..... 49

○学習相談メモ

学習相談メモまとめ（春学期）／学習相談メモまとめ（秋学期）

○学習相談アワーポスター など

2008年度秋学期／2009年度春学期／2009年度秋学期

レファレンスデスク看板／図書館内案内用ポスター①／図書館内案内用ポスター②／図書館内案内用ポスター③

日吉教員宛プロジェクト趣旨説明および協力依頼文書

○アカデミック・スキルズ公開講座

第1回公開講座ポスター／第1回公開講座使用スライド①／第1回公開講座使用スライド②

プレゼンテーションの模擬／第2回公開講座ポスター／ワークシートその1／ワークシートその2

グループワーク用新聞記事リスト

○学習相談員企画「レポートに困っていませんか？」

展示ポスター①「レポートとは何か」／展示ポスター②「参考文献の使い方」／

展示ポスター③「要約の仕方」／展示ポスター④「テーマの決め方」／展示ポスター⑤「情報収集のコツ」

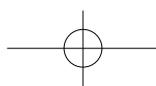
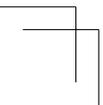
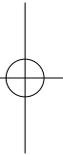
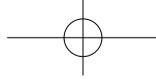
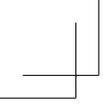
展示ポスター⑥「情報の組み合わせ方」

○学習相談員作成資料

実験レポートって何？／11月30日ピア・メンターミーティング議事録

学習相談員自己紹介 84

プロジェクトメンバー 86



第 1 部

活動報告編

I. プロジェクト概要

教養研究センターとメディアセンターとは、2008年度より共同事業として「学生の学習環境を整えるプロジェクト」（略称：「学び場プロジェクト」）を立ち上げた。その中心をなす活動が「学習相談アワー」である。本章では、まず「学び場プロジェクト」の趣旨を説明した上で、学習相談アワーのねらいと活動内容・活動に当たって注意した点などを説明し、全体像を紹介したい。

1. 全体趣旨

「大学は勉学の場」と言われる。「遊びの場ではない」と言うのが次に続く言葉である。しかし、振り返ってみれば、大学を勉学の場として捉えていない学生も多いことは苦い反省とともに認めなければならない事実である。

「君たちは大学生なのだから、大学のキャンパスこそが主たる居場所であるはずだ」というのも、やはり常々口にする言葉である。しかし実際には、大学のキャンパスを大学4年間の生活の主たる居場所ではなく、家（下宿）・部やサークルの活動場所・アルバイト先・ダブルスクール等々と同列の、諸々の居場所のうちの一つとしてしか考えていない学生が多いのも事実である。

この二つの事実はたがいに関係しあっている。大学が主たる居場所として考えられていないからこそ、そこで腰を据えて勉学に励もうと思われないのであり、また、魅力ある勉学の場として十分に機能していないからこそ、自分の主たる居場所としても認識されないのであろう。

「大学は勉学の場」というのは本当だろうか。もちろん、教室では常に授業が行われている。しかし、授業はあくまで履修登録をした学生のみを対象にしたものであり、誰でも思い立ったときに自由に参加できる場所として解放されているわけではない。勉学を主たる目的としたサークルも様々ある。しかし、それらもやはりそのサークルの構成員を対象にしたものであり、一般の学生が気の向いたときに気軽に立ち寄れるものではない。講演会

やワークショップも随時開かれている。しかし、それらの多くは学生が自分自身の問題意識や興味を持ち寄って自分自身の学びを作り上げるものではない。このように考えてみると、大学において自由闊達な勉学の場は意外に限られていることが分かる。大学キャンパスに勉学の空気が遍在しているとは必ずしも言えないのである。

大学が勉学の場であるためには、キャンパス内に学びの空気が自由に流れていなければならないのではないだろうか。教室以外のあちこちで、様々な形の学びを目にし、参加することができなければならないのではないか。そしてできればそこには、ふと学び方で躓いたら、悩みの解決に手を貸してくれたり、効果的でおもしろい学び方を教えてくれるような先輩がいて、気軽に声を掛けられればいい。

日吉キャンパスは、大学1、2年生が大学における学びの基礎を固める場である。慶應義塾は総合大学であり、そこに集う学生の資質と興味も実に多様である。また友人たちと切磋琢磨しつつ、自律的な学習・研究を行う意欲と能力を有する学生が多数在籍している。けれども、残念ながら、他キャンパス・他学部・他学年・他クラスの学生がともに知り合い学び合う機会は限られ、それぞれがその長所を出し合い、学生同士で知の連携・継承をするような枠組みや機会に乏しい。そのために、せっかくたくさんの優れた人材に囲まれていながら、きわめて限られた人間関係の中で大学生活を送り、その中で学習活動も終始するケースが多い。

さらに、慶應義塾には確かに、多くの学部と研究所や

センターがあり、様々な場所において特色ある研究・教育および支援活動を展開しているが、それらを横断的・包括的に結びつけるネットワークが存在していない。塾の教職員であっても、その全貌を把握しているものは限られている。ましてや学生が自由にアクセスして、自分の素朴な疑問や問題をぶつけることのできる場とはなっていない。とりわけ入学したばかりの学生が学習について困難にぶつかったときに気軽に相談できるような窓口は不足している。

学生の抱える問題は複合的であり、またそれを学生自身もうまく整理できていないことが多い。学習上の困難と学生生活における悩み、さらに精神的な問題とが複合している場合もある。そのような場合、学生が気軽にアクセスできるような窓口が各所にあり、なおかつそれぞれがネットワークによって結ばれていて、学生の困難に応じて連携して対応できるような枠組みが必要である。

近年、慶應義塾大学では各学部とも初年次教育の重要性を認識し、スタディスキルを教えるための少人数セミナーを積極的に開講するようになってきている。また同様の趣旨で、教養研究センターでも早くから「アカデミック・スキルズ」を開講してきた。しかし、授業という形態を用いた取り組みは、履修する学生が固定され人数も限られており、すべての学生に常にかかれた学びの場とはなっていない。学生がその時々抱く疑問や問題に即時に対応するためのものではないために、授業科目だけでは学生のニーズをカバーしきれない。外国語教育研究センターの主催する Plurilingual Lounge (プルリンラウンジ) は、学生の外国語学習を外国人留学生にサポートしてもらう取り組みであり、学生同士の学び合いの場として注目される¹⁾。また、理工学部のように、基礎科目について大学院生が学部生の学習をサポートするチュートリアルアワーのような場を提供している学部もある。ただ、学生の学びをめぐる悩み・関心の所在は多様であり、さらにいろいろな発想と形式の支援が試みられるべきであろう。

「半学半教」の精神を実現するために、義塾に蓄積された豊かな教育・研究資産を有機的に連携させ、学生にとって分かりやすく利用しやすい、新たな学びの場を構築することが求められている。授業や教室という枠組みにとらわれず、大学のあちらこちらに自分の興味に応じて自由に学びの機会を見つけられること、学習上問題に

ぶつかったら気軽に相談できる人がいること、そして、学生自身が自分の学びの成果をもって他の学生をサポートし、それによって自分の学習成果を振り返りさらに高度な学びへの意欲を抱くきっかけを得られることが重要である。慶應のキャンパス内に、学部や学年の枠を超えた学びの空気を遍在させることが求められている。

以上の考え方のもとに、教養研究センターとメディアセンターとは、2008年度から、共同事業として「学生の学習環境を整えるプロジェクト」(略称「学び場プロジェクト」)に取り組んできた。義塾の学習支援のネットワークを作り、学生同士の間の学びの連環の仕組み作りをすることが目的である。その手始めとして、本プロジェクトは、学びの場としての図書館の役割を見直そうとしている。日吉メディアセンターでは、学びの場としての図書館の役割を強化させるべく、図書館閲覧室の充実、学習室の充実を図ってきた。このような図書館の持つ学びの場としての特色と、教養研究センターが行ってきた、学生が自発的に問題を発見し解決できるための、学びの技術の養成という活動とを結びつけ、教養研究センターの教育活動の成果として生まれたスタディスキルを持った多くの学生の知的技法・能力を、一般の学生、とりわけ日吉に学ぶ大学1、2年生の分かりやすい形で発信し、伝承する、しかもそれを大学の知の結晶である図書館内で、その豊かな資産を活用する形で行おうという取り組みである。そして、それをできる限り学生自身によって担ってもらおうと考えている。

以上をまとめると、本プロジェクトのねらいは、4点である。

- ①学生の自律的な学びの場・知の継承の仕組みを構築する。
- ②教養研究センターのアカデミック・スキルズの成果を授業以外の場で、より広範に展開する。
- ③新しい学びの場としての図書館のあり方を考える。
- ④慶應義塾の各所に存在する学習支援のネットワークを作り上げる。

2009年度までに、本プロジェクトの一環として、次の活動を行った。

- ①学習相談アワー
- ②アカデミック・スキルズ公開講座
- ③学習相談員(ピア・メンター)による企画展示

1) <http://www.flang.keio.ac.jp/modules/tinyd0/index.php?id=249>参照。

本プロジェクトの中心活動が①学習相談アワーであり、②③は学習相談アワーを通して得られたアイデアから生まれた活動である。この二つについての詳細は、II-3「その他の活動」に譲りたい。次節以降は、学習相談アワーについて、その特徴・方針・共通ルール・相談手順などについて説明したい。学習相談アワーの2008・2009年度の活動実績については、II-1「学習相談アワーの運用体制と実績」を参照されたい。

2. 学習相談アワー概要

(1) 趣旨

「学習相談アワー」とは、教養研究センターが開設する科目「アカデミック・スキルズ」を修了した学生の有志が学習相談員²⁾として、日吉メディアセンターのレファレンスデスクに座り、学生の学習に関する相談に対応する活動である。特にレポートの書き方についての相談を中心としている。

大学に入った学生にとって、多くの授業で課されるレポート課題、また、それに関連して授業内でのプレゼンテーションこそが、大学での学習における最初の大きな関門である。レポートを書くためには、授業の内容とそれに関する知識を受容し整理するだけでなく、自分自

身で問題を発見して、その問題に対して学問的に正しい方法を用いて調査・考察を行い、自分なりの問題解決を果たさなければならない。その過程で、様々な手段を駆使して資料やデータを収集し、それを正しく取捨選択することが求められる。そのためには、文献検索の方法を知らなければならない。これらの事柄は、高校までの教育では十分に教えられていないことが多い。にもかかわらず、大学に入ったとたん、多くの授業でレポートが課せられ、学生は事情も分からないまま与えられた課題をこなさなければならない。このことに、多くの学生が困難を感じている。

従来、メディアセンター内のレファレンスデスクにおいて図書館スタッフが、このような学生の相談に対応してきた。もちろん、図書館スタッフは情報に関するプロフェッショナルであり、学生に適切な助言を与えることができるが、しかし、学生は分からないことにつづかつた時は、自分の知り合い（典型的には友人）に聞きたい、そうでない人には聞きづらい、恥ずかしいと考えていることが調査によって明らかになった³⁾。そこから考えると、図書館スタッフは必ずしも気軽に話しかけられる相手とは見なされていない可能性がある。おそらく、学習に関しての悩みを抱えながらも、それを誰にも相談できずに苦勞している学生は潜在的には多いのではないかと予想される。

図 I - 1 レファレンスデスクに座る学習相談員（ピア・メンター）



2) 本プロジェクトでは学習相談員を「ピア・メンター」（あるいは略して「ピアメン」）と呼んでいる。相談者と同じ目線に立って、その悩み・躓きの解決のために助力する者という意味である。

3) 浅尾千夏子, 藤本優子, 利用者調査ワーキンググループ活動報告: 学部生に対するグループインタビューを中心に. MediaNet, 2008, no.15, .10, p.33.

翻って、レポートを書くというハードルは大学に学ぶものがみな一度はぶつかるものであり、先輩の学生たちはそれを自分なりの努力と方法によって克服してきた。その意味では、レポートについての悩みに一番親身になって対応し、学生がもっともほしいアドバイスを的確に与えられるのは、今現在大学でレポート・論文作成に取り組んでいる上級生である。また上級生であれば、学生が相談したい相手として挙げる「知り合い（友人）」というイメージにも近いので、気軽に相談もできるだろう。すなわち、この問題は、学生自身による自律的な学びの場・知の継承の仕組みを構築するのに最適の素材ということにもなる。

教養研究センターが開講する「アカデミック・スキルズ」は、まさしくレポートを書くためのスキルを教える科目である。「アカデミック・スキルズ」は学習段階に応じて初級クラス・中級クラスという2種類のクラスを編成し、複数教員による独特のシステムティックな授業が展開される。学生の学習成果を発表するため、レポートをまとめた『アカデミック・スキルズ学生論文集』を発行し、プレゼンテーション・コンペティションを開催している⁴⁾。このような特徴あるカリキュラムを通して、優れたレポートを書くための知識・能力を持った学生を育ててきた。また、論文集の編集、プレゼンテーション・コンペティションの運営などには履修学生が積極的に参加している。教員側からの一方的な教育ではなく、学生同士切磋琢磨しながらお互いにスキルを高め合う主体的な学びを実現している。そのような学生がレファレンスデスクに座り学生の相談に対応し、自らの経験を踏まえながらレポート作成に対する正しい認識と効果的な方法を伝えることによって、「アカデミック・スキルズ」の教育内容を広範な学生に普及させ、義塾の初年次教育に貢献することができる。

さらに、この活動を図書館内で展開することで、孤独な知的営為の場としての伝統的な図書館のあり方だけでなく、人間同士の生の知的交流が行われる学びの場としての図書館の新しいあり方を模索することができる。同時に、そのような知的交流をサポートするために、図書館がどのような機能を整えるべきかも活動を通じて見えてくるであろう。

なによりも、これは慶應義塾の伝統である「半学半教」

——義塾に集うものが互いに教え合い学び合う、教えることによって、自らの学びをより高く深いものにしていく——の精神を具現化した学生主体の学びの場を日吉キャンパスに作り上げるための最初の一步となるであろう。

(2) 意義

学習相談アワーは、学生・学習相談員・教員・図書館スタッフに対して次のような意義をもっている。

- ①相談員が学部学生・大学院生であるため、学生たちにとってはスタディスキルに関する悩みを気軽に相談できる窓口が得られる。また、先輩が後輩の相談に乗ることによって、学生の間で学習経験やスキルを有効に継承することができる。
- ②学習相談員は、後輩の相談に対応することで、教える経験を積むことができる。相談に分かりやすく対応する中で、自分たちの持っている知識を全体的に見直し向上させるモチベーションが得られる。また、レファレンスデスクでとなりに座る図書館スタッフから、相談の受け方・文献検索の仕方についての高度なスキルを随時学ぶこともできる。
- ③相談活動を通じて、大学での学習において学生がどのような点に困難を感じているかに関する知見を蓄積し、それを教員に提供し、有効に活用してもらうことによって、大学教育の改善に資することができる。
- ④図書館スタッフは、学生相談員による学生の視点からの相談への対応のしかたを観察することで、普段気づきにくい学生の躓きとそれに対する有効な回答の仕方を知ることができ、刺激を受けることができる。

(3) 特徴

「学習相談アワー」は、学生・教養研究センター・日吉メディアセンターとのコラボレーションによる活動である。すなわち、大学院生や学部学生の学習相談員が活動の実質を担い、両センターは彼らの活動を種々のアドバイスと事務的運営によってサポートしている。本活動における二つのセンターの役割分担は、以下の通りである（図 I -2 も参照されたい）。

①教養研究センターの主な役割

- a. 学習相談員の人選を行う。

4) 教養研究センター編。アカデミック・スキルズ：少人数セミナーの指導法。横浜、慶應義塾大学教養研究センター、2010.3。（CLAアーカイブズ、19）

教養センターの開講科目「アカデミック・スキルズ」担当教員との緊密な連携のもと、この授業を履修した学生の中から学習相談員を募集し選定する。

- b. 学習相談アワーのねらいと成果を教職員に広報し協力を仰ぐ。
- c. 教員の立場から学習相談員にアドバイスと提案を行う。
- d. 大学教育の改善のために本活動の成果を反映させていくための基盤整備をする。

②メディアセンターの主な役割

- a. 学習相談アワーの場として、レファレンスデスクを提供し、必要な資料・設備を整える。
- b. 学習相談員のスケジュール調整を行う。
- c. 学習相談アワーに先立って学習相談員の指導とトレーニングを行う。
- d. 学習相談員の相談業務をサポートする。
- e. 成果の取りまとめを行う。

(4) 方針

- ①学生主体の活動を重んじ、ピアメンター間の知の伝承を図る

学習相談員は、学習相談アワーを継続した活動とするために、また活動をより充実したものにするために必要な資料を学習相談の合間に担当を決めて作成している。また、本活動を学生に周知するために様々な企画を計画している。学習相談を行いながら、自分自身も成長することが重要と考える

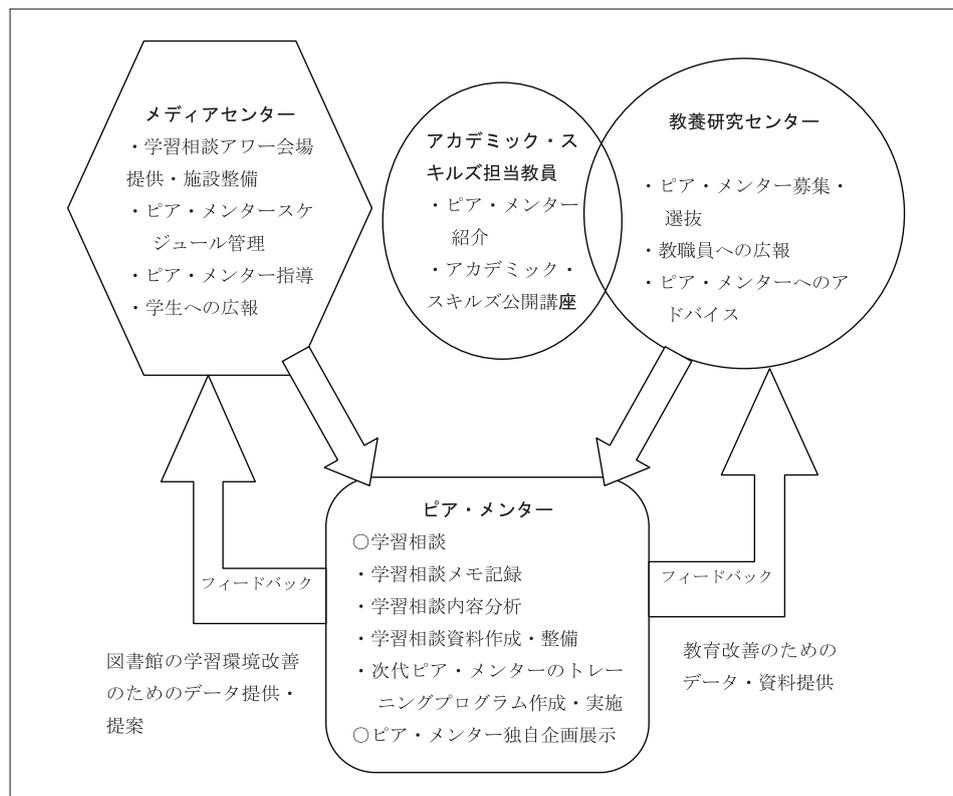
②学習相談員同士の情報・経験の共有化を図る

そのためのツールとして、学習相談メモ（一回ごとの相談につき、相談内容とそれに対する答えを記録したもの）（図 I -5）・メーリングリストとを用意した。これについて、詳しくはⅢ-3-(2)を参照されたい。

③ロケーションを有効利用する

学習相談アワーは、図書館内という図書に囲まれている場の、学生がアクセスしやすい一階のレファレンスデスクで行われる。しかも、同じデスクに学習相談員・図書館スタッフ・日吉 ITC（日吉インフォメーション・テクノロジー・センター）学生コンサルタントの3人が席を並べている。この好条件を積極的に活用し、三者の得意分野を融通し適切なサービスを提供するとともに、互いに学び合うことを方針としている。

図 I-2 学生の学習環境を整えるプロジェクト役割分担概念図



(5) 学習相談アワーの共通ルール

① レポートの代筆にならないように注意する

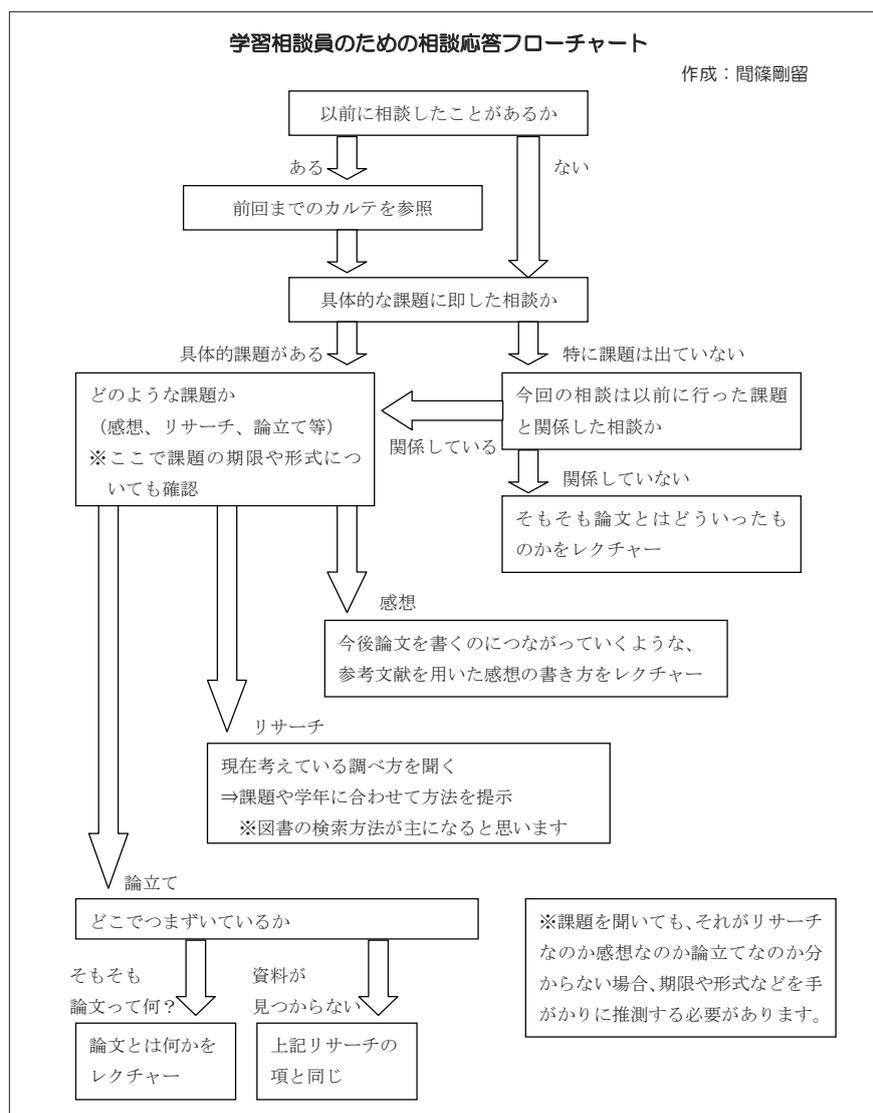
レポートは成績評価の対象である。学生自身が授業で学んだ内容を基に課題に取り組み成果を出さなければならない。学習相談アワーがそれを阻害するような形になるのは厳に避けなければならない。教員の理解を得、本活動を持続可能なものにするために、このことは教養研究センター・メディアセンター・学習相談員の三者で繰り返し確認している。「学習相談アワー」のポスターにも、特に「レポートの代筆や添削ではありません」と謳い、相談者の注意を喚起している（第2部 資料編「学習相談アワーポスターなど」参照）。

② 自分たちが対応できる相談とそうでない相談とを切り

分ける

学習相談アワーは、レポートの作成のしかた・プレゼンテーションのしかたに関する相談を主たる対象としている。もちろんそれ以外でも、学習相談員が責任を持って答えられる相談には応じるが、不確かな知識しかないもの、あるいは心理的な悩み・生活上の困難など、自分たちの手に余る事柄についての相談には応じられないことを相談者にはっきり伝えることをルールとしている。義塾には、学習指導、学生部や学生相談室など、複数の部署で専門の教職員を配置して学生の種々の相談に対応している。学習相談以外の悩みを抱えた学生には、より適切な窓口を紹介すべきである。また、学習相談員が相談者に対して塾内の様々な部署を紹介し橋渡しをするのは、義塾内に存在する学生支援・学習支援のネットワーク作りをするという、本プロジェクトの目的にも適うこ

図 I-3 学習相談の流れ



とである。当然ながら、自分たちの手に余る相談に応じて、相談員自身が心理的ストレスを抱えることは防がなければならない。

2009年度秋学期の学習相談アワーの開始に先立っての会合で、学生相談室のアソシエイトカウンセラーの佐藤暁子氏から、相談を受ける態度などについてのアドバイスを受け、このルールの大切さを再確認した。

(6) 相談手順

個別のケースによって、あるいは相談員によって異なることも多いが、学習相談は基本的に図 I-3 のフローチャートの通りに進められる。要望を聞き、話をしている中で、相談者がどこで躓いているのかを明らかにしていくというのが一般的な流れである。

相談者の相談内容が明確でないことも多い。その場合には、以下の2つのパターンが考えられる。

- a. 課題が出たのだが、どうしたらよいか分からない。
- b. 課題は出ていないのだが、レポートやプレゼンテーションについて知りたい。

a の場合、まず課題を確認する。相談員は相談者とともに課題を読みかつ検討していきながら、その課題についてどのように取り組めばよいかを説明していく。その際、課題の取り組み方について相談者が自分なりの考えを持っているようであれば、それも聞きながら相談を行っていく。

b の場合、もし相談者がこれまでにレポートやプレゼンテーションの課題に取り組んだ経験を持っているのであれば話してもらい、その課題に即して説明をする。そうでなければ「レポートレクチャー用スライド」(「図 I-4」) や『アカデミック・スキルズ——大学生のための知的技法入門』等を用いてレポートとはどんなものなのかについて説明を行う。

この後、レポートの書き方について、論文の構成・引用の仕方など相談者の相談内容に応じて具体的な説明を行うが、その際、『アカデミック・スキルズ学生論文集』に収められている、学生が実際に作成したレポートを例にしながらか説明を行うのが効果的であった。ただし、『アカデミック・スキルズ学生論文集』のレポートは、それぞれ8000字程度のボリュームがあり、その場での通読が難しいこと、大学で最初に課せられるレポートの分量としては多すぎるなどがあり、そこから相談者が自分のレポートをイメージしにくいという難点がある。そ

こで、初学者にレポートのイメージをつかんでもらうために、ピア・メンターがA4判2枚前後の「レポートとは何か——ピアメンから見たレポート」という擬似レポートを資料として作成した(図 I-6)。これを用いて説明をすることが多かった。

学習相談の過程で、相談者には「学習相談メモ」に記入をしてもらう(図 I-5)。これは、今後の学習相談アワーの資料とするために、相談内容とそれに対する相談員の対応内容とを記録するためのものである。相談者に記入してもらうタイミングは相談員ごとに違うが、基本的には相談の最初に書いてもらうことが多い。相談開始当初は、相談がレファレンスデスクに同席している他の係員に回すべき内容と思われたが、話を聞くうちにレポートやプレゼンテーションについての相談に発展するケースもある。その場合には、学習相談員が対応すべき相談と判明した時点で、学習相談メモを書いてもらう。

例えば、図書の配架場所が分からないという相談や、ワードの脚注の付け方が分からないという相談などは、それ自体では図書館スタッフ(レファレンス関係の質問を担当する)やITC学生コンサルタント(図書館内設置のコンピュータやネットワークに関する技術的な質問を担当する)の業務であるので、学習相談メモは書いていない。ただ、そのような質問に対応するなかで、相談者が実はレポートやプレゼンテーションの取り組み方が分からず困っているということが分かれば、その時点で学習相談アワー対象の相談内容と判断し、学習相談メモを書いてもらう。なお、相談内容や相談者のレベルに応じた対応の詳細についてはⅢを参照されたい。

学習相談アワーで学習相談員が使っている資料

1. 佐藤望, 湯川武, 横山千晶, 近藤明彦. アカデミック・スキルズ: 大学生のための知的技法入門. 慶應義塾大学出版会, 2006.10, 160p.
2. 河野哲也. レポート・論文の書き方入門 第3版. 慶應義塾大学出版会, 2002.12, 116p.
3. 戸田山和久. 論文の教室: レポートから卒論まで. 日本放送出版協会, 2002.11, 297p.
4. 松本茂, 河野哲也. 大学生のための「読む・書く・プレゼン・ディベート」の方法. 玉川大学出版部, 2007.3, 159p.
5. 横山千晶. アカデミック・スキルズ学生論文集. 慶應義塾大学教養研究センター, 2006.3.

図 I-4 学習相談アワーレポートレクチャースライド

作成：学習相談員 間篠剛留 2009.7.2

レポートに取り組むために

1

レポートに取り組むために①

レポートとは何か

2

レポートとは何か—他の文章との違い—

低

論理性・客観性

高

- ・感想文
何かに対する感想をつづったもの
- ・評論文
自分の意見や主張を加えてより論理的に書いたもの
主張は客観的なものでないことも多い
例：「……についてもっと議論すべきである」「……は評価できる」
「今後の動向が注目される」
- ・小論文
客観的な事実に基づいて主張を述べたもの
「事実」と「意見」とを区別して書くことが重視される
※特に何かについて調べる必要はない

参考：吉田健正『大学生と大学院生のためのレポート・論文の書き方 第2版』ナカニシヤ出版、2004年、12-16頁。

3

レポートとは何か—レポートの特徴—

- ・客観的・論理的であること
独りよがりではなく、他者にわかってもらうように書く
＝自分の考えの根拠を示す（⇒脚注をつける）
誰もが再検証可能な方法を使う
- ・調べて書くということ
本を読む、事実関係を調べる、資料を分析する……
- ・オリジナリティ（新しい知見）が求められることも
これまで明らかにされていなかった事を明らかにする
例：証明されていなかった理論命題を証明する
これまで発見されていなかった資料を発見し興味を加える
すでに発見されている事実を、自分自身のやり方で再検証してみる

参考：島田春雄『論文の書き方』慶應義塾大学通信教育部編『卒業論文の手引き 新版 新装版』慶應義塾大学出版会、2004年、12-18頁。
佐藤望編著『アカデミック・スキルズ—大学生のための知的技法入門』慶應義塾大学出版会、2006年、109-115頁。
吉田健正『大学生と大学院生のためのレポート・論文の書き方 第2版』ナカニシヤ出版、2004年、14-16頁。

4

レポートの種類

低

難易度

高

- ・読書レポート
本の内容を要約し、ときには感想や批判を述べたもの
- ・学習レポート
分析までは至らない段階の報告（＝調べ学習）
すでに知られている事柄について勉強した結果をまとめたもの
- ・調査レポート
特定の課題について調査し、分析した結果を記述するもの
既に知られている事柄から新しい事実を発見し、それにある程度の分析を加えて説明したもの
- ・研究レポート
調査レポートの発展形
さまざまな資料を調べ、時には調査や実験を行い、その結果を分析、考察して、独自の結論を導き出し、それをまとめる

参考：吉田健正『大学生と大学院生のためのレポート・論文の書き方 第2版』ナカニシヤ出版、2004年、16-20頁。

5

レポートの種類

報告型

論証型

- ・読書レポート
本の内容を要約し、ときには感想や批判を述べたもの
- ・学習レポート
分析までは至らない段階の報告（＝調べ学習）
すでに知られている事柄について勉強した結果をまとめたもの
- ・調査レポート
特定の課題について調査し、分析した結果を記述するもの
既に知られている事柄から新しい事実を発見し、それにある程度の分析を加えて説明したもの
- ・研究レポート
調査レポートの発展形
さまざまな資料を調べ、時には調査や実験を行い、その結果を分析、考察して、独自の結論を導き出し、それをまとめる

参考：吉田健正『大学生と大学院生のためのレポート・論文の書き方 第2版』ナカニシヤ出版、2004年、16-20頁。
戸田和久『論文の執筆—レポートから卒業論文まで—』日本放送出版協会、2002年、36-50頁。

6

レポートに取り組むために②

自分なりの論を展開する（あるいはそのテーマ研究のまとめ方）

7

オリジナリティ—独自の観点を入れる—

レポートに求められる独自の観点＝新しさ
 ⇒自分の研究が「新しいもの」だと示すためにはどうしたらよieldろうか？

⇒「新しいんだ！」といくら叫んでも、それは客観的・論理的な議論ではない
 ⇒それ以前の研究を丁寧に検討して、「自分の今やっていることは先行研究では行われていなかった」又は「先行研究では不十分だった」と明示することが重要

↓

・クリティカル・リーディング（批判的に読むこと）が必要になってくる

8

クリティカル・リーディング

「批判的に読む」とはどういうことだろうか？

批判＝単に反論するだけでなく、その論を再検討してより良い、より正しい方向へと再構築し直すこと
（佐藤栄編著『アカデミック・スキルズ—大学生のための知的技法入門』慶應義塾大学出版、2006年、79頁）

⇒筆者とともによりよい論をつくりあげること
 ⇒著者の言葉を鵜呑みにせず、「これはどうなんだろう？」と疑ってみることが大事

例えば：

- ・筆者は●●ゆえに○○と述べているけれど、この論理展開はおかしくないだろうか？
- ・この論文ではインドを事例として出しているけれど、本当にインド全体がそうなのだろうか？
- ・筆者が根拠として●●という人の話を出しているけれど、それは本当に根拠として適当なのだろうか？

9

レポートに取り組むために③

レポートのための情報収集

10

資料検索方法—データベースだけじゃない—

- ・データベースを利用した方法
 長所：多くの資料が一度に表示される、キーワードを細かく設定できる
 短所：データベースに収録されていない資料もある、キーワードがうまく設定できないと資料が探せない
- ・イモヅル式資料検索方法
 手に入れた文献を見て、そこに書かれている参考文献を追っていく
 長所：関連度の高い資料を探ることができる、信頼度の高いものや評判の高いものを見つけることができる
 短所：まずはテーマに関連した資料を1つ見つける必要がある、その資料よりも昔の資料しか探すことはできない
- ・ブラウジング
 関係ありそうな書架の本を片っ端から（特に前書きと目次を）見ていく
 長所：データベースにない資料を探ることができる
 思ってもみないキーワードを見つけることがある
 短所：時間がかかる

11

テーマを絞り込むために—まずは基本的知識—

テーマの概要を知る
 辞書・百科事典：
 基本的な知識を身につける
 そのテーマのキーワードを知る⇒検索エンジンへ
 Webcatplus：
 「連想検索」で本を検索してみる
 ⇒実際の本のタイトルを知る
 どんな人がその分野の本を書いているか知る

具体的な資料を読む
 ⇒これまでに言われていることを参考にしながら、自分の扱える範囲にまでテーマを絞る

12

情報整理のススメ

情報整理の方法は多種多様
⇒体系的な方法の一つ決めて使っていくのが重要

・おススメの資料

「第5章 情報整理」佐藤望編著『アカデミック・スキルズ—大学生のための知的技法入門』慶應義塾大学出版、2006年。

「STEP2 第1章 資料の整理—カード方式」花井等・若松篤『論文の書き方マニュアル』有斐閣、1997年。

参考:

13

図 I-5 学習相談メモ



学習相談メモ

☆太枠線内を記入してください。
☆相談内容は書ける範囲で記入してください。
(無理に記入しなくても大丈夫です。)

学部(任意)		学年(任意)	
授業名		教員名 (不明時は曜日と 時限でも可)	
課題内容	レポート プレゼン その他	条件	提出期限： 字数：

相談内容(任意)

※ピアメンター記入事項(担当者：)

※ No. ※ 年 月 日 :

○個人情報の取扱いについて
 記入していただいた内容は、業務の分析・改善、初年次教育に関する研究に利用させていただきます。取扱いに際しましては、「慶應義塾個人情報保護基本方針」に基づくとともに慶應義塾の内部規定である「慶應義塾個人情報保護規定」を遵守し、適正かつ安全に管理いたします。

図 I-6 学習相談アワー説明用擬似レポート

[2行空白]

レポートとは何か——ピアメンから見たレポート

[1行空白]

ピアメン学部 1年 5組

学籍番号 55555555

ピアメン太郎

[2行空白]

1. はじめに

ピアメンへの相談で最も多いのは「そもそもレポートって何ですか」という旨の質問である。この質問は大学での「学問」と高校までの「学習」との乖離を象徴しているように思える。では、レポートとは何であろうか。本稿の目的はレポートとは何であるかを示すことであり、かつそれをレポートの形式で表すことにより一層レポートに関する理解を深めることにある。そこで本稿が導きたい結論は以下のようなになる。すなわち、レポートとは自ら立てた疑問に対して答えとなる主張があり、その主張に説得力をもたせるために必ず客観的なデータや根拠を論理的に論証していく学術文書である。

2. 本論

レポートを定義するために他の文章との比較から行うことにする。松本茂／河野哲也によると、学術文書は形式と内容という二点において異なると述べている。¹つまり、ある程度定まった構成形式に従うことと、個人的な主張ではなく客観的に読者が納得できるような真理に至ることの両方が学術文書には必要ということである。また、佐藤望は感想文との違いを明示しながら、レポートとは「独自の着眼点から、説得力のある論理を展開した文章である」と述べ、オリジナリティの重要性を説いている。²以上より、大学において求められているレポートとは、構成形式に従いつつオリジナリティを論理的に表現した文章であると言える。では、構成形式、オリジナリティ、論理的な文章展開とは何であろうか。

まず、構成形式について述べることにする。基本的な構成形式は序論、本論そして結論という三段構成である。³序論では、テーマの導入とそのテーマに関する問題提起、そして論文の主張までを行う。そのテーマの重要性、つまりその論文に意義があるかどうかを示すためにテーマの導入は重要な働きをする。また、問題提起と主張がレポートの存在要件である限り、それが重要であるのに異論はないだろう。つまり、序論とは読者に関心を持

¹ 松本茂・河野哲也、『大学生のための「読む書くプレゼンディベート」の方法』、東京：玉川大学出版部、2007年、47～48頁。

² 佐藤望[編著]・湯川武・横山千晶・近藤明彦、『アカデミック・スキルズ——大学生のための知的技法入門』、東京：慶應義塾大学出版会、2006年、110～112頁。

³ 研究分野においてある程度のバラつきがあるので注意しなければならない。

たせて、かつ論点を見失わせないためにある部分と言ってよいだろう。次に本論とは、問いから主張へと至るプロセスを論理的かつ客観的に示す部分である。一言で表現すると、論証を行う部分ということになる。ここで主張に説得力を持たせるためにデータや証拠を示す必要があり、なおかつその論証が後述する論理的な文章展開になっていなくてはならない。よって、論証が論文の出来を左右すると言ってよいだろう。どんなに問題設定がうまくいってもその主張に説得力がなければ、その論文は問いに対しての答えを明確に示せたとはいえないのである。最後に結論では、これまでの論証の流れとそれによって導き出した主張を端的に要約する。ここでの注意は、新たな議論や主張を持ち込まないことである。場合によっては論文に関して客観的な評価を加える場合もあるが、基本的には論文の要約と主張を述べるのが結論部で行うことである。このように、論文には序論、本論、結論という従うべき構成形式があることがわかった。

では、オリジナリティとは何であろうか。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・
最後に論理的な文章展開について述べる。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・

3. おわりに

本稿では、まずレポートと他の文章との違いを明確にすることでレポートを定義付け、構成形式、オリジナリティ、また論理的な文章展開というレポートの三つの特徴を捉えた。そして、それらを具体的に説明することでレポートがどのような文書なのかを明示することができたと思われる。また、本稿自体がレポート形式であることによって、本稿自体が本稿の問いに対する明確な主張であるとも言える。しかし残念ながら本稿では、タイムマネジメント、アウトライン作成の重要性、それから実際の論文作成における多くのテクニックについて述べるができなかったが、それらはピアメンの学習指導に託したい。⁴

【参考文献】

木下是雄、『理科系の作文技術』、東京：中央公論社、1981年。
河野哲也、『レポート・論文の書き方入門』、東京：慶應義塾大学出版会、1997年。
佐藤望[編著]・湯川武・横山千晶・近藤明彦、『アカデミック・スキルズ——大学生のための知的技法入門』、東京：慶應義塾大学出版会、2006年。
戸田山和久、『論文の教室——レポートから卒論まで』、東京：日本放送出版協会、2002年。
松本茂・河野哲也、『大学生のための「読む書くプレゼンディベート」の方法』、東京：玉川大学出版部、2007年。

⁴ ここで言うテクニックとは、例えば書ける所から書いてみることや、完成後に読み直しを行うことなどである。

図書館スタッフから見た学習相談アワー

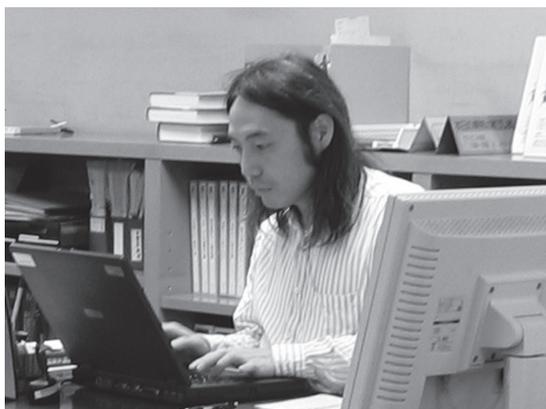
日吉メディアセンターの図書館スタッフとして、本プロジェクトの立ち上げから関わり、初代・二代目ピア・メンターを指導するとともに、学習相談アワーの基礎を作り上げた島田貴史氏（現理工学部メディアセンター）に、本プロジェクトの立ち上げの経緯・特色・学習相談員の印象および今後の課題について語っていただいた。

本プロジェクトのきっかけは平成19年度に実施した教員サポートワークショップである。ワークショップでは、授業で使える文献検索技法などを中心に説明を行ったが、その中で、学生から寄せられる質問例を紹介した（注1）。内容は、課題の答えを直接求めるものから、レポート・プレゼンなどの勉強の方法論に関するものや課題を行うことへの漠然とした不安まで含まれていた。自律的な学習、問題発見・解決型教育といった新しいアプローチは導入されたが、学習者の立場に立つと、高校までに必要とする技術や経験を学んでいないのが実情であろう。ワークショップの末尾でこのギャップを埋める英米圏の大学図書館における試みを紹介し、後日、教養研究センター所長・副所長と日吉図書館での実現性について会合を持ったのが本プロジェクトの始まりである。サービスはしたいが学習に関する技術のノウハウの不足する図書館と、ノウハウはあっても研究や授業で多忙な教員の両者が、得意分野を持ち寄り、連携するという方向性が定まった。

国内の先行例と慶應日吉モデルの大きな違いが2点ある。1つは慶應義塾の伝統である「半学半教」の精神である。支援というと受ける側を中心に考えがちだが、支援する側の学生の経験を豊かにすることも意図している。具体的には、1・2年次に教養研究センター設置の「アカデミック・スキルズ」既習者をスタッフとして採用し、彼らに授業で習ったことを実践する場を提供することを強く意識した。また、図書館で行ったフォーカスグループインタビューによると、相談者が質問したい相手は「トピックに詳しい身近な人（≒先輩）」が多いことが分かり（注2）、同じ目線で伴走する「メンター」としては学生相談員が良いという判断となった。もう一つが教養研究センターの存在である。国内の先行例では、図書館主体か教員主体に大別できるが、日吉モデルでは教養研究センター（教員コミュニティ）と図書館（事務）の連携に特徴がある。例えば、学生スタッフの推薦は教員が行い、彼らへのトレーニングは図書館スタッフという具合で有機的に連携を行っている。

学習相談員（メンター）は図書館のレファレンスデスクで、図書館スタッフと並んでサービスを行っている。図書館スタッフに映る相談員の姿について触れたい。まず、彼らの良い点を3つ。1つめは利用者との距離の近さである。相手が何を考えているかを聞き出すテクニックを図書館スタッフは意識して学ぶが、彼らは友達感覚で自然に引き出してしまう。2つめは経験の強みである。現在の図書館スタッフは少し前の教育を受けており、授業の課題でプレゼンやディベートなどは経験していない。一方、彼らにはその経験があり、具体的なアドバイスを行うことができる。3つめは訓練を受けたアカデミック・スキルズである。個人差があるので一概には言えないが、レベルの高い相談員は、問題設定、論理展開、収集文献の使い方といった項目まで対応し、自分なりの提案ができています。教養研究センター「アカデミック・スキルズ」で基礎を習い、進級した先での研究活動を経て、経験を積みつつある彼らの武器である。また、そこまで経験を積んでいない相談員でも、課題文と一緒に読み問題の所在を考える、授業で紹介された資料の引用文献や検索端末を使って参考図書を紹介する、といった相談内容には十分に対

応できる。指導するのではなく、質問者と共に考える、という基本方針に合致している。あえて課題をあげるとすれば彼らの自主性だろう。実験段階では教員・図書館スタッフが考えるサービスを提供してきたが、今後は相談員発のアイデアや企画も必要となってくる。従来の学生アルバイトから一歩前を出て、学生スタッフとして運営に参画してもらうことを期待したい。そのためにはいくつかの段階が必要で、この点では、図書館スタッフも貢献が可能であるように感じている。



現時点で考えている課題は4点ある。1つめは人材の確保である。相談員は学生であるため、個人で継続できる年数には限りがある。訓練を受けた学生の継続的な確保が課題となる。また、これまでは学生スタッフ全員が日本人の男子学生であったが、留学生や女子学生の採用も必要だと考えている。2つめは配布資料の整備である。学生が対応する、といっても、相談するにはちょっとした勇気がある。配布資料が提供できればサービスの代替物となり、反対に対面サービスへの呼び水にもなる。資料の作成にあたっては、教養研究センター教員とのさらなる協力をしていきたい。3つめが独自企画や学内行事との連携である。この面では、平成21年11月に二度実施した「アカデミック・スキルズ公開授業」が参考となる。2回目の授業では、正規学生20名に対しゲストが7名であったが、直接参加はしていないがセミナー会場周辺でセミナーを眺めている学生たちの姿が印象的であった。企画を実施することが広報や活動内容への理解を深める手立てとなるかもしれない。4つめは「コミュニケーションの場」の形成である。本プロジェクトの主たる目標は「学習の支援」であるが、より大きな課題は「キャンパスにおける学生の居場所作り」である。近年は学習面での不安が原因で学業に支障をきたす学生が増加している。その一部に対してだけでも、止まり木の役割をはたすことができればと考えている。この点では、学生相談室など関係する部局との連携が必要となろう。

(注1) 教養研究センター編. メディアセンター・サービス活用術. 横浜, 慶應義塾大学教養研究センター, 2008, (CLA アーカイブズ, 11)

(注2) 本書 p.10 注3) 参照。

Ⅱ. プロジェクト活動実績

2008年度から始まった「学生の学習環境を整えるプロジェクト」(学び場プロジェクト)は、「学習相談アワー」を中心的な活動に位置づけつつ、プロジェクトのさらなる展開を模索するために「アカデミック・スキルズ公開講座」と「学習相談員による企画展示」という新しい活動にも取り組んできた。本章では、本プロジェクトの2年間の活動をまとめてみたい。

1. 活動日程

2008年

- 4月28日(月) 第1回 学生の学習環境を整える取り組みに関する意見交換(於:日吉メディアセンター所長室)
- 10月16日(木) 第2回 学生の学習環境を整える取り組みに関する意見交換(於:日吉メディアセンター所長室)
- 11月13日(木) 2008年度学習相談員オリエンテーション(於:日吉メディアセンター)
- 11月27日、12月4日、12月11日、18日 毎週木曜日 14:00~17:00 2008年度秋学期学習相談アワー(4日間)
- 12月24日(水) 2008年度秋学期・学習相談員反省会と2009年度活動計画(於:日吉メディアセンター)

2009年

- 3月25日(水) 学生の学習環境を整えるプロジェクト2009年度活動計画(於:日吉メディアセンター)
- 5月18日(月)、5月20日(水) 2009年度学習相談員選考(於:来往舎1階応接会議室)
- 5月28日(木) 2009年度学習相談員との顔合わせ(於:来往舎1階応接会議室)
- 6月8日(月)~7月10日(金) 平日13:00~18:00 2009年度春学期学習相談アワー(25日間)
- 7月30日(木) 2009年度春学期学習相談員反省会(於:来往舎1階応接会議室)

- 10月2日(金) 2009年度秋学期学習相談員キックオフミーティング(於:来往舎1階応接会議室)
- 学生相談室の佐藤暁子氏による、相談者の質問を受ける際の注意点、相談を受けるにあたっての心構えなどのアドバイス
- 10月5日(月)~2010年1月15日(金) 平日13:00~18:00 2009年度秋学期学習相談アワー(57日間)
- 除外日:11/18(水)~11/24(火)、12/23(水)~1/5(火)
- 10月14日(水) アカデミック・スキルズ公開講座①
- 11月4日(水) アカデミック・スキルズ公開講座②
- 11月30日(月) 学習相談員ミーティング(於:来往舎1階応接会議室)
- 12月17日(木) 学生の学習環境を整えるプロジェクト活動報告書作成打ち合わせ(於:来往舎1階応接会議室)

2010年

- 1月8日(金)~2月10日(水) 学習相談員企画展示「レポートに困っていませんか?」(於:日吉メディアセンター1階IA(ラウンジ))
- 2月8日(月) 2009年度秋学期学習相談員反省会(於:来往舎1階応接会議室)

2. 学習相談アワーの運用体制と実績

(1) 運用体制

「学習相談アワー」の実験期間である2008年秋学期に

については、学習相談員（ピア・メンター）は日頃研究活動に携わっている大学院生がふさわしいと考えた。結果として、アカデミック・スキルズ修了生で大学院社会学研究科修士課程1年在籍中の大学院生に、学習相談員として対応してもらった。

2009年度については、学習相談員を増員し活動をより展開するために、学部生から募集した。ただし、2008年の学習相談員が引き続き本活動に参加してくれたことにより、当初のねらいである活動の継承が実現できた。学部学生が入る場合でも、リーダー役として大学院生が混じれば、相談員間での知識やノウハウの継承がスムーズにいく。

2009年度に学習相談を行ったのは、過年度に「アカデミック・スキルズ」を履修した本学の学生6名で所属・学年(学年は2009年4月1日現在)は下記のとおりである。

大学院社会学研究科修士課程2年	1名
商学部4年	1名
法学部3年	1名
経済学部2年	2名
理工学部2年	1名

2009年度の春・秋学期とも、同じ6名の学生が授業の1コマを最低単位としてローテーションをつくり、各時間とも1名が担当した。各人の担当コマ数は、週2あるいは3であった。日吉キャンパスに在籍する学部2年生の3名は、授業の合間に学習相談を行った。一方、学部3、4年生と修士課程の3名は三田キャンパスで授業を履修しているため、この学習相談のために日吉キャンパスに来ていた。6名の学生は本学教養研究センターの臨時職員として雇用し、担当（勤務）時間に応じ、本学所定の時給を支払った。

(2) 実施場所

実施場所は、日吉図書館1階レファレンスデスクで、学習相談員の学生が図書館スタッフと並んでデスクに座った。相談者はデスク前の椅子に座り、相談員は必要に応じデスク上のパソコンを使って説明した（図Ⅱ-1）。

レファレンスデスク脇には、コンピュータやネットワークの使い方に関する質問に対応するITC学生コンサルタントのデスクが設けられている。ITC学生コンサルタントは、図書館内に設置された109台のパソコンや利用者自身のパソコンの利用（主にネットワーク関係）に関する

質問に対応する。レファレンスデスク前に設置された20台のパソコンが日吉キャンパスで最も利用されているため、図書館外の同様のデスクに比べて質問も多い。学習相談員同様、ITC学生コンサルタントも本学の学生を臨時職員として雇用しているが、管轄部署は慶應義塾のネットワークを管理・運用する部署である日吉インフォメーションテクノロジーセンター（日吉ITC）である。

レファレンスデスクを実施場所とすることで、①利用者の相談内容に応じ図書館スタッフあるいはITC学生コンサルタントがすぐ対応できる、②学習相談員が図書館スタッフの対応ととなりで学べる、というメリットがある。

2008年度および2009年度春学期には、学習相談員の座る位置はレファレンスデスク向かって左側だったが、2009年度秋学期は右側とした。デスク右側は利用者が図書館に入館して直進する動線のすぐ脇に当たり（図Ⅱ-2参照）、より多くの利用者の目に触れる場所である。「学



図Ⅱ-1 2009年度秋学期のレファレンスデスクの様子（左から図書館スタッフ、学習相談に来た学生、学習相談員）
*写真の左にITCコンサルタントのデスクがある



図Ⅱ-2 実施場所全景
*手前空間が図書館入口から直進する通路。右の枠外には貸出・返却カウンターがある。

習相談」を周知させ、相談者を増やすことを目的とした。同じレファレンスデスクで学習相談を行うことに加え、利用者の目に触れやすくなったことが一般的な図書館利用やレファレンスの窓口になってしまったことは否定できない。

また、レファレンスの図書館スタッフが利用者対応中に、新たな利用者が学習相談員にレファレンス質問を行うケースも多く見受けられた。レファレンスデスクの大きさから図書館スタッフと学習相談員の2名に加え、もう1名の図書館スタッフを配置することが難しいことがこの1つの要因である。

(3) 実施日時・日数

2008年度秋学期

11/27, 12/4, 12/11, 12/11 (計4日) 木 14:00～17:00

2009年度春学期

6/8～7/10 (計25日) 月～金 13:00～18:00

2009年度秋学期

2009/10/5～2010/1/15 (三田祭11/18～24・冬休み期間12/23～1/5を除く) (計57日) 月～金 13:00～18:00

2008年度は、学習相談のニーズを確認するという形で開始したため、実施日数は計4日と少ない。また2009年度も、経常的な予算を原資としないという意味で試行という位置づけである。

2009年度は授業開始1ヶ月後の5月のゴールデンウィーク明けから実施したかったが、学習相談員の募集・選定等準備に時間がかかり6月からの開始となった。

休業期間、春学期・秋学期の試験期間(2009年度は

2009/7/16～28、2010/1/21～2/3) およびその直前の1週間は、レポートの提出やプレゼンを課す授業が少なく、結果、相談者も少ないと考えられ、実施対象期間としなかった。午前中は図書館の利用者ひいてはレファレンスデスクに来る利用者も少ないため、相談時間は午後に限定了。さらに、相談者の便宜に加えて、担当する相談員が4時限終了後の16:30からも勤務しやすいことを考慮し、レファレンス業務が終わる17:00から1時間後の18:00を終了時刻とした。

(4) 相談受付件数と内訳

相談受付件数は下記のとおりである。

2008年度 9件 (平均2.25件/日)

2009年度春学期 60件 (平均2.4件/日)

2009年度秋学期 119件 (平均2.1件/日) (学習相談メモだけでは36件 平均0.6件/日)

2008年度および2009年度春学期は、学習相談メモに残された分のみをカウントしている。

2009年度秋学期は、メモだけでなく、それまでカウントしていなかったおおよそ3分未満の「軽微」な対応を件数に加えた。

2009年度秋学期57日間での相談受付件数119件(平均2.1件/日)という数字では、相談員によって「ある1日の担当時間中1人も相談者が来なかった」というのも珍しいことではない。しかし、図書館スタッフが同じ57日間に受けたレファレンスも696件(12.2件/日)である。この696という数字は、①同様に軽微な対応も含む、②電話で受け付けたものも含む、③レファレンスの受付時間は8.25時間/日(8:45～17:00)(学習相談は5時間/日)である、ことから生まれたものである。さらに、学習相談では、①1件の対応に30分程度かかることも多い、②他に回した

表Ⅱ-1 時限別相談件数

時限	3限+休	4限+休	5限	不明	合計
前期	14	12	23	11	60
後期	8	5	13	6	35
合計	22	17	36	17	95

表Ⅱ-2 時間帯別相談件数

時間帯	13:00～	14:00～	15:00～	16:00～	17:00～	不明	合計
前期	6	12	7	12	12	11	60
後期	2	5	3	5	8	12	35
合計	8	17	10	17	20	23	95

ものは別途カウントしている、ことを考慮すると、レファレンスと比べて必ずしも相談件数は少なくない。

①時間帯・時限別相談件数

まず、相談件数を時間別に見てみると、表Ⅱ-1・表Ⅱ-2のようになる。

13時から1時間の間は相談件数が少ないが、時限で見るとどの時間帯にも一定数以上の相談があった。このことから、午後を通して学習相談員の需要があるということが分かる。また、5限の時間帯に相談が多いということも表から読み取れる。この原因としては、17時にレファレンスの窓口が閉まるため、レファレンスの窓口に来るような学生が学習相談の窓口を利用したということが考えられる。単なる情報検索の相談からレポートの書き方等の学習相談へと発展するケースがこの時間帯に多いことも予測される。また、学生の生活時間帯としてこの時間に相談しやすいということも考えられる。

②相談内容別件数

相談を内容別にみると、表Ⅱ-3のとおり本来の業務で

あるレポート・プレゼンの相談以外にも対応していることが分かる。表Ⅱ-4は、相談をレファレンスの図書館スタッフやITC学生コンサルタントに転送したものの件数である。また表Ⅱ-5は、相談員が即時対応した（対応の詳細をメモに残していない）あるいは転送した質問内容である。表Ⅱ-4および表Ⅱ-5で質問が多岐に渡っていることから、利用者がカウンターにいる人の区別がつかずあるいは区別せず、「取り敢えず目に付いた人に質問した」ことが分かる。

③相談者の属性別件数

表Ⅱ-6は、2009年度の相談を相談者の属性別に見たものである。相談者は、湘南藤沢キャンパスの1年生、日吉キャンパス内の高校（塾高）生や三田キャンパスの3・4年生まで多岐に渡っており、「卒業論文」の相談もあった。これらの学生も常に日吉図書館に入館しているので、相談があるのもごく当たり前のことと考えられる。高校や他のキャンパスで学習相談の需要があることの証左である。

表Ⅱ-3 内容別相談件数（2009年度）

内容 月	レポート・ プレゼン	資料の探し方	レポート・プレ ゼン+探し方	PC 関連	利用案内	その他	合計
6月	19	19	3	1	0	0	42
7月	11	6	1	0	0	0	18
10月	4 (2)	6 (5)	0	3 (3)	12 (12)	4 (4)	29 (26)
11月	5 (4)	10 (9)	2	0	5 (5)	1 (1)	23 (19)
12月	18 (9)	15 (3)	0	2 (2)	14 (14)	1 (1)	50 (29)
1月	7	3 (2)	0	2 (2)	5 (5)	0	17 (9)
合計	64 (15)	59	6	8 (7)	36 (36)	6 (6)	179 (83)

* ()内は「軽微な」対応の件数

表Ⅱ-4 学習相談員が直接答えず他に転送した相談内容・件数（2009年度秋学期）

内容 月	レポート・ プレゼン	資料の探し方	PC 関連	利用案内	その他	合計
10月	0	11	13	17	3	44
11月	0	17	1	13	0	31
12月	0	6	2	12	0	20
1月	2	1	1	2	0	6
合計	2	35	17	44	3	101

表Ⅱ-5 相談員が即時対応あるいは転送した相談内容

- 図書館の利用案内
 - ・図書館内でのコピー機の場所
 - ・CDの忘れものについて
 - ・他大学の図書館利用について
 - ・AVホールへの行き方
 - ・協生館の資料が借りられるか
 - ・AV資料を利用したい
 - ・学外の資料を取り寄せたい
 - ・○○研究室にある本を借りたい
- 資料の探し方
 - ・Japan TimesをPC上で読みたい
 - ・朝日新聞DBの使い方
 - ・雑誌のバックナンバーは古いものでどこまであるか知りたい
 - ・○○年鑑の最新版以外のものがどこにあるか知りたい
- PC関連
 - ・PCにログインできない
 - ・ネットワークアカウントの取得方法
 - ・USBメモリを貸してほしい
 - ・スキャナ付きのパソコンを使いたい
 - ・PDFファイルの画像をパワーポイントのスライドにはりつけたい
 - ・ITCの貸出PCの無線LANが使えない
- その他
 - ・三田の就活課の電話番号を教えてください
 - ・理工学部のRenandiの利用方法を教えてください
 - ・筆記用具を貸してほしい

表Ⅱ-6 相談者の属性別相談件数（2009年度）

学部	学年	1	2	3	4	不明	合計
	文		9		1	1	2
経済		12	3	1		2	14
法	法律学科	4	1				4
	政治学科	6	2			1	9
	学科不明	5	1			3	7
商		3	2	1		1	5
医							0
理工		4				1	5
環境情報		1					1
薬						1	1
塾高		1				2	2
不明		22				15	37
合計		67	9	3	1	28	97

(5) 学習相談員による資料作成

相談対応の合間に説明用・配布用資料を作成している。これまでの相談内容を整理し、相談を受けていく中で共通して必要であると考えられる「レポートに取り組むために」(図 I-4) 等の説明用の資料を作成し、相談対応に活かしている。その他に、気軽に手に取れるような配布資料や、学習相談員が所属している学部や専攻しているテーマで学生の立場からみたおすすめのデータベースや入門的なブックガイドの作成も試みている。どのような資料をどのように作成する必要があるか試行錯誤している段階である。

3. その他の活動

学習相談員は本プロジェクトは、学習相談アワー以外の活動として、アカデミック・スキルズ公開講座と学習相談員による企画展示を行った。以下、それぞれについて述べていきたい。

(1) アカデミック・スキルズ公開講座

①学習相談とアカデミック・スキルズの連携

アカデミック・スキルズとは、教養研究センターが設置している科目である。多分野にまたがる複数の教員が担当する少人数セミナー形式の授業であり、「自ら考え、調べ、論ずること」の体得を目的としている。日吉メディアセンターでは、情報リテラシー教育の一環としてアカデミック・スキルズに出講し、全3クラスの1コマあるいは2コマの授業を担当している。クラスによってはメディアセンター内で授業を行うこともある⁵⁾。

学び場プロジェクトは学習相談員の人選と相談対応時の説明資料においてアカデミック・スキルズの協力を得ている。学習相談員の人選は教養研究センターが担当しており、アカデミック・スキルズで優秀な成績を修めた学生から選出している。また、学習相談員は論文の見本として『アカデミック・スキルズ学生論文集』を相談者に紹介している。これはアカデミック・スキルズを履修した学生が執筆した論文をまとめたものである。

学び場プロジェクトにおける2009年度の新しい企画として、アカデミック・スキルズを担当している教員から

一部の講義を公開講座にしてはどうかという提案があった。目的はアカデミック・スキルズで行っているレポートやプレゼンテーションに関する講義を公開し、「レポートとは何か」ということについて悩んでいるより多くの人をサポートすることである。

さらに公開講座での配布物は、このプロジェクトの成果物としてパンフレット等にまとめ、公開講座に参加できなかった人への情報提供として利用したいと考えている。学習相談アワーでは学生がレポートの取り組み方やプレゼンテーションの基本についての個別の相談に対応しているが、アカデミック・スキルズ公開講座は教員からの新たなサポートのあり方を模索する試みといえる。メディアセンターにとっても、メディアセンター内で公開講座を開催することにより、教員と学生または学生同士が知的に交流する場所を提供できるのではないかと考えている。

②公開講座の開催

2009年10月14日(水)と11月4日(水)に日吉メディアセンター1階のセミナーコーナーで公開講座を開催した。セミナーコーナーで開催した理由は、プラズマディスプレイや人数に応じて組み合わせを変えられる机と椅子といった設備があり、開放的なスペースで行いたいという教員からの要望にも対応できる場所だったからである。広報は3つの方法で行った。来往舎の教員メールボックスへのちらしの配布、日吉メディアセンターのウェブページへのニュースの掲載、メディアセンター内でのポスター掲示である。教員メールボックスへちらしを配布

図 II-3 アカデミック・スキルズ公開講座講義風景



5) 慶應義塾大学教養研究センター ReCLA <http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/event/zikken.html> (参照2010.1.26)

したのは、教員から学生への紹介を期待したからである。1回目の10月14日は、横山千晶教授が「プレゼンテーションの基本」、篠原俊吾教授が「テーマを決める、選ぶ」という内容の講義を約60分行った。参加者はアカデミック・スキルズを履修している学生18名と教員5名であった。履修者以外の参加者がいなかったのは、開催決定から開催までの期間が短かったため十分な広報ができなかったということが考えられる。しかし、周囲で自習していた学生は聞いている様子であった。

2回目の11月4日は、横山千晶教授がコーディネーターを務め、「さまざまな論点のマッピングと要約」というテーマでグループワークを行った。5名で1グループとなり、複数の新聞記事を分担して要約し、1枚の紙にマッピングするという作業を行った。作業後はグループごとに発表し、それに対して教員がコメントしまとめを行った。同じ新聞記事を読んでいるにも関わらず、グループごとに様々なまとめ方があり、参加者同士刺激を受けている様子であった。2回目の参加者は学生20名と教員5名であった。学生20名のうち7名は履修者以外の受講者で、大学院生、学習相談員、塾生新聞の記者が参加していた。塾生新聞の記者がいたのは、日吉メディアセンターが行っている情報リテラシー教育について公開講座直前に取材依頼があったためである。実際の授業の様子を知りたいと希望したことから、情報リテラシー教育で関わっているアカデミック・スキルズの公開講座に参加してもらった。

今回開催した結果、周囲にいた学生が講義に耳を傾けていたことや履修者以外の受講者も得られたことから、公開講座に対するニーズがあると考えられる。

図Ⅱ-4 アカデミック・スキルズ公開講座発表風景



③実施概要

a. 第1回公開講座

日時：2009年10月14日（水）16：30～17：30（約60分）

場所：日吉メディアセンター1階セミナーコーナー

内容：①「プレゼンテーションの基本」（横山千晶法学部教授）

②「テーマを決める、選ぶ」（篠原俊吾法学部教授）

参加人数：学生18名、教員5名

b. 第2回公開講座

日時：2009年11月4日（水）16：30～18：00

場所：日吉メディアセンター1階セミナーコーナー

内容：「さまざまな論点のマッピングと要約」（横山千晶法学部教授）

参加人数：学生20名、教員5名

(2)学習相談員企画展示「レポートに困っていませんか？」

①企画立案

学習相談員はレファレンスデスクにおける相談対応だけではなく、積極的に学生に働きかけていくために、様々な企画の立案を行っている。

2009年度の企画は、レポートやプレゼンに関する図書紹介、学生と教授のノート紹介（図Ⅲ-5）、学習相談員が学生に向けてレポートについてプレゼンテーションを行う（図Ⅲ-6）という3つの案を検討し、試みとして図書紹介を行うことになった。

②展示内容

2010年1月8日（金）～2月10日（水）に日吉メディアセンター1階のIA（ラウンジ）にレポートに関するオススメ本を展示した。6人の学習相談員が「レポートとは何か」、「参考文献の使い方」、「要約の仕方」、「テーマの決め方」、「情報収集のコツ」、「情報の組み合わせ方」の6つのポイントを分担し、ポイントごとに解決法とオススメ本を紹介した（図Ⅱ-5）。オススメ本として展示した図書は17件で、貸出できるようにした。

今回の展示の狙いは、これまで受けた相談内容を踏まえて学生が躓きやすいポイントごとに図書を紹介すること、そして学習相談アワーと学習相談員の存在を知ってもらうことの2点であった。展示開始が学習相談アワーの終了1週間前となってしまったため、相談件数には大

きく影響を及ぼさなかったと考えられる。しかし、展示した図書のうち数冊はすぐに借りられていた。今回の経験を活かして、来年度も学習相談員の企画を継続していく予定である。

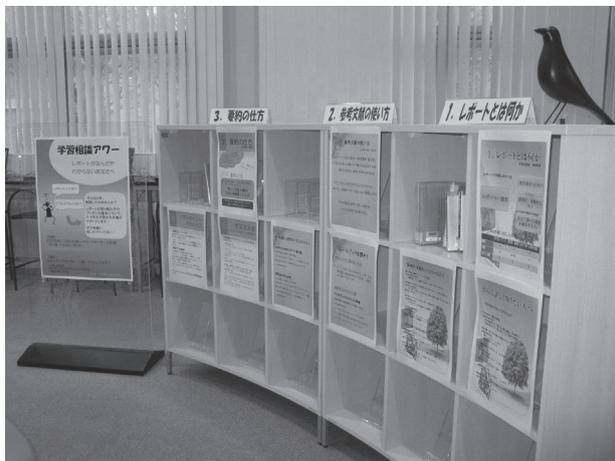
③実施概要

日時：2010年1月8日（金）～2月10日（水）
 場所：日吉メディアセンター1階IA（ラウンジ）
 内容：図書紹介・学習相談アワーへの誘導

展示した資料

1. 佐藤望, 湯川武, 横山千晶, 近藤明彦. アカデミック・スキルズ: 大学生のための知的技法入門. 慶應義塾大学出版会, 2006.10, 160p.
2. 八幡紘芦史. (図解) リサーチの技術: 情報の戦略的な収集法から仮説立案まで: パッと見てピンとくる! PHP 研究所, 2005.4, 221p.
3. 吉田健正. 大学生と大学院生のためのレポート・論文の書き方. 第2版. ナカニシヤ出版, 2004.4, 151p.
4. 小林康夫, 船曳建夫. 知の技法: 東京大学教養学部「基礎演習」テキスト. 東京大学出版会, 1994.4, 283p.
5. 小笠原喜康. 大学生のためのレポート・論文術. 講談社, 2002.4, 221p., (講談社現代新書, 1603)
6. 山内志朗. ぎりぎり合格への論文マニュアル. 平凡社, 2001.9, 211p., (平凡社新書, 103)
7. 川喜田二郎. KJ法: 渾沌をして語らしめる. 中央公論社, 1996.6, 604p., (川喜田二郎著作集, 5)
8. 川喜田二郎. KJ法: 渾沌をして語らしめる. 中央公論社, 1986.11, 581p.
9. 川喜田二郎. 発想法: 創造性開発のために. 中央公論社, 1967.6, 202p., (中公新書, 136)
10. 戸田山和久. 論文の教室: レポートから卒論まで. 日本放送出版協会, 2002.11, 297p., (NHK ブックス, 954)
11. 木下是雄. 理科系の作文技術. 中央公論社; 中央公論新社, 1981.9, 244p., (中公新書, 624)
12. 松本茂, 河野哲也. 大学生のための「読む・書く・プレゼン・ディベート」の方法. 玉川大学出版部, 2007.3, 159p.
13. 江下雅之. レポートの作り方: 情報収集からプレゼンテーションまで. 中央公論新社, 2003.10, 260p., (中公新書, 1718)
14. 河野哲也. レポート・論文の書き方入門. 第3版. 慶應義塾大学出版会, 2002.12, 116p.
15. 瀧川好夫. アピールできるレポート/論文はこう書く!: レポートから学術論文まで. 税務経理協会, 2004.10, 115p.
16. 野矢茂樹. 論理トレーニング101題. 産業図書, 2001.5, 182p.
17. 文芸春秋編. 日本の論点 2009. 文芸春秋, 2009.1, 829p.

図Ⅱ-5 「レポートに困っていませんか？」展示風景



Ⅲ. 活動成果・活動から見えてきたもの

「学習相談アワー」に寄せられた相談内容には、大学の学習に対する学生のとまどいが如実に現れている。本章では相談内容を分析し、学生の躓きの原因はどこにあるか、躓きを克服させるにどのような支援が効果的かを考察していく。また、学習相談アワーを行う中で学生相談員（ピア・メンター）がどのような困難や問題にぶつかり解決していったか、そのような試行錯誤を経つつ、どのように本活動を内容の充実し、発展性のある活動にしていったかをまとめたい。

1. 2009年度学習相談メモまとめ

2008年度に引き続き、2009年度も学習相談の内容を「学習相談メモ」に残し、今後の参考として記録した⁶⁾。この学習相談メモに残されている相談は、前期60件、後期36件、合計96件であった（第2部資料編「学習相談メモ」参照）。

2. 相談内容の分析

相談内容を授業の種類別の件数で見ると、特に目立つのが、アカデミック・スキルズ等の少人数セミナーの形式をとる授業、そして語学の授業に関わる相談である。表Ⅲ-1にその件数を記した。なお、カッコ内はセミナー形式の授業の内、アカデミック・スキルズ、スタディ・スキルズといった、レポートやプレゼンテーションの取り組み方について扱う授業の数である。

表Ⅲ-1 授業の種類別相談件数（2009年度）

種類	語学	セミナー
前期	2	11(7)
後期	11	3(2)
合計	13	14(9)

これら二つに共通するのはアウトプットの重視である。少人数セミナー形式の授業は大人数の講義形式の授業とは異なり、レポートやプレゼンテーションといったアウトプットの要素が重視されている。同様に、近年の語学の授業の傾向としてアウトプットが重視されているといわれる。これらの授業に関係した相談が多かったのは、単純に他の授業に比べてレポートやプレゼンテーションの課題が多いということがまず考えられる。しかしそれだけでなく、それらの授業を履修している学生であっても、授業内容だけではレポートに取り組むには不安が残るといことも考えられよう。特に、レポートやプレゼンテーションの方法が主たるテーマではない授業では、アウトプットの機会は増えたがその方法を学ぶ機会が十分に用意されていないということが考えられる。また、レポートの書き方についての授業を履修している学生も、授業内容だけではレポートに取り組むには不安が残るといことも考えられる。授業以外にもレポートの方法を学ぶ場が求められているとあってよいだろう。

ただし、レポートやプレゼンテーションの取り組み方についての授業を増やせばそれで問題が解決するかという、そう簡単にもいかない。上の表のカッコに記した

6) この学習相談メモは、昨年度および今年度の前期は「カルテ」と呼ばれていた。この変更については後に述べる。なお、情報検索についての相談とレポートの取り組み方・大学での学び方についての相談とを完全に切り分けることは難しいため、メモとして残すべきか否かについての明確な基準は現在のところ設けていない。そのため、各相談員が個別に判断している状態である。ただし、学習相談ならではの相談が記録から抜け落ちないよう、メモに残す範囲を比較的広くとるようにしてはいる。このため、例えば、相談内容を確認した後レファレンスに対応を依頼したといった内容もメモとして残される。しかし、レファレンスの業務だと分かるまでに相談者から言葉を引き出すということも学習相談員の仕事であるとも考えられる。このことから考えて、今回の「学習相談メモ」は、その記録の範囲としては妥当なものだったといえよう。

が、実際、そのような授業からの相談者数は少なからず存在する。授業でレポートやプレゼンの方法について学んでいるしながら、そこにさらに学習相談員（ピア・メンター）との相談を行っているのである。これは、より相談者に近い「先輩」からのアドバイスを学生が求めていることの証明ともなる。

3. 相談内容とそれへの対処法

次に、相談内容についてみていきたい。カルテおよび学習相談メモの記録をもとに、相談内容をまとめると、表Ⅲ-2の結果が得られた。以下、この表の結果をもとに相談内容について詳しく論ずる。なお、相談内容については必ずしも明確に切り分けることはできず、さまざまな内容が複合的な形で相談として現れることが多いため、相談1件につき複数の項目に計上しているものもある。

(1) 「資料が見つからない」という相談

前期・後期を通して最も多かったのが、情報がほしい、資料が見つからないといった相談である。この種の相談が多かった要因の一つとしては、学習相談の窓口がレファレンスコーナーにあり、相談者が学習相談員とレファレンスとをあまり区別せずに相談にくるといことが考えられる。しかし、それだけでなく、学生がレポートで躓く原因として最も大きいものが情報検索についてであるということもまた事実といってよいであろう。学生の実感としては、資料がないというところにレポートやプレゼンテーションの困難はあるのである。

ただし、多くの学生が異口同音に「資料が見つからない」と言ってきたとしても、実際そこには内容の違いが存在

する。これをおおまかに三つに分けると、次のようになる。すなわち、①課題に取り組むための資料がほしいが何をどうすればよいか分からない、②自分の論を支えるための資料がほしい、③特定の情報がほしい、の三つである。

①課題に取り組むための資料がほしいが何をどうすればよいか分からない

これはレポート課題に対してそもそもどのように取り組めばよいか分からないというものである。具体的な相談例でこれにあてはまるのは、例えば学習相談メモ春学期33である。これは、「『男性』の現在と過去——ヨーロッパについて」という課題が出たがどう取り組めばよいか分からないという相談であったが、相談者はテーマ設定ができていなかった。レポートの課題がある程度自由であり、自分でテーマ設定しなければならない場合、このような相談がくることが多い。またこの種の相談は、はじめからレポートの書き方について相談があるというよりも、最初は「〇〇についての資料がほしい」という形で現れる。情報検索の相談だと思って話を聞いていたら、実は情報検索が問題なのではなくレポートの書き方そのものが問題だったという相談例は多い。このような相談者に対しては、レポートとは何かという部分や、テーマ設定の仕方について説明していくこととなるが、この点については後にあらためて触れる。

②自分の論を支えるための資料がほしい

これは、広いテーマの段階を越えて、問いや主張をつくることはできているが、それを論証する方法が明確でないという段階である。ある程度具体的なテーマが設定された課題が出された場合、あるいはテーマ設定はでき

表Ⅲ-2 相談内容別件数（2009年度）

相談内容	前期	後期	合計
資料が見つからない、資料がほしい	23	18	41
レポートとは何かが分からない	14	6	20
テーマ設定のしかたが分からない	8	5	13
論文の書式・構成について知りたい	9	4	13
情報検索の課題について教えてほしい	7	0	7
資料を要約する方法が知りたい	4	1	5
参考文献の使い方が知りたい	4	0	4
プレゼンテーションの方法が知りたい	1	2	3
実験レポートについて教えてほしい	1	1	2

たが具体的にどう進めればよいか分からない場合がこれに当てはまる。この例としては学習相談メモ春学期13があげられる。これは「飲酒は体に良い」という主張は決まっているが、その主張をどう支えたらよいか分からないというものであった。このような相談者に対しては、論の立て方についてのアドバイスをしたり、参考資料をどのように用いたらよいかという点について教えたりすることになる。詳しくは(3)で述べる。

③特定の情報がほしい

これは、レポート完成に着実に近づいているが最後の一步で苦戦しているという段階である。資料さえ見つければレポートはほとんど完成なのだが、望む資料が見つからないという状態と言ってもよい。このよい例は学習相談メモ春学期46である。「ヨーロッパ市民と美術」という課題の中で、「海外に比べて日本では美術や美術館が身近ではない」という自分なりの主張を設定している。そのための資料として美術館の数を知りたいという相談であった。ここまで明確な相談であればレファレンスに対応を依頼することも可能であるが、その情報を使うこと以外の論の支え方についてアドバイスすることも可能である。ほしい資料が出てこない場合にどうするかというアドバイスは、学習相談員ならではの仕事であるといえよう。

このように、「資料がほしい」という相談は、相談者が課題をどの程度明確にしているかという程度によって、いくつかの段階に分けることができる。そしてそれらは多くの場合資料検索の問題にとどまらず、他の問題へと発展していった。資料検索を資料検索にとどめず、そこに教育の機会を見出すことも、学習相談員の仕事の一つの特徴だといえるだろう。また、相談員は相談者の課題進行状況を丹念に聞き出しながら、学生がどこの段階にいるのかを確認していかなければならない。そして、それに応じた対応をすることが求められている。なお、対応のしかたについては次の(2)、(3)で述べる。

(2) 「レポートとは何かが分からない」という相談

情報検索に次いで多かったのが、「そもそもレポートというものがどういうものなのか分からない」という相談であった。いわばレポートに関しての概論的な相談である。これを求める人が多いのは開始当初の予想通りであ

るが、レポート課題に取り組む多くの学生が困難に直面しているということが再度確認されたといつてよいであろう。また、(1)でも述べたとおり、資料を探している学生に対してレポートとは何かということを説明することも頻繁にある。

レポートとは何かが分からないという学生に対しては、レポートの基礎を簡単に教えている。相談員が特に重視したのは、論理的な文章であるということ、自分の意見と引用とを明確に区別すること等である。エッセイや新聞記事、入試の小論文といった、他の文章との違いを踏まえて説明されたことが多かった。また、一口にレポートといっても、単に特定のテーマについて調べてまとめるものから、自分なりの論を展開するものまでさまざまあるということも、多くの場合触れられた。学生が実際に取り組んでいる課題がどれに当てはまるのかを一緒に考えることも相談員の仕事であった。

レポートとは何かということについて、当初は個々の相談員が自分なりに説明をしていたが、やがて共通の資料を使って説明していくようになった。主に使われた資料としては、佐藤望編著『アカデミック・スキルズ』（慶應義塾大学出版会、2006）、「レポートレクチャー用スライド」（図I-4）、「レポートって何？のレポート」（図I-6）があげられる。ここであげた後ろの二つは相談員自らが作成したものであるが、作成の経緯については下で述べる。

また、レポートの形式についても共通で用いられた資料がある。上でもあげた「レポートって何？のレポート」や『アカデミック・スキルズ学生論文集』（以下『論文集』と略す）がそれである。これについても、実際のレポートを見せながら説明する方が伝わりやすかった。実際に文書作成ソフトを使いながら、脚注の付け方等を説明することもあった。

(3) レポートに取り組む際の躓きに関する相談

(2)が概論的な問題だとすると、これは実際にレポートに取り組む際の個別の方法に関する問題である。これにはさまざまな段階・ポイントがある。例えば、①テーマ設定の仕方、②要約の方法、③参考文献の使い方がそれぞれにあたる。

①テーマ設定

この段階で躓いている学生は特に多い。「レポート課題

が出されたが、何をすればよいのか分からない」という相談は、今回の記録にも多く残っている。このような学生に対しては、まずテーマを絞ることないしテーマを絞るための情報を得ることを勧めることが多い。課題について全く調べていない、知識がないという状態であれば、まずは最低限の知識をつけることを勧めている。何も知識のないところから問うべき問題が見えてくるということはないからである。ただし、何のヒントもなく知識をつけるというのではあまりに不親切である。知識をつけるために何を見るかということについてのヒントも提供するようにしている。これについて特に頻繁に利用されたのが、『日本の論点』や『新書マップ』である。学部1・2年生の段階の学生にとって難しすぎないレベルのものとして、これらが多く使われた。

すでにある程度調べていたり、授業で扱ったことが課題になっていたりした場合には、その中から興味のあることを提示してもらっている。ただ、このこと自体はレポートの書き方に関する本であればどの本にも書いてあるであろう。問題なのは、ここで躓いている学生の多くが「それでも何を扱えばいいのか分からない」、「興味を持っていない」といった悩みを抱えているということである。このような場合に相談員が頻繁に行った対処法としては、「興味のあること」という言葉を言い換えることであった。たとえば、「授業の内容で納得いかったことはある?」、「課題の本にツッコミを入れたいところはなかった?」、といったようにである。授業や学術書で用いられる言葉を離れ、学生の生活の中での言葉で問いかけていくことで、相談者の中からトピックが出てくる。こういった事例は多い。おそらくこの段階で躓いてしまう学生は、レポートについて難しく考えてしまっているのだろう。学問の場における「興味」という言葉が難しく響いてしまうのである。そこに研究者である授業担当者が「簡単に考えろ」と言ってもうまく伝わらないことは多いだろう。レポートの書き方についての本も然りである。学生だからこそ、本当に難しく考える必要はないのだと伝えることができる。これは、相談員がピアであることの重要な利点であろう。

②要約のしかた

これについても相談者に問いかけ、一緒に考えていくということが重要なポイントであった。さすがに課題文と一緒に読むということではできないが、その本のキーワー

ドを答えてもらうことによって相談者の熟考を促した。この問いかけも、相談者の反応に応じて様々に言い換えている。たとえば、「印象に残った言葉は?」、「この本を一言で説明すると?」といった具合である。質問攻めにしてしまわないよう注意することは必要であるが、問いかけを変えていく手法は有効であった。相談員とのやり取りの中で、おぼろげだった課題文の輪郭がはっきりしてることが多いようである。もちろん、目次やまえがきを読むことなど、一般的なコツも伝えてはいる。しかし、単なる説明では抽象的な、宙に浮いたものになりがちである。相談員が説明するだけでなく、相談者自身が考えることができるようにその手伝いをするというスタンスをとることで、学習相談員の伝えたいことが具体性を帯びてくる。このスタンスは、学習相談全体を貫くものとして重要であろう。

③参考文献の使い方

これについては一緒に考えるというよりは、説明する方が強かった。やはり参考文献については一種の作法であるため、どうしても説明が勝ってしまう。ただ、何の工夫もしなかったというわけではない。『論文集』を見せて説明することで、実際に筆者がどのように参考文献を使っているのかということを実感してもらっている。

(4) 課題ごとの性格に対応したいという相談

これは、一般的なレポートについての基本を理解した上で、それぞれの課題に対処したいという、いわば各論的な相談である。実験レポートの書き方が知りたい、プレゼンテーションの方法が知りたいといった相談がこれにあたる。

今年度、これらについての相談はあまり多くはなかったが、それでも確実に需要がある。図書館内に貼られたポスターはレポートの書き方を特に強調したものだったが、その中でも相談があったことを考えると、潜在的な需要も多いといえよう。来年度はこれらについてより強く押し出してもよいかもしれない。

プレゼンテーションの方法や実験レポートについても、レポートの書き方一般についてと同様、いくつかの資料が作られている。特に実験レポートについての資料は文系学生が多数を占める現在の相談員構成の中では特に貴重なものである。まだ実際に用いられた回数が少ないため、実践の中で洗練させていく必要があるが、説明のた

めの資料が手元にあるという安心感は、文系の相談員にとって重要である。

3. 学習相談をめぐる問題とそれに対する取り組み

(1) 2008 年度の成果

学習相談員1名で全4回行われた2008年度の学習相談事業では、2009年度の基礎となるような成果と課題を得ることができた。今年度の取り組みについて確認するため、まずはそれらについて確認しておきたい。

主な成果としては、①相談の傾向をおおまかにつかむことができたこと、②相談者から聞くべきことが整理されてきたこと、③相談を受けるべきか否かの線引きが明らかになってきたことの三つである。

①相談の傾向

相談の傾向は、

- a. レポートというものがどういうものかそもそも分からない。
- b. レポートにどう取り組めばいいか分からない。
- c. レポートごとの性格に対応したい。

という三つに分類された。ただ、十分なサンプルが得られているわけではなかったため、おおまかな分類にとどまっていた。どのような相談が多いか、躓き方にどのような傾向があるかといったことについてのさらなる検証は本年度の相談を待たねばならなかった。

②相談者から聞くべきこと

上記のように、相談者の悩みのレベルには様々なものがあるということが確認されていく中、相談者がどこで躓いたのかを明らかにする必要があるという認識が強まっていった。そしてそのための方法として、相談者に何を聞くかということが整理されていった。これについては昨年度末の時点で次のようにまとめられた。

●課題（何が求められているか。要約か、調べて報告するタイプか、主張を展開するものか、自由課題なら自分で決めたテーマは何か）

- 期限
- 形式
- どこまでできていて、どこからができないのか
 - ・レポートがどのようなものかイメージがあるか
 - ・テーマは決まっているか

- ・今までのレポートの経験
- ・検索エンジン・データベースの使い方は分かるか
- ・課題に即してどのように調べていくかの見通しが立っているか

③相談を受けるべきか否かの線引きについて

これは成績や単位に直接結び付くような相談にどう対処するかという問題と大きく関係している。受けてよい相談か、受けてはならない相談かということについては、昨年度開始当初、図書館スタッフのルールを参考にいくつかの区分がなされていた。たとえば、個人情報にかかわる質問には答えない、健康に関する相談は保健管理センターへ、といった具合である。しかし、相談を受ける中で、「成績を上げたい」、「単位がほしい」といった相談に対してどう答えるのかという問題が浮上してきた。学生が学習相談を利用する理由として、これまでの成績が悪かったからということは大いにありうる。そのような相談を断ることは学習で躓いた学生をサポートするという学習相談の趣旨に反するだろう。むしろ積極的に受けていく必要がある。ただその際、学習相談が単位をとる（成績を上げる）ためのものとして考えられてしまうことは避けねばならない。「学習相談員の言う通りにやれば単位が取れる（Aがとれる）」という誤解を与えないように注意しなければならない。このような認識から、単位を取るため、成績を上げるためでなく、大学での学びをより豊かにするために相談の場があるのだというスタンスが、学習相談員に求められるということが確認された。これは2009年度の活動にも生かされている。

(2) 2008 年度の課題

次に課題についてであるが、これは上でも述べた相談の傾向のさらなる分析のほかに、①具体的なアドバイスをするための方法の考案、②学部学科に特殊な課題への対応、③情報の記録の仕方といったことが挙げられていた。

①具体的なアドバイスをするための方法の考案

これはレポートの実物がない状態でアドバイスをしなければならぬ状況での困難から生じた問題意識である。実物のレポートがないために、どれだけ説明しても相談者にすんなり理解してもらえないという状況が何回かあった。また、レポートとはどういうものかということを説明する際、何も見せずに説明するのではイメージ

が湧きづらく、レポートの書き方についての本を見せながらもその場で理解するのが難しそうな状況があった。これらの反省から、レポートの例をレファレンスデスクに置くこと、レポートの書き方については別途資料を作成することが、前年度末に課題として提示された。

②学部学科に特殊な課題への対応

2008年度は相談員が1名だったため、学部特殊な課題についての相談には深いアドバイスができないという欠点があった。実験レポートについての相談がその最たる例である。これについては上記同様実際のレポート例をレファレンスデスクに設置することも解決案として挙げられたが、さらに相談員を増やすということも挙げられた。

③情報の記録の仕方

学習相談の内容は重要な資料として記録を残していた。前年度はこれを「カルテ」としてパソコン内のファイルに情報を記録していたが、これをいかに改善していくかということは大きな課題であった。問題となっていたのは、大きく分けて二点あった。

まずは情報を使用することの承諾を得ることである。取り組みの成果を蓄積し、分析して次に生かすためには、まずその相談内容を利用する許可を相談者から得る必要がある。2008年度も口頭で承諾を得ていたが、それが分かりやすく行われなければならないという反省点があった。

もう一点は、相談者が自分で躰きを理解するようになるということである。昨年度は相談員が相談者の話を聞きながら、それをまとめていくというスタイルをとることが多かった。しかし、その前に一段階、相談者が自らの力で自分の状況を見つめるという段階があってもよいのではないかという意見が出ていた。しかし、カルテを改良するための十分な相談件数が集められていなかったため、カルテ改良は2009年度の取り組みの中で行われるということになった。

(3) 2009年度の取り組み

2008年度の成果と課題をもとに、今年度の取り組みがスタートした。ここではまず、年度当初に考えられていた問題点とそれに対する取り組みを確認したい。

①新学習相談員に対する研修

2009年度から学習相談員の数が増やされた。そ

れにともない、新相談員5名に対する研修が必要となった。この研修をどのように行うかが、年度開始当初の重要な事項であった。研修では(1)(2)で述べた2008年度の成果と課題をもとに、学習相談員の仕事について説明が行われた。その際に用いられた資料は以下の3点である。

- ・メディアセンターのレファレンスデスクでの勤務
- ・学習相談員の仕事
- ・学習相談員のための相談応答フローチャート

(2)でも述べたとおり、2008年度のまとめの時点で相談者が聞くべきこと等はある程度明確化されていた。しかし、相談者に対してどのような態度で接するか、どのようにして相談者の躰きを明らかにしていくかといった、より実践的な部分については明示されていなかった。そこで、2009年度の研修にあたって相談の方法を文章化する作業が行われた。この作業により、前年度の取り組みの成果をより明確にすることができ、プロジェクト全体にとっても意味のあることであった。

②2008年度の課題に対する改善の取り組み

まず、情報の残し方についてである。(2)~③で述べたような反省があったものの、具体的な改善案を作るため

図Ⅲ-1 学習相談員研修用資料①

メディアセンターのレファレンスデスクでの勤務
—良く聞かれる質問とトレーニングが必要な要素—

学習相談員の関連で、レファレンスデスクでの勤務に必要な要素に以下があります。大きく分けると以下の2つになると思います。

1. 施設やサービスに関する知識
2. 情報検索に関する知識

1. は、いわゆる「マニュアル」で対応できる部分ですが、2については、トレーニングが必要だと考えます。

① 施設やサービスに関する知識
この部分は、以下に分割できます。

1. 施設に関する知識（主にコピー機やO×コーナの位置など）
2. サービスに関する知識（詳細は不要だが、どの窓口に行けばよいか指示する）
3. コンピュータに関する知識（コンピュータ相談員に振るが基本だが、不在時のため）
4. 図書館に関する知識（書架の配置、請求記号の読み方、図書館ウェブの使い方など）

いずれも「マニュアル」で対応可能だが、リテラシーの観点から見て、3と4は積極的に学んでも良いかもしれない。

② 情報検索に関する知識
主題専門の検索法と図書館の検索法がある。主題専門の知識は、そのまま生かした方がよいと考えるが、基本が重要という意味で以下の知識は最低限必要。

1. 情報要求の明確化（インタビュー術と言い換えても良い）
2. 辞書・事典、ウェブを使って、トピックの概略を把握し、キーワードを見つける
3. 情報要求に応じた情報源の選択（本が良い場合も、ウェブが良い場合もある）
4. 蔵書目録の基本的な使い方（資料の入手）
5. 図書館の探し方（テーマから図書を探す方法）
6. 雑誌論文、新聞記事の探し方（テーマから雑誌論文、記事を探す方法）
7. 統計データの探し方（基本、特にウェブと冊子体統計資料の関係）
8. 参考文献の書き方（大事なものは「読み方」。書き方は「記録すべき項目」の理解）

文責：島田（日吉メディア、09/04/20）

図Ⅲ-2 学習相談員研修用資料②

<p>学習相談員研修資料③</p> <p style="text-align: center;">学習相談員の仕事</p> <p style="text-align: right;">文責：間篠剛留</p> <p>基本的内容</p> <ul style="list-style-type: none"> ・レポート等への取り組み方（情報の探し方、まとめ方、研究テーマの絞り方など） ・プレゼンテーションのやり方 <p>※上記2点が主な内容ですが、相談は多岐にわたります。中には相談すべきでないものも出てくるでしょう。その場合、下記を参考に対応してください。</p> <p>個々の力量に応じて、図書館内の他の係員と相談しながら対応するもの</p> <ul style="list-style-type: none"> ・リファレンスに関する問い合わせ <ul style="list-style-type: none"> この部分はリファレンスの係員のお仕事と重なるところも多いので、状況に応じてうまく連携していきましょう。特定の資料の探し方はリファレンスの方へ、資料の探し方一般であれば学習相談員へ、というのが大体の目安になると思います。 ・ITに関する問い合わせ <ul style="list-style-type: none"> 具体的に何をどうしたいというイメージが相談者の中で固まっているならIT相談員にお願いするのがよいでしょう。それ以前の問題であれば学習相談員が対応すべきものとなります。 例：「そもそもパワーポイントを使った発表の仕方がわからない」⇒学習相談員 「発表のイメージはあるが、それをパワーポイントでどう実現すればいいのかわからない」⇒IT相談員（連携して対応するのもよいでしょう） <p>学習相談員が対応できない相談</p> <ul style="list-style-type: none"> ・対応できる専門の機関があればそちらへ（より適切な対応ができます） <ul style="list-style-type: none"> ①医療・健康相談⇒保健管理センターへ ②法律相談⇒学生総合センターの法律相談へ ③身上相談⇒学生相談室又は学生総合センターへ ④履修相談⇒制度的なものは学事センターへ ・上記以外で対応できないもの <ul style="list-style-type: none"> ⑤他人の権利を侵す質問 例：教員の連絡先が知りたい（ホームページなど公開された情報を除く） ⑥仮定、または将来の予測に関する質問 例：次の試験でどんな問題がでますか？ ⑦単位・成績の取得に関して直接的な支援を要求するもの 例：文章の添削をしてほしい、レポートを代筆してほしい、 	<p style="text-align: center;">A（成績）の取り方を教えてほしい、</p> <p style="text-align: center;">⑧その他（懸賞問題やクイズへの回答など）</p> <p>※補足</p> <p>相談に応じるべきか、応じるべきでないかという問題に関しては、線引きが難しい内容も出てくると思います。特に⑦については判断に迷うことも出てくるでしょう。</p> <p>ただ、その際に重要なのは、学習相談員はあくまで大学での学び方やアウトプットの仕方についての相談員であるということです。学習相談員は、履修相談員でも進級相談員でもありません。私たちが対応することによって、相談者がレポートやプレゼンテーションの基礎を身に付け、結果的に彼の成績も良くなる（単位が取れる）ということはあるのですが、直接目的として成績や単位が絡んでくるような相談には乗ることができません。</p> <p>昨年度、「レポートでAが取れない理由が分からない」という学生からの相談がありました。それに対しては「私たちは基本的な作法を教えることはできませんが、それが先生の評価に沿うものだとは言いきれませんし、私たちの教えることが成績をとる必要十分条件だとも言えません。その講義の成績については、基本を身に付けた後で今までの講義をヒントにがんばってくださいとしか言えません」と応答しました。学習相談員に相談する理由として、成績が悪かったからということは大いにありうるでしょう。そのような相談を断ることは、学習で躓いた学生をサポートするという学習相談員の趣旨に反します。積極的に受けていくべきだと思います。ただその際、「学習相談員の言う通りにやれば単位が取れる（Aがとれる）」という誤解を与えないことは重要なことです。単位を取るため、成績をとるためではなく、大学での学びをより豊かにするために相談の場があるのだというスタンスで相談に臨みましょう。</p>
---	---

にはもうすこし件数を集める必要があったため、2009年度前期は昨年度の形式のカルテをそのまま使用することになった。その中で、やはり相談者自身に記入してもらった方がよいという考えが強まり、秋学期からは形式を変更することとなった。パソコンのファイルから手書きの紙に変更され、相談内容や課題内容を相談者自身が書けるようになった。また、それに際して相談者が相談について抱く印象を考慮して、名称も「カルテ」から「学習相談メモ」に変更された。

次に、学部学科への対応ということに関してであるが、これは人数を増やすことで大きな進歩がみられた。多様な学部の相談員がいることで、相談員同士の相談も可能となった。さらに、具体的なアドバイスを行うという点に関しても、それぞれが自分の持ち味を生かした資料を作成することで改善され、相談の質も向上していったように思える。実験レポートのための資料や、特定学部のための参考文献集などがそれである。

③新たな課題——情報の共有化

2009年度は学習相談員の人数が増えたことによって、

図Ⅲ-3 学習相談員研修用資料③

<p>学習相談員研修資料②</p> <p style="text-align: center;">学習相談員研修について</p> <p style="text-align: right;">2009.4.20 間篠剛留</p> <p>1. フローチャート以外の部分について</p> <p>日吉学習相談員の教育的要素（教えると育むのバランス）</p> <p style="padding-left: 20px;">問題に直面している相談者の、解決したいという思いを尊重する</p> <p style="text-align: center;">+</p> <p style="padding-left: 20px;">学問（学ぶこと）上のしきたりを教える</p> <p>学習相談員の仕事の大前提</p> <p>→相手の話を聞くこと</p> <p style="padding-left: 20px;">課題は何か 悩みは何か ↓↓↓ 相談者に寄り添う形で解決策を提示しつつ、レポートの書き方や大学での学び方を学んでもらう。悩みを解決するための能力を身につけてもらう。</p> <p>相手の話を聞くために</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あわてないこと (自分のわかる基本を提示できればよい。図書館のスタッフを頼ってよい) ・あせらないこと (初学者の気持ちに立つこと。1回で全部を教えきろうとはしない) <p>2. 初回研修に行いたいこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大学での学びの経験、レポートの経験についての意見交換 ・初学者の気持ちに立つことの難しさを共有

活動に大きな進歩がみられたのであるが、一方では人数を増やしたことによる懸念も生じた。特に重要だったのが、情報共有の問題である。2008年度は学習相談員が1人であったため、相談員同士での情報共有は考える必要がなく、相談員個人がレファレンスや諸先生方と連絡をとっていけばよいという状態であった。しかし、2009年度から学習相談員が6名に増え、学習相談員同士での情報共有を考える必要性が出てきた。学習相談員は基本的に窓口に1名のみであり、学習相談員同士が顔を合わせる機会は少ない。ミーティングの機会を設けるとしても全員の日程調整を行うのは困難であり、また、ミーティングだけではこまめな情報共有も難しい。そこで考えられたのが、メーリングリストと連絡帳である。

メーリングリストは学習相談員6名だけでなく、レファレンスの図書館スタッフや教養研究センタープロジェクトメンバー、アカデミック・スキルズ担当教員、教養研究センタープロジェクト関係職員が含まれている。ことあるごとにメーリングリストに情報を流すことで、連絡を十分にとることができた。

連絡帳は学習相談員カウンターのパソコン内にファイルとして設けたものである(図Ⅲ-4)。その日の相談件数や感想を書くだけでなく、他の相談員への連絡事項や、それに対する他の相談員からの反応が書き込めるようになっている。各相談員はレファレンスデスクについて前回の勤務以降の書き込みを確認することで自分がいない間の学習相談員の様子について知ることができ、困ったことや気づいたこと等を受発信することができるのである。これは当初は情報共有のものとしてしか考えられていなかったのであるが、秋学期に入る頃からさまざまな企画提案がこの連絡帳を通して行われた。これはうれしい誤算であった。

(4) 2009年度の取り組みの中で生じた問題とそれに対する取り組み

次に、2009年度の取り組みの中で新たに生じてきた問題について説明したい。大きな問題としては以下の四つがあげられる。すなわち、①レポートの取り組み方をどのように説明するか、②相談員から提案された企画をどのように推進するか——どのようにして相談者を増やすか、③そしてレファレンスの業務との区分をどうするか、④の四つである。

①レポートの取り組み方をどのように説明するか

上でも述べたが、何もない状態でただ滔々とレポートの取り組み方について論じても、学生にとっては実りの少ないものになりかねない。また、レポートの書き方についての基本を学んでいる相談員にとっても、それを伝えるということは容易なことではない。相談員ごとに強調する点が大きく異なるという可能性も考えられた。学内で提供されるサービスとして、ある共通の土台は必要であった。そこで、学習相談員が共通に利用できるような資料が用意された。これには、すでに刊行されているものをレファレンスデスクに準備したというものと、相談員が自ら作成したものがある。

前者の例としては、『論文集』や『アカデミック・スキルズ』などがあげられる。『論文集』は実際に書かれたレポートの例として用いられた。資料1・2を見れば分かれるとおり、多くの相談例において活用されている。レポート・論文とは何かということの説明の際、具体的な例があると格段に説明しやすくなる。しかし、その論文の内容があまりに難しいものであると、相談者は自分の取り組むレポートとの間に距離を感じてしまい、かえって学生を委縮させることにつながりかねない。レポートとは何かということについて一般の論文を用いて説明したこともあったが、専門課程に進む前の学生にとっては多少なりとも抵抗感があったようにも思う。これに対して『論文集』は実際に相談者と同年代の学生が書いた論文の集成であり、相談者にとっても親しみやすいものであるといえよう。

『アカデミック・スキルズ』は教養研究センターの開講している「アカデミック・スキルズ」(旧「スタディ・スキルズ」)の成果をもとに編まれた、大学での学び方についての本である。この本も相談の中で多く用いられた。それには二つの理由が考えられる。ひとつは、この本が単にレポートの取り組み方についてだけでなく、広く大学での学び方全般について簡潔にまとめられているという点である。レポートの書き方を説明しているところでノートを取り方や資料の読み方等の話をする必要が出てきた場合にも、スムーズに移行できる。もうひとつの理由は、相談員は全員がアカデミック・スキルズまたはスタディ・スキルズを受講していた学生であるということである。相談員全員の共通の基盤として『アカデミック・スキルズ』は有効に活用された。

相談員自らが作成した資料としては、まず、最も利用

図Ⅲ-4 学習相談員使用連絡帳（部分）

月	日	曜日	時間	担当	相談件数	感想	伝言・提案	応答	
22	木			3	水谷	0	何か企画を実現させたい。。	ピアメン相談員の携帯メールリストが作りたいです！せっかく優秀な方が集まっているので(その中で末席を汚す存在ではあります)が、今年中に何らかの企画が実現まで持って行けたらいいなと島田さんと話しました。	>>水谷君 いいねえ。ぜひ作ろう。おれのアドレスは知ってるよね。企画案が増えたら一度ピアメンで集まってどれを実現させたいか話し合うのもいいかも！！(市村) >>メールス作ろう。ぜひ作ろう！それで、情報共有したり、MTGの設定とかしたりしましょう。(宮城)
				4	市村	1	今日島田さんと話したら、島田さんが面白い企画のアイデアをたくさん持っていてびっくりしました。われわれピアメンも一度会議でもして方向性を考える必要があるかもしれませんね。	企画案の一つ考えました！！【市村企画案】というファイルをご覧ください。そしてよかったらコメント下さい！！	>>市村企画いいですね。これから練っていけばおもしろいものになっていくとおもいます。みんなもパンパンコメントしていこう。(宮城) >>市村企画おもしろいです！やはり、質問を待っているだけではなくこちらからのアプローチも必要ですね！！(水谷)
				5		0			
				3	宮城	0	島田さんはたくさんアイデア持ってて本当に話して面白い。それらの企画がコンピュータしたら、どんなに素晴らしいか。そしてそれが可能ならいつころかだろうか。そろそろ、紅葉。秋ですね。	皆さんにお願いがあります。「レポートって何？のレポート」を添削してください。その場合、コメントではなく書き換えをお願いします。Wikipedia みたいにオープンソースにして皆で書き換えまくって、最終的にいい形に収まるようにしたいんですよ。その際、変に赤字にしたりしないで、普通に書き換えてくれれば結構です。お助け下さい。 「あの人のノートが見たいのノート術」もオープンソースにしておきますので、皆で作っていきましょう。	>「ノート」にほんの少し加筆しました(水谷)
				4	永嶋	0	今日はひたすらパソコンと向き合ってパソコンの使い方やプログラミングの基礎を勉強していました。パソコンは奥が深すぎるので便利なおもちゃどころでもないで学生のうちにさらっておきたいと思いました。今日はパソコンの基本・タッチタイピングの勧めのファイルを作成しました。まだ未完成です。実際に報告に使えるかわかりませんが、みなさんの役にたつかも知れません。	ご覧ください。 メモをはさんでいるファイル内に『ピアメン作成資料のマッピング形式による配布』を提案した手書きB5の紙を挟んでおきました。皆がそれぞれ作成しているものつなかりをアピールして発表することができたら、最終報告をする際にも使いやすいたいイメージを描くことにしました。	
23	金			3	宮城	0	台風の影響か天気の機嫌が大変悪いようで…トライアルですがNewspaperDirectというデータベースがすごいです!!!!ぜひ一見してみてください！	反対意見がないようなので携帯メールスを作りたいと思います！参加のメールが来たら、登録おねがいます。とりあえず、なんの企画をやるにしろ、企画を動かすのに必要なものだと思いますので	
				4	阿部	0	雨、いやですねー。雨の日はメディア人口が大きくなるような気がするの気のせいでしょうかね。いろいろ企画ありがとうございます！とりあえず、ケータイメールス、作りましょう！	沈黙は、最後にはレファレンス関係ですが相談者が舞い降りてきて、こちらに返事が書けませんでした。申し訳ございません…。そして、この項目だけ、やたら長くなってしまい、審美的(?)にも問題があります。すみません。皆様、環境学案内に目を通していただきありがとうございます。皆様のアドバイスを参考に、修正していきます！ > 宮城君 オススメ授業！これはいいアイデアだと思います！ありがとうございます！例えば、慶應の環境分野の教授をリストアップして、その先生方が開講している授業、というやり方でもいいかもしれませんね！沈黙の春はやはり古典ですよ。生態学的なアプローチですが、「環境学」のなかではやはり避けて通れないところかもしれません。スピード感、という言葉は個人的にはけっこうお気に入りの言葉なんです。宮城君も試しにどこかで使ってみてください。笑。やはり論文はだたらやっていると、戦意が下がってきますからね。一気にパワーを注ぎ込む感じですよ。>>水谷君	
				5		0			
				3	永嶋	0	今日はむちゃぶり(笑)、公開講座のポスターを作ることにしました。『永嶋』のフォルダの中に入っているのぜひご覧ください。ところで…最近周りでは風邪がはやっているみたいです。俺も喉をやられています。皆さん気をつけてください。	携帯メールス作りました！間篠さんと阿部さんのアドレスが分かりません。どなたか、教えてください。。みなさんいくつか企画を出されていてワクワクしています。同時に複数企画進行させるのは難しい気がします。絞って実現に向けて動きたいなあ～	
				4	水谷	0	今日は理工学部の授業がメディアで行われていました。島田さんの授業面白かったです！というか今日は後ろからそれを聞いていて勉強になりました。法学部の判例引用の方法が来ましたが、まったく分からず図書館員の方に振ってしまいました。	どんどん企画を現実化していこう。「人が想像することはすべて実現できる」?? だけ。まあ、そんな感じで。	
27	火		3	宮城	0	私も島田さんの授業聞いてました。楽しそうでした。いいですね。	リーダーおよび情報管理・共有について：企画について少しずつ話が進んできていて、この先が楽しみです。さて、企画を進めリーダーの設置や企画会議大賛成です。11月の下旬くらいに実現できるといいですね。あとは、日時の調整がカギとなるのでしょうか。それが決まったら企画フォルダ制作も進めていきましょう！		
			4	水谷	0	今日は理工学部の授業がメディアで行われていました。島田さんの授業面白かったです！というか今日は後ろからそれを聞いていて勉強になりました。法学部の判例引用の方法が来ましたが、まったく分からず図書館員の方に振ってしまいました。	リーダーの設置や企画会議賛成です。しかし、		
			5	宮城	0				
28	水		3	間篠	0	まさに風邪にやられていました。間篠です。2週間も間が空くと連絡帳のチェックだけでも一苦労ですね(笑)			
			4	水谷	0	我々がいつも座っている机のしたに不思議なつつまみを発見しました。回すとどうなるのでしょうか…			
29	木		3	水谷	0	天高く馬肥ゆる秋ということで馬顔の私は			
			4	市村	0				

されたものとして「レポートレクチャー用スライド」があげられる。これは、レポートの書き方についての本をいくつか参考にして作られた、パワーポイントの資料である。学習相談メモを見ても分かる通り、多くの相談においてこの資料は活用されている。図表を交えて視覚に訴えることで、説明はしやすくなったといえる。

次に頻繁に利用された資料として、「レポートって何？のレポート」（図 I-6）があげられる。これはレポートについてレポートを書いたというものであり、参考文献の使い方、要約のしかた、脚注の付け方などについて説明するための具体例として用いられた。規模としては『論文集』に収録された論文ほど長くなく、A4用紙2枚という短さである。これは大学に入学して初めて挑むレポートの規模を想定して作られたものであり、相談者を圧倒しないようにとの配慮もなされている。そのほか、前述の実験レポートについての資料や、特定学部のための参考文献リスト、環境学入門の資料等、さまざまな資料が作られた。これらの資料は、その多くが完成したのではなく、学習相談員が相談の中で感じたことをもとに改定され続けているというのが大きな特徴である。

②企画をどのように推進するか

これは、相談者をいかに増やすかという問題と密接に関連している。この二つの問題が現れるきっかけとして、相談者の来ない時間に相談員は何をすべきかという問題があった。当初は上で述べた資料を作ることが主たる仕事として考えられていたのだが、やがて相談を待つだけでなく、相談員がより能動的に学生にはたらきかけてもよいのではないかという意見が出てきた。また、相談者が少ない時期には、学習相談員の認知度をいかに上げるか、相談しやすい雰囲気をいかに作り出すかといったことも問題となっていた。図書館内のポスターやウェブサイトでの掲示によって学習相談員の存在は少なからずアピールされているが、より積極的なアピールが必要なのではないかという意見が学習相談員の中から多くあがった。そして、これらの意見は前期の終わりころには企画提案という形に発展していった。今までのところ、学習相談員による図書紹介、学習相談員による公開講座、学生・教授のノート展示企画といった企画があがっている。このうち、図書紹介の企画は2010年1月に実施され、残る2つも来年度に実現すべく企画が温められている。

しかし、企画提案はされても、それをどのように推進

していくのかという問題が残っていた。また、個々の学習指導員がそれぞれに提出している企画案や個々に製作している資料を学習相談制度の中の取り組みとしてどのように一貫性をもたせるかということも問題であった。ここでも大きな障害となったのが、学習相談員が全員で顔をそろえる機会の少なさである。それまでの通常業務に関してはメールリストや連絡帳がうまく機能していたが、企画の実現のためにはさらなる工夫が必要であった。そこで2009年11月にミーティングを設け、今後どのような企画を推進するかについて話し合うと共に、企画を統括するリーダーを決定した。リーダーが企画の進捗状況を管理し、必ずしも全員が集まらなくとも企画を推進できるようにしたのである。

そして、リーダーのもとで1月の展示企画が推進された。II-3-(2)で述べた通り、この企画は学習相談員がレポート作成について簡単なアドバイスを掲載すると共に、図書紹介を行うというものであった。学習相談員それぞれが一つのテーマを担当している。テーマは以下の六つである。すなわち、1. レポートとは何か、2. 参考文献の使い方、3. 要約の仕方、4. テーマの決め方、5. 情報収集のコツ、6. 情報の組み合わせ方である。このテーマは前期の学習相談内容の分析をもとに決められており、学生が躓きやすいところにしぼって情報を提供している。まさに今年度の学習相談の成果を形にしたものと言ってよいだろう。また、学習相談のために作られた資料の一貫性をどう持たせるかということについても考慮されている。学習相談員が作成している資料については、木のイメージにそれらを位置づけるという提案がなされていた。すなわち、レポートとは何かという内容を根幹に、要約の方法や参考文献の使い方といった枝葉が伸びていくという形である。1月の展示企画についても、レポートとは何かを根幹としてその先に個別の内容があるということを表現しようとしていた。ただ、このイメージについては十分に表現しきれなかった。この点については今後さらに検討していく必要がある。しかしながら、この展示企画を全体として見てみると、リーダーを中心に一つの企画を作り上げた点、学習相談員の存在を積極的にアピールした点、これまでの相談内容を生かした点において、おおむね成功していたといえよう。

③レファレンス業務との関係

学習相談業務を進めていくにしたがって、レファレン

ス業務との重なりが大きな問題となってきた。上でも述べたが、学生の相談内容は、実際にはレポートそのものの理解について問題がある場合にも、情報検索という形をとることが多い。そのため、情報検索についての相談をすべてレファレンスに任せてしまうと、学習相談員への相談が極端に少なくなってしまうのである。また、情報検索について相談するにいたる過程を丹念に聞き取っていないと、レポートについての理解に問題があることを見逃してしまうのではないかと懸念もあった。学習相談員の立場からすれば、今この場で資料を探すだけでなく、次以降につながる技能や知識を身につけてほしいという思いもあった。

そこで、前述の11月のミーティングの際、レファレンスと学習相談員の業務の関係についても話し合いが行われた。レファレンスとしても互いの業務内容の関係について問題意識を持っており、活発な意見交換がなされた。そこで最終的に確認されたのは、レファレンス、ITC学生コンサルタント、学習相談員が一か所にまとまっているのはこの取り組みの強みであるということと、学習相談員も学ぶ立場にあるということである。相談者にとって必要なのは、単なる情報検索だけでなく、高度な情報検索だけでなく、大学での学び方だけでもない。それらすべてが相談者にとって有益なものなのである。さらに、場合によってはパソコン関係の知識も必要である。そうであれば、各業務を単純に切り分けてしまうのは得策ではない。レファレンス、ITC学生コンサルタント、学習相談員が一体となって、大学での学習に関する総合窓口となれば、相談者にとってこれほど有益なものはない。また、高度な検索技術を要する相談があった場合、その検索技術を学習相談員が学ぶことも可能となる。さらに、学習相談員がレファレンスに学ぶ態度を相談者に見せることで、相談者にも学ぶ態度を伝播させることも期待できる。たしかに、相談者が最初に誰に話しかけてよいか悩ませてしまうという問題は残ってしまう。悩んだ挙句相談せずに帰ってしまうということもありうるだろう。しかし、それについては今後相談を続ける中で検討していくしかない。少なくとも、レファレンスと学習相談員の協力体制の重要性が双方に認識されたことが大きな前進であるといえよう。

(5) 2010年度の活動に向けて

さて、最後に来年度の取り組みに向けて述べておきた

い。

まず、運営上の問題として先ほどの窓口の問題が課題として残っている。これについては先ほども述べたとおり、相談の中でさらに検討していく必要がある。相談に来た学生にアンケートをといるということも検討のための材料として考えられよう。また、窓口関連では当番表の作成も提案としてあがっている。これはどの日のどの時間帯にどの相談員がいるのかということをも明記した表を学習相談のデスクに置くというものである。相談員の学部や関心を明示しておくことで、相談者が相談しやすい環境ができるのではないかと期待されている。これについても、学生の声を聞いていく必要があるように思う。窓口を学生が相談しやすいものにしていく取り組みは、積極的に行っていきたい。

資料作成についても、更なる見当が必要であろう。レポートの書き方についての資料を根本におき、それ以外の個別的なテーマを枝葉に置くというイメージは、学習相談員の中である程度共有されてはいるものの、資料すべてが整理されたわけではない。経済学部向けのデータベース一覧はあっても他の学部向けのものがない、環境学入門の資料はあっても他の入門資料はない、といったように、個別の資料がばらばらに存在している状態である。足りない部分を補充しつつ、個々の資料が全体の中でどのような位置づけになるのかということも十分に検討したうえで、資料を作成していく必要がある。1月の展示企画の反響を生かして改善していくという作業も必要になるだろう。

最後に企画についてであるが、今年1月に行った展示企画の経験をもとに、来年度は学習指導員によるレポートの書き方講座企画、教授・学生のノート展示企画を進めていく予定である。これは、今までの相談の蓄積を生かし、学習相談員の存在をアピールすると共に、学習相談員自身も他者に学ぶという目的で企画された。もとなつた企画は図Ⅲ-5・6の通りであり、1月の企画と同様、リーダーが中心となって企画をすすめていくことが決定している。今年度の取り組みは、学生を待つ受け身の態勢でいることが多かった。しかし、来館する学生を広く巻き込んで、学びの場を能動的に作り上げていこうという意欲が相談員の中に満ちている。今年度の取り組みを十二分に生かして、来年度の取り組みを進めていきたい。

図Ⅲ-5 2010年度実施予定学習相談員企画企画書①

日吉メディアセンター
学習相談アワー資料
作成者：学習相談員 経済学部2年 水谷文彦

ピアメン企画—学生・教授ノート紹介—

1.企画目的

高校と大学では、授業の受け方は大きく異なる。大学では、黒板を使わずひたすら喋って授業を終える教授や、ネット上にレジメを用意している教授、解説なくひたすら板書をして終える教授など、授業の進め方は千差万別だ。

ノートをとることは、どんな学業においてもまずは初めの一步となる行為である。ノートを取らずして勉強はできない。では、上記のように千差万別の授業に対して、ノートはどのようにとればいいのか。その疑問をビジネススクールのような外部の教育機関が解消するのも悔しい。それをやるのがピアメンターの仕事ではないかと思う。

2.企画内容

①学生ノート紹介

学習の参考となりそうな学生のノートの現物を展示する。

・ツールの紹介

ルーズリーフや一般的なノート、またはPCでとったノート、特殊な例では無地のノートに樹形図のようにとったノート etc.

・フォーマットの紹介

・内容の紹介

最低限何を書くのか？（日付、その日の授業のタイトル、項目 etc.）

・科目別ノート紹介

語学の授業のノート、数学ノート、実験ノート、法学ノート、経済学ノート etc.

数学は数式が多いだろうし、実験なら図も書く必要がある、法学なら項目がたくさん出てくるだろうし、ミクロマクロなら文章も数式も図も出てくる…特徴は様々。

②教授ノート紹介

普段見ることのできない先生のノートの現物を展示する。

・ツールの紹介

・フォーマットの紹介

・内容の紹介

・科目別ノート紹介

③ ①②の混合

①②のノートが同じ授業のものであるなら、とても面白い。教える側の意図と教えられる側の受け取り方がどう異なっているのかを発見できる。

例えば、「1929年にブラックマンデーがおきました。」に対して

教授：1929年という時期が大事！

学生：ブラックマンデーって面白いネーミング！！

と受け取り方はいろいろだろう。

④参考図書

ノートをとるにあたり、参考になるような本や雑誌の紹介。

3.企画

①企画準備 展示に必要なノート、教授ノートの提供

②企画問題点 わざわざピアメンター企画でやる必要はあるのか？

③企画期間 来年の大学入りたての新生生に向けてやりたい

④企画場所 メディア1Fか？

ピア・メンター資料
作成開始日：2009年10月22日
最終更新日：2009年10月22日
初期作成者：市村謙
最終更新者：市村謙

企画案：「論文・レポートとは何か」をプレゼンしよう！！

みなさんお疲れ様です。まだレポートの時期ではないということで、あまり質問来ないですねえ。今ここに座っていてふと思ったのですが、やはりビラを配っただけではピア・メンターの認知度はあまり上がらない&メディア一階の真ん中に座っている我々ピア・メンターに質問に行くというのは、かなり勇気がいることだと思うのです。

だから、ただビラまいて待っているだけではなくてこちらからアクションをかけていった方がいいのではないかと思います、以下の企画を提案させていただきます！！

1. 企画概要

昼休みなどの時間帯に空き教室もしくはメディアセンターのどこかを使い、「論文・レポートとは何か」について、間篠さんのパワーポイント資料などを使いながらプレゼンする。その際に、参加者はお昼を食べながら聞く、友達と一緒に来るなどしてもらい、できるだけ入りやすい and 抜けやすい形式をとる。また、ピアメン側もできる限りフレンドリーもしくはフランクな雰囲気を出し、学生との親近感を持たせる。

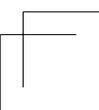
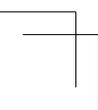
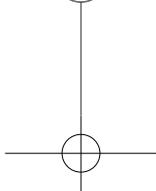
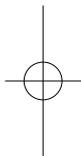
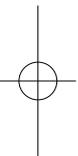
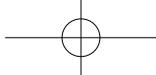
将来的には、単発企画ではなく毎週テーマを変えてなにかをやる継続的な企画になれば楽しいかなと思います！！（ゲスト呼んだりしてね）

2. 目的と効果

- (1) ピア・メンターの認知度が上がる。
- (2) 多数の学生相手にプレゼンすることで、「論文・レポートとは何か」についての学生の認識が深まる。
- (3) 一緒に企画を制作・実行することで、ピアメン間の交流も深まる。
- (4) 学生に一度参加・質問の経験をさせることで、その学生たち or その友達が現在の業務にも来やすくなる。
- (5) 「質問者を待つ」という受動的な形式に加えて、「質問者を増やす・探す」という能動的な仕事がピアメンに加わる。

3. 課題

- (1) 何月何日にやるという告知が必要。→**お金がかかる？**
- (2) たくさんの人に来てもらえるよう、工夫が必要。
- (3) ピアメン・メディアセンター・大学の協力が必要。



IV. 今後の活動の計画と展望

前章までに、学び場プロジェクトのこれまでの成果を説明してきた。本章では、これを承けて本活動の今後について考えていきたい。まず、2010年度の活動計画について説明し、その上で、より長期的かつ包括的な視点に立って、慶應義塾全体の学習支援活動の中で、本プロジェクトがどのように位置づけられるべきかを考察していきたい。

1. 2010年度の相談員体制と活動計画

(1) 学習相談アワー

2008・2009年度の活動は、いわば手探りの実験段階としての性格が強いものであった。活動を通じて、学生が相談に訪れるのが多い期間、すなわち学生が学習相談アワーを必要とする期間が見えてきた。また、相談内容の傾向・それに対する有効なアドバイスの方法に関する記録もある程度、集積されてきた。さらに、学習相談を行うに当たって有用な参考書籍やツール、学生に勧めるべき図書についても徐々にリストアップと整備が進行しつつある。何よりも、活動から得られた知見や学生からの手応えから、学習相談アワーが義塾の学習環境の充実にとって意義の大きいものであり、またさらなる発展の可能性のある取り組みであることが確認された。

以上の成果を踏まえ、2010年度は、本活動をより充実させるとともに、学生・教職員の間にも広く認知させることを目標としていきたい。それと同時に、学習相談アワーを持続的な活動にしていくために、種々の環境整備・組織固めを行うとともに、相談員間でのノウハウの継承の仕組み作りを進めていきたい。具体的には、以下の事柄に重点を置いた活動を展開していきたい。

①相談員体制

2009年度の学習相談員は、2010年度も引き続き活動に携わってくれることになっている。本活動は、彼らの自

発的な計画立案・実行・総括と次なる計画によって支えられていると言ってしまうのではない。まさしく、学生自身による学び場作りが進められているのである。

彼らに加えて、来年度はさらに新規相談員を増員する予定である。これにより学習相談アワーの期間と時間帯を広げ、学生のニーズにより多く応える体制を作りたい。それとともに、本活動を継続的なものにしていくため、学習相談のノウハウや知識などを新旧の相談員の間で伝承する仕組みを構築していきたい。その構築は、相談員相互によって自律的に成されることを期待する。早急に取り組まれるべきものとしては、新規相談員のトレーニングのプログラム作りが挙げられる。

②教育活動への貢献

2008・2009年度の学習相談アワーを通して、学生が大学の学習のどのような面に困難を感じているのか、それに対してどのような指導が求められているのかについての知見が蓄積されつつある。例えば、大学1、2年生の多くは大学で課されるレポートの目的と意味を理解していない。またレポート課題に取り組むための方法、すなわち問題発見・問題解決の手法に関する知識も持たないことが多い。このような学生に対して、その理解度に合わせた指導のノウハウが二年間の活動の中で次第に形になってきた。このような知見は、教員が授業などで学生を指導する上でも有用なものを多く含んでいる。

これらの成果は、「学習相談メモ」というドラフトの形

で蓄積されている。2010年度は、このドラフトを利用して相談内容のデータベース化と公開の可能性を探るとともに、教職員に向けての報告発表を積極的に行っていきたい。

発表の手段としては、パンフレットの形で印刷配布する、企画展示をするなどいくつかの可能性はある。また、教養研究センターでは大学の教員を主な対象とした「教員サポートワークショップ」という活動を行っている。この教員サポートの枠組みの中で、学生相談員たちを講師として発表を行うことも可能であろう。様々な方法によって、本活動の成果を発表し、義塾の教育活動の向上に貢献していきたい。

③教員との連携

学習相談アワーは、できる限り学生主体で活動が行われることが望ましいが、それとともに、メディアセンターをはじめとする義塾の諸部門および教職員との連携を持って行くことは重要である。

学習相談員は、アカデミック・スキルの授業を通して、レポートの書き方についての方法を習得しているが、文献検索のプロフェッショナルでもなく、専門研究に携わり恒常的に論文執筆を行う研究者でもないため、学生からの相談に対しても対応できることにはやはり限界がある。学習相談員が相談を受ける過程で、自分たちの手に余る問題にぶつかった場合、できるだけ即時に適切なサポートが得られる必要がある。

学習相談員と図書館スタッフと連携については、これまでの活動の中で充分実現されてきたと評価できる。何より、学習相談員はレファレンスデスクでメディアセンターのレファレンス担当の図書館スタッフと同じデスクに座っている。したがって文献検索の方法や図書に関する問題は、隣りに座る図書館スタッフに即時に相談することができる。同様に、レファレンスデスクには、ITCから派遣された学生コンサルタントが常時座っており、ITに関する相談については、そちらに委ねることが可能となっている。このような方法によって、学生の相談に対して十分な対応をできると同時に、学習相談員自体も図書館スタッフ、およびITC学生コンサルタントの答えを聞きながら、自分の知識やスキルを不断に高めることができる。

次の課題は、学習相談員と教員との連携を実現することであろう。現在は、教養研究センターの学び場プロジェ

クトメンバーとアカデミック・スキルズ担当教員がアドバイザーという形で関わっているが、より効果的な関わり方を模索していく必要がある。

学生の相談内容が高度に専門的な知識に関するものであった場合、学習相談員は答えることができない。また、授業についていけないといった相談の場合には、学習相談員が提供する一般的な答えだけでは不十分であることもある。そのような場合は、専門知識を持つ教員、授業担当教員あるいは各学部の学習指導主任に連絡をし、そちらに対応を任せの方がよいただろう。このようなことから考えると、できるだけ多くの学部の多様な専門を持つ教員との間にネットワークを作り、学習相談アワーへのサポートを求めることが必要である。

この活動を継続・発展させていくためには、教員の理解が不可欠である。本活動の趣旨と意義を教員が理解し授業時に学生に紹介するようになれば、学生の認知度もより高まり、相談に訪れる学生もより増えるであろう。教員がこれまで貴重な時間を割いて自ら指導に当たっていた、レポートの書き方・文献検索の仕方などの大学での学習に関する基本的なスキルの相談窓口として、学習相談アワーを紹介してくれればよい。学習相談アワーを利用する学生が増えることによって、学生の学習スキル・レポート作成の平均的な能力が相対的に向上することが期待できる。そうすることによって、教員は専門的な事柄についての指導にこれまでより多くの時間とエネルギーを注ぐことが可能となる。このように、学習相談員と教員とが連携することによって、学生の学習に関する相談について、基本的な相談は学習相談員に、専門的な相談は教員に、という役割分担が実現できるであろう。

(2) 学習相談アワー以外の活動

これまでの活動を通して、図書館を拠点にした学びの場作りのために何が必要かが次第に見えてきた。その成果に基づいて、学習相談のための様々な資料を整え、プリントやプレゼンテーションファイルの作成を進めている。さらに、新しい学びの場における教員側からの発信のあり方を模索する試みとして、メディアセンター内でアカデミック・スキルズの公開講座も行った。2010年度も引き続き、これらの活動を継続発展させていきたい。

それに加えて、レポートの書き方・プレゼンテーションの仕方についての学習相談にとどまらず、学生自身が自分の学習の成果を学生に向けて発表する活動を計画し

ている。これは、多様な学問分野についての初学者に対する啓蒙活動であると同時に、発表者自身にとっても、初学者に教えるために自分の知識を分かりやすい形に整理し、そこから自らの次なる学習目標を見つけるという、教えることによって学ぶ貴重な機会となるであろう。より高度で自由闊達な「半学半教」の場を創出する試みである。

2. 学び場の構築の展望

前節では、2010年度の学び場プロジェクトの活動計画について述べたが、本節では、もう少し視野を広げて、将来的に学び場プロジェクトがどのように展開されていくべきか、また、新たな「学びの場」構築のために慶應義塾としてどのようなことが必要かを考えてみたい。

(1) 学習相談アワーの展開の可能性

①相談員の拡充

現在、学習相談員は、教養研究センターの「アカデミック・スキルズ」の履修者の中から募集選定している。しかし、学習相談員としてふさわしい人材は、必ずしもこの授業の修了者に限られるわけではない。現在各学部では、スタディスキルを学ぶための少人数セミナー授業を多く開講している。その履修者の中から、優秀な学生を学習相談員として迎えることは実現可能性が高い。

そもそも学生が学生に対して学習相談をすることの最大のメリットは、学生が気軽に相談しやすいということ、学習相談員が相談者の躓きを実感として理解でき、型どおりではない、自らの経験に基づいた有効なアドバイスができることにある。反面、その弱点としては、相談員が専門的な教育や訓練を経ているわけではなく、持っている知識と経験にも限界があるため、多様な相談にスムーズに対応できるわけではないということがある。メリットを生かしデメリットを解消するためには、できるだけ多様な相談員を集めることが必要であろう。それぞれ得意分野を持った学生を多数そろえられれば、それだけ多種多様な相談に適切に対応できるようになる。例えば、外国人留学生の相談に対しては、やはり同じような苦勞を味わいながら学習を続けている留学生が相談に乗る方が適切なアドバイスをすることができる可能性がある。また、専門的知識の豊かな大学院生の相談員も必要だが、

初学者の気持ちをより親身に理解できる学部学生の相談員も必要である。それぞれの特性を生かしつつ、しかも不得意な部分は他の相談員の助力を仰ぐことによって、総体としてより高度な相談員体制を作り上げることができる。

そのためには、多くの教員に本活動の趣旨を理解してもらい、自分の学生の中から相談員としての資質を持つ学生を紹介してもらい、できるだけ多様な学部の多様な特性を持った学生を相談員として迎えることが必要である。

また、学習相談員自身によって自分の友人や後輩などからリクルートすることも必要であろう。本活動の趣旨は、学生自身による自律的な学習支援活動の場の構築というところにあるので、活動を担う人材確保においても学生主体で行われることも重要であろう。

②学習相談員養成プログラムの作成

①で述べたことがうまく機能するためには、学習相談員養成のためのプログラムも新しい考え方で作り上げられなければならない。現在の学習相談員はみな「アカデミック・スキルズ」の修了生であったため、この授業で学んだスキルを共通の基盤にしていた。相談員養成プログラムもこの共通性を土台によって組み上げることができた。

学習相談員の範囲が広がれば、それぞれ基盤とするスキルの内容・程度に違いが出てくる。むしろその違いは、学習相談アワーの内容を豊かにさせることにつながるわけではあるが、その一方で、相談員として最低限必要な知識・ノウハウを確保することが難しくなる。それを解決するようなプログラムを、教員やメディアセンターではなく、学習相談員主導で立案・作成・運営していくことが望ましい。それによって、学生自身による主体的な学びの場の構築を図ることができる。

③学習相談員による啓蒙活動の推進

上記①②と関連して、学習相談アワー以外にも様々な形で学習相談員の学びの成果を発表する試みがなされる必要がある。これによって、本活動に興味を持つ学生を増やすとともに、学習相談員のより広く深い「教える技術」を向上させることができる。また、将来的には、学習相談員のみならず様々な学生が自分自身の学びの成果を自由に発表する機会が求められる。

④メディアセンターの学習支援機能の整備

学び場プロジェクトは、図書館という、図書に囲まれた空間の中で行われていることにきわめて高い意義がある。レポートについての相談をきっかけとして、慶應義塾の有する豊富な蔵書を活用した学習・研究へと目を向けさせることができるからである。すなわち、学習相談アワーは、一面では学生に図書館の持つ意義を再確認してもらい、図書館の積極的な利用を促すための試みでもある。したがって、メディアセンターとしても、学習相談アワーの支援を通じて、学びの場としての図書館という新しい視点からその設備機能を見直し、学生の学習環境を整備していくことが重要である。

これまでも、日吉メディアセンターは、「新しい学習スタイルへの対応」をキーワードとして、図書館を整備してきた。「新しい学習スタイル」とは、

- 情報検索だけでなく、情報処理、発表までコンピューター端末を中心とする情報処理のサイクルが定着している。
- 個人学習以外にグループによる学習も定着している。
- 学習成果の発表形態として、レポート以外にもプレゼンテーションも定着している。

などにその特徴がある。これらに対応するために、次のような考え方で図書館の設備を見直し、グループ学習室(2F・3F)を改装し、グループ学習の機能を強化してきた。

- 学生が長時間、リラックスして、友人と勉強できる「場」を創造する。
- 学内には存在しない「グループ」で利用できる端末と作業スペースを提供する。そのために、防音対策を取った上で、グループ学習室に「学習用のスペース」という性格付けを行う。
- プレゼンテーションを練習できる場所を提供する。
- 資料、端末、作業スペースを一箇所を提供する。

以上の方針は、学習相談アワー活動とも密接に関係する面を多く含んでいる。例えば、プレゼンテーションの準備・練習の場に、人的な支援(学びの技法や資料検索)も追加することによって、よりよいグループ学習の環境も提供できるであろう。そのサポート要員として学習相談員が関わることも考えられる。さらに単に学習相談にとどまらず、グループ学習室で、相談員が自分の学びの成果のプレゼンテーションを行うことによって、学生の自律的な学習と発表の場を創出することも期待できる。

今後を見据えて様々な可能性が模索されることが望ましい。また、今後の図書館の設備・機能の充実にあたっては、学習相談アワーを通して得られた知識と経験から積極的に提案していくことも重要であろう。

(2) 様々な機関との連携

学生の抱える悩みは多種多様である。学習相談アワーは、学習に関する相談を受け付ける場であるが、相談内容は多様である。例えば、大学で学ぶことの意味が分からないなど、学習相談員の職務・能力を超える相談を受けることもある。また、一般的に言って相談に来る学生は、自分の悩みの実態と躰きの所在を明確に分析できていないことが多い。レポートの書き方を相談するために訪れてきたが、相談員がよくよく聞いてみると、問題の根は心理的なストレスや学生を取り巻く環境にあったという場合もあり得る。

学習相談員の基本的な原則は、自分たちで解決できない問題を抱え込まないということである。自分たちに手に負えない問題は、適切な部署を紹介することにしている。

慶應義塾には、各学部の学習指導主任、学生部、学生相談室、保健管理センター、国際センターなど、学生の問題の種類に応じて対応する窓口は各所に設置されている。また、スチューデントカウンセラー、KOSMICなど、学生からの種々の問題に関わる学生主体の団体もある。学習相談員が本来の任務に集中するためにも、また相談者にとってより適切なケアを提供するためにも、これらの義塾の各部署・団体と連携していくことが必要である。

視点を変えれば、これは慶應義塾全体にとっても重要なことである。上記の部署・団体はそれぞれの活動を通じて、多くの知見とノウハウを蓄積しているが、それらが義塾全体として活用される形で提供されているわけでは必ずしもない。上記の部署・団体がどのような活動を行っているか、学生をどのように紹介したらいいか知らない教員も多い。学生の多様化に伴って増加しつつある各種の問題についての相談に、慶應義塾としても、どの窓口に来て、相談内容に応じて適切な部署を紹介するようなネットワークを作り上げる必要がある。

事柄を学習支援という面に限っても、現在様々な学部・部門でそれぞれ特色のある活動を行っている。学習相談アワーもそれらの活動と連携をすることによって、慶應

義塾全体の半学半教の内容をより充実させることができるであろう。学部や地域に関わりなく、学生間の知的な交流の機会を広げること、知の連携と伝承を促進すること、これは教わる側の学生に益をもたらすだけでなく、教える側の学生にも豊かな経験を与え、より進んだ知への探究のきっかけを与えることになる。その意味で、現在各学部・各部門で独立して取り組まれている学習支援の試みは、積極的に情報交換をし、相互の役割の理解とノウハウの交換をしていく必要がある。

ただし、連携といっても様々な問題がある。学習相談アワーは図書館内で活動を行っているが、他の部署・団体による学習支援活動は、独立コア内のコミュニケーションラウンジ・学生相談室、第三校舎など、日吉キャンパスの様々な場所で展開されている。このように異なるロケーションで行われている活動を、有機的・効率的に連携させるためには、どのような手段・設備が必要かを考えていかなければならない。さらに、キャンパスをまたがる交流のためには、より複雑で困難な問題を解決していかなければならないだろう。

この意味から、学び場プロジェクトも、義塾の多様な学生サポート体制の一部として機能しつつ、その特性を生かした活動を行うことが大切である。

(3) 学習相談活動のあるべき体制

このように考えると、学習相談アワーは恒常的な活動として、広く義塾全体の学生支援・半学半教の仕組みの中の一部門としての位置づけられるべきである。したがって、運営の主体も現在のメディアセンターと教養研究センターの二者ではなく、本来は慶應義塾そのものに置かれるべきであろう。また運営の予算も、現在のように毎年調整予算に応募するという不安定な形ではなく、經常予算として安定的に確保されるべきである。それによって、運営の安定性が確保することができ、塾の様々な地域・部門で行われている種々の学生支援活動との連携も容易となるであろう。現在は、教養研究センターとメディアセンターによる実験的プロジェクトの位置づけであるが、システム作りが一段落し、またその効果も確認できた段階で、速やかに運営の主体を義塾に移管すべきであると考える。

もちろん、本活動の継続と発展のためには、教養研究センターとメディアセンターそれぞれの特徴とノウハウが欠かせない。また本活動から得られた知見をフィード

バックして、それぞれのセンターの充実も図ることができるという意義も大きい。したがって、本活動の実質的な人選や指導には、今後も引き続き両センターが関与していくことが必要であろう。学生が自律的にみずからの学びの場を創出することを重視しつつも、慶應義塾の半学半教の精神を実現するためには、学生と教職員とが協力していくことが不可欠だからである。

第 2 部

資料編

学習相談メモ

学習相談メモまとめ（春学期）

	月日	所属	科目名	相談内容		対応内容
				カテゴリ	詳細	
1	6/8	法政 1	哲学 I	レポート	そもそも論文・レポートがどのようなものか分からない。どう書けばよいのかも不明。	まず、論文・レポートとは何なのかを紹介。担当教員が形式にも重点を置いているようだったので、形式についても紹介し、関連する本も案内した。また、スケジューリングの重要性についても話した。
2	6/8	塾 高	化学	レポート	アルコール・アルデヒドについての実験レポート。前回のレポート作成は真剣ではなかった。頭に何も残っていない。今回はちゃんと書いてみたいが、どうしたらよいか分からない。	話を聞き、何を望んでいるかを理解した後、レファレンスに対応依頼。
3	6/9	1	比較文化論	レポート	レポートと感想文の違い、資料の探し方が分からない。全体的にレポートの書き方が分からない。	自分の興味のあること、研究したいことの資料をまず読んでみて、それからどれをテーマにするかを決めることをアドバイスした。また、『アカデミック・スキルズ』教科書を紹介した。
4	6/9	文 1	比較文化論	レポート	レポートの為に何を読んでいいのかわからない。	まずは、自分が興味あることの文献を読むことをアドバイスした。
5	6/9	法政 1	人文科学特論	レポート	「日本語に主語の概念は必要か」というテーマ。何を読んでいいかわからず、どうやって読んだらよいかも分からない。資料の集め方も分からない。	『新書マップ』を案内。いきなり精読するのではなく、まずはたくさん本を読んでみることを提案。また、日吉メディアセンター HP のデータベースを紹介。
6	6/10	理 1	情報	資料の探し方	KOSMOS II OPAC で資料検索ができない。いくら検索ワードを換えても検索結果が 0 件になってしまう。	雑誌論文を著者名とタイトルで検索しようとしていたので、KOSMOS II OPAC の特徴として、雑誌や図書は検索できるが、個別の論文までは検索できないことを説明。雑誌名で検索したら実際に配架場所に行ってみるかどうかが確認するよう伝えた。
7	6/10	1	少人数セミナー	レポート	レポートの課題が出されたのだが、レポートと論文の違いが分からない。どのように書いてよいか分からない。また、参考文献の使い方が分からない。直接引用と要約の違いもよく分からない。課題はナショナリズムについて自由に論じるというもの。	小論文と対比させながらレポートの特徴を説明。自分なりの観点として「インドのガンディーの非暴力運動をナショナリズムとして捉える」ということが出てきたので、その線で行くことをすすめ、参考文献の書き方について説明した。
8	6/11	経 1	政治学 I	レポート	レポートの書き方が分からない。書き方に関する本は少し読んだが、どうすればよいか分からない。引用と、本を読んで頭に入れたこととの区別がつかない。テーマは「第二次世界大戦時の各国の政治体制」にしようかと思っている。	レポート完成の為に必要な要素は何か考え、それを踏まえてアウトラインを作ることを提案。筆者の主張や特定の表現は引用として書くの良いとアドバイス。先生に確認することも提案した。課題文の最後に参考文献を載せることも教えた。

	月日	所属	科目名	相談内容		対応内容
				カテゴリ	詳細	
9	6/11	文 3	アカスキⅢ	レポート	メディアセンター HP で紹介しているデータベースは検索してみたが、それでもよい資料が見つからない。	相談者は対応者とアカスキで顔なじみ。CiNiiなどはすでに知っているようだったので、何も伝えられることはなかった。
10	6/11	環 1	アカスキⅢ	レポート	谷崎潤一郎『少年』に関する論文を探したいが、どうすればいいか？	アカスキ受講者であったが、データベースを有効に使うことができていなかったようなので、いくつかのデータベースを紹介。
11	6/12	法政 2		レポート	課題は「ドイツと日本の大戦期における歴史認識の違いを教科書から読み取る」というもの。ドイツの学校で実際に使われている教科書をどうやって調べたらよいか分からない。	google、amazonから本を特定し、慶應に所蔵があるかどうかを一緒に調べた。レポート慣れしているようだったので基本的な点については教えず、一緒に探してドイツの歴史教科書日本語版は見つかったので、まずはそれを手がかりにするよう伝えた。
12	6/12	商 3		レポート・プレゼン	テーマは「ドイツと日本の大戦期における歴史認識の違いを教科書から読み取る」というもの。トピックである「資源ベース理論」が分からなくて困っている。また、雑誌論文の調べ方も分からない。	最初から雑誌論文に手をつけようとしていたので、まずは概略を説明した入門書を読むべきだとアドバイス。入門書を検索した後、CiNiiでの雑誌論文検索方法を教えた。
13	6/15	経 1	スタディ・スキルズ	プレゼン	「飲酒は体に良い」という主題で英語のプレゼンを行うのだが、どうやって論を支えればよいか分からない。文献の探し方も教えてほしい。	話を聞くと困っている点は情報検索だと分かったので、レファレンスと協力して対応。健康（肉体）面だけでなく社会的な面での効用も主張してみてもどうかと提案。しっかり練習するようにとも伝えた。
14	6/15		英語ドラマ	資料の探し方	"I ought to be in pictures" の訳本を探しているが、日本語のタイトルにバラつきがありどうやって調べればいいのか分からない。	レファレンスに対応依頼。
15	6/16	文 1	比較文化論	レポート	先週も質問に来たが、やはりどうやって書き始めればよいか、何を書けばよいか分からない。参考文献を読む意義が分からない。	まずアウトラインから始めてみることを提案。一つの本だけ読んだのでは論にならないので、複数読んでみることを提案。また、「日本の論点」からトピックを探すことを紹介。形式についても、目次やサブタイトル、参考文献を書くべきと指導。
16	6/16	経 1	スタスキ	プレゼン	英語版「日本の論点」新聞の情報が欲しい。また、大学での勉強が不安である。	oposing viewpointのデータベースと「聞蔵」を紹介した。漠然と大学での勉強について質問もうけたので、自分が何をやりたいか探してみようことをすすめた。
17	6/17	経 1	比較文化論	レポート	今回初めてレポートを提出したが、書式や注の付け方に自信がない。特に、①字数制限あった場合、参考文献やタイトルは字数に含まれるのか、②「参考文献」とは何か、③注の付け方が分からない、という点が不安。	不安点についてそれぞれ、①特に指定がなければ基本的には本文のみ、②論の展開に関係のあるものはすべて書いておいた方がいい、③要約した箇所についても注をつけるべき、と回答。また、参考文献一覧の書式についても説明した。
18	6/19	商	社会との対話	プレゼン	とある鍵会社の売上上昇の推移についてプレゼンしようと思っている。先生に相談したところ、日本の建築市場全体の推移も見ることがいわれ、今はそれに関するデータを探している。どう探せばよいか分からない。	データについてはレファレンスに対応以来。ただし、日本の建築市場の推移に関しては、データだけ見るよりもそのテーマについて扱っている本や論文を読んで、傾向や原因、展望などを知っておくとよいのではとアドバイス。

	月日	所属	科目名	相談内容		対応内容
				カテゴリ	詳細	
19	6/18			レポート	フィリピンにおける女性の現状について知りたい。特に雇用状況がどうなっているかについて。OPACを使って日吉メディアの本についてはだいたい見てみたが、参考になりそうな本はなかった。	webcatplus と CiNii を使ってみることを提案し、使い方を教えた。
20	6/18	1		レポート	外国語の参考文献の書き方が分からない。	アカデミック・スキルズの付録を紹介した。ただし、書き方よりも何を書かなければいけないか、書き忘れてはいけないことは何か、といったことを指導。引用と要約は違うこと、要約についても参考文献を記さないといけなくとも教えた。
21	6/18			資料の探し方	『雨月物語』の英訳がほしい	レファレンスに協力依頼。英訳だとタイトルが訳した人によって異なるので、作者で調べた。
22	6/19	法政 1	情報	資料の探し方	情報検索の課題	CiNii や OPAC の使い方を教えた。それと関連して、keio.jp からのデータベース接続の方法も教えた。
23	6/19		アカデミック・スキルズ	レポート	「18世紀の英国における傘の普及と産業革命」について調べているが、文献が見つからない。	レファレンスと協力して対応。CiNii を使った雑誌論文の調べ方も教えた。
24	6/23	法 1	情報	資料の探し方	情報検索の課題	雑誌の検索方法についてレクチャー。
25	6/23	文・経	一般教養科目	レポート	レポートとはそもそも何なのか分からないので、基本を教えてほしい。具体的なレポート課題に関するプリントはなくしてしまった。	メディアセンターのWEBページからKITIEを紹介したほか、アカスキの論文集を使って、引用と参考文献の違いを説明。また、アカデミック・スキルズの教科書を用いて参考文献の文法を紹介した。
26	6/24	理 1	情報	資料の探し方	6月10日17:40のカルテと同様。	6月10日17:40のカルテと同様。
27	6/24	1	情報	資料の探し方	6月10日17:40のカルテと同様。	6月10日17:40のカルテと同様。
28	6/24	法 1	社会学_地域史	レポート	地域史の本を一冊取り上げ、どのような人物が関わり、どのような経緯で編まれたかを記述し、読んでおもしろかった点を挙げるという課題。かかわった人物を全て挙げておもしろかった点で紙幅が尽きてしまい、面白かった点についての言及が少なくなってしまう。	主だった人物の名前を書いて適度にまとめ、余力があれば彼らが他にどんな研究・活動を行っているか調べられることをすすめた。面白かった点については直接引用にこだわらずに要約して書き進めることを伝え、引用の仕方について教えた。
29	6/24	1	情報	資料の探し方	6月10日17:40のカルテと同様。	6月10日17:40のカルテと同様。
30	6/25		地域文化論	レポート	「ドラクロワの自由像はなぜ向きを変えたのか」といった課題3つの中から一つを選択するというもの。論文というものが何か分からず、課題に使えるような本が見つからない。	「スライド」を用いて論文とは何か説明。本の探し方についてはwebcatplusを案内し、具体的に資料を探す作業はレファレンスに対応を依頼した。

	月日	所属	科目名	相談内容		対応内容
				カテゴリ	詳細	
31	6/25		比較文化論	レポート	レポートの取り組み方が分からない。どうやって書けばよいか分からない。	レポートとは何かについて説明。手順としては、まずは自分の興味あることを見つけ、次にそれについて本などを読んで知識をつけ、問題意識を鮮明にすることを教え、その後レポートに取り掛かることを提案した。
32	6/25	経	世界経済の現状と課題	レポート	「日米の経済関係の新たな局面について」という課題。テキストの内容をレポートに書いてよいか不安。論文検索の仕方が分からない。レポートの構成をどうすればよいかも分からない。	著者の独自の見解や主張は注をつけるか引用として書く必要があると説明。CiNiiの使い方を教えたほか、レポートの概要をレポートの冒頭に書くのもよいだらうと提案した。具体的な構成については『論文集』を見て考えてもらった。
33	6/25	文 1	ジェンダー論 I	レポート	課題は「『男性』の現在と過去・ヨーロッパについて」。どうやってレポートを書き始めたらよいか分からない。形式も、どんな参考資料を読むべきかも分からない。期限が近くてあせっている。	まず課題が求めているものを把握することを提案。参考資料が提示されているものはそれを読み、そうでない課題は「日本の論点」等の論説を読んでみることを提案。データベースとして新書マップ、webcat等も紹介。形式は『アカスキ』の付録を紹介。
34	6/25	法 1	公開授業	レポート	講演会についてのレポートだが、何をかけば良いのか分からない。時数制限がないが、どれくらいが妥当か分からない。	感想文にならないようにと注意した後、「スライド」を用い、どんなレポートが求められるかを考えてもらった。自分の立場表明が求められるので、反対意見も紹介しつつ自分の論を補強していくことを提案。字数は担当教員に確認してみるよう伝えた。
35	6/26	薬	自然人類学	レポート	課題は「ネアンデルタール人の絶滅の原因」。原因として寒冷化を考えているが、それに関する資料がほしい。	ニュートンの別冊本で地球温暖化の数千年オーダーのデータがあったと記憶していたので、それをすすめたほか、IPCCのウェブサイトも案内した。また、仮説が先行研究に支えられるべきものだということや、参考文献の書き方も教えた。
36	6/26			レポート	課題は好きなテーマで英語でエッセイを書くというもの。就職活動の国別の違いをテーマにしようと考えたが、資料が見つからなかった。情報の調べ方やエッセイの方向性について相談したい。	レファレンスと共同で文献を検索。国ごとの就職活動の制度を比較することを考えているようなので、雑誌論文を調べた。議論の焦点を絞った方がいい、もう少しじっくり資料を探してみたいという結論に至った。
37	6/29		ジェンダー論 I	レポート	課題は「日本と近代ヨーロッパにおける「男らしさ」の変容、またその関係」。課題図書の要約も、どのように書いてよいか分からない。	課題文と一緒に読み込み、担当者の意図を汲み取りながら、どのように書いていけばよいかをレクチャー。この際、『論文集』も用いた。また、ジェンダー論に関する図書を検索し、該当する分類番号の図書を読むことをすすめた他、新書マップも紹介した。
38	6/29		政治学 I	レポート	課題は「政治に関して何か興味のあることについて」。テーマが絞れずに困っている。問いを立てて論ずる形式もまだ不十分。	Webcat plus や Cinii の使い方を教えたほか、参考文献を示す重要性を説明。授業内で、脚注の付け方や参考文献の書き方は練習していたようなので、説明は簡単に済ませた。論を絞るに際して CiNii を見てみることをすすめた。

	月日	所属	科目名	相談内容		対応内容
				カテゴリ	詳細	
39	6/29		情報	資料の探し方	情報検索の課題	関連する書籍を探せるようにWebcatplusを教え、そこから、OPACに飛んで慶應メディアセンター内に所蔵されている本かを調べるように勧めた。また、CiNiiについても教えました。
40	6/30			プレゼン	パワーポイントの使い方について知りたい。	OPACでパワーポイントについて調べ、関連図書の場所を案内した。まずはそれを読んでみてそれでも分からなければ再度来てもらうことにした。
41	6/30	法政		レポート	本の要約と書評が課題（各1000字）。書評の書き方が分からない。	「この本を一言で説明すると？」や「この本のキーワードは？」といった問いかけによって本を紹介してもらった。出てきたキーワードと関連する資料を探し、その資料と当該の本を比較することをすすめた。
42	7/1	法	社会学	レポート	課題は「東アジアの電子ネットワーク戦略」について。要約と書評の書き方が分からない。具体的には、書評は全体に対してなのか、自分が選んだポイントについてか。各章に対して要約を書くべきか、全体としての要約を書くべきか。	課題プリントを一緒に読むことで、課題の整理を行った。要約・書評共に1000字程度だったので、簡潔にまとめられるようアドバイスした。また、参考文献についての話も付け加えた。
43	7/1	1		資料の探し方	自分で設定した課題について論文を書くという授業で、今回はまず論文目録を作るという課題。特に困っているというわけではないが、レファレンスの方に聞いて作りなさいと言われたとのこと。調べたいのは「馬・馬術の文化と海外の交流」について。	「馬」というキーワードでしか検索したことがなく、基本的な知識もほとんどない状態だったので、まずはキーワードを知るために辞書や百科事典で調べることを勧めた。Webcatplusの連想検索や、イモズル式検索法についても教えた。
44	7/1	法	少人数セミナー	レポート・プレゼン	課題はナショナリズムに関して研究し、発表するというもの。テーマは「イギリスにおいて移民政策によって国民の意識がどう変わってきたか」。相談内容は①資料が見つからない②国際比較をすべきか③信用できる情報の見分け方が知りたい。	①レファレンスに協力依頼。②残り時間が少ないので、国際比較へ広げるよりは今やっていることに集中すべきだろうとアドバイス。また、望む資料が出てこなかった場合のことを考えるよう伝えた。具体的には国民意識に関する研究を見ることを提案。
45	7/2	1		プレゼン	学術論文というものかどうものなのか分からない。普通の雑誌記事との違いを教えてほしい。	学術論文に大事な要素として客観性と論理性を挙げてその特徴を説明した。また、自分の考えと他人の考えを区別し、根拠をもとに論を展開していくことも特徴であり、その結果そこには脚注が多く含まれるということも説明した。
46	7/2	1	ドイツ語	プレゼン・レポート	「ヨーロッパ市民と美術」というテーマの中で、「海外に比べて日本では美術や美術館が身近ではない」ということを言いたい。そのために各国の美術館の数を知りたいが、その資料が見つからない。	レファレンスに協力を依頼して統計資料を探したが、望む物は出でこず。量的資料が出てこなかった場合、質的調査を加えてみることも大事だとアドバイス。具体的には、海外の美術館の、日本にはないような取り組みを探してみてもどうかと伝えた。
47	7/2	1	現代世界史	レポート	レポートがどんなものか分からない。本の要約もどう行えばよいか分からない。何文字くらいにまとめればよいか気になる。	本の要約については「10枚くらいにしようと考えている」と言っていたので、多くてA4に2枚程度がよいだろうと伝えた。また、「はじめに」に書かれたその本の校正を頭に入れてから読むと理解も進み、要約もしやすくなるとアドバイスした。

	月日	所属	科目名	相談内容		対応内容
				カテゴリ	詳細	
48	7/3	文		資料の探し方	チャイコフスキーの「ロミオとジュリエット」に関する雑誌論文を探したい。	CiNii で検索し、オンラインで閲覧可能なものがあったので、紹介した。
49	7/3	理	英語	資料の探し方	「ACC NET ACADEMY」というサイトを調べてほしい。	google で検索したら見つかった。ACCではなくALCというだけだった。
50	7/3		生物	資料の探し方	絵が描かれている図鑑を探したい。	OPAC で検索。
51	7/6		美術 I	レポート	課題は「ボードレールのロマン主義の定義について」。レポートの書き方が分からない。	まずレポートのフォーマットについて説明。それから、一緒に課題文を読み込み、担当者がどういうレポートを求めているのかを確認。情報検索までする時間はなかった。最後に、期限内に提出することを強調した。
52	7/6		地域文化論	レポート	テーマは「ドラクロアと民衆」。レポートの書き方全般について教えてほしい。	日吉メディアセンターウェブページの使い方を案内した他、『アカスキ』も紹介した。また、『論文集』を紹介して、レポートの書き方の基本、レポートとは何か、参考文献の書き方といったことを説明した。
53	7/7	法政 2	アカスキⅢ	レポート	ペットが人間に与える心理的効果や人間がペットに与える愛情の種類について調べたいが、よい資料や参考文献が見つからない。	レファレンスと協力して対応。日本の論点や webcatplus、CiNii などを使って検索。提出期限が明後日という状況だったので、すぐに入手できる範囲の物を探した。
54	7/7	文 1	社会学特論	レポート	課題は「図書館無料貸本屋論について」他から1つ選択。課題にどう取り組みればよいか分からない。	まずは複数の課題の中から自分の興味のあるものを選択。2人でキーワードを言い換えながらテーマに関する資料を検索。最終的に見つかった資料をいくつか読んで、大体のアウトラインを作ることを提案。作法については『アカスキ』の付録を紹介。
55	7/8	商 2	アカスキ	レポート	売春合法化反対について書きたいが、①先生に賛成派の意見も書けと言われて、どうしたらよいか分からなくなっている。②「はじめに」や「まとめ」で何を書いたらよいか分からない。	①については、賛成意見・反対意見を並べてすぐにまとめという論を想定していたようなので、反対意見の方が優れているということを客観的に示す必要があると伝えた。②についても、まずはその検証部分が必要であると伝えた。
56	7/8	経 1	情報処理	レポート	読書感想レポートが課題として出され、「形式は細かく見る」と言われたのだが、具体的にどのようにしろという指示は無く、どうしたらよいか困っている。	相談者が持ってきた草稿を見ながら、不十分な点を指摘した。具体的には、表紙をつけること、ページ番号を入れること、参考文献の書誌情報を示すこと、直接引用には注をつけること、参考文献一覧を設けること。
57	7/9	文 1		レポート	レポートの内容はすでに書けているが、表紙等の形式が分からない。	『論文集』と『アカスキ』を使って形式の大事なと、形式の与える印象について伝えた。
58	7/10	法政 1	歴史学 I	レポート	レポートとは何か、分からない。課題は「歴史学における資料批判」。	レポートとは何かということについて説明。また、資料探しやアウトライン作成のためのヒントも出した。
59	7/10		近現代イギリス詩入門	レポート	レポートの書き方が分からない。課題は「16世紀から18世紀までの詩を一つ選び、評価する」というもの。	レポートの様式や、参考文献と引用の仕方について説明した。

	月日	所属		科目名	相談内容		対応内容
					カテゴリ	詳細	
60	7/10		1	現代世界史_中東	レポート	課題図書の要約と小論が課題として出されたが、要約は何枚程度書けばよいのか分からない。	課題プリントを一緒に読んで課題を確認・整理した。課題のほとんどは要約であることが分かった。要約についても、①全体的な内容、②特定トピックに関する内容、という流れだったので、できるだけ①を簡潔にし、②に力を入れるようアドバイスした。

※あみかけのセルは聞き忘れ・書き忘れないしは回答拒否

※略称については以下の通り

アカ・スキ：アカデミック・スキルズ

「スライド」：レポートレクチャー用スライド

「レポートって何？」：レポートって何？のレポート

『論文集』：『アカデミック・スキルズ学生論文集』

『アカスキ』：佐藤編著『アカデミック・スキルズ』

学習相談メモまとめ（秋学期）

	月日	所属	科目名	相談内容		対応内容
				カテゴリ	詳細	
1	10/19	経 3	ゼミ	資料の探し方 ↓ レポート	三田祭論文への取り組みの中での質問。米国における牛肉の輸入国を知りたい。戦後_現在という比較的長期スパンでの資料がほしい。	(資料検索についてアドバイスしたかは記述なし) 南米・北米の貿易構造が森林破壊を促進しているという論だったので、似た事例としてヨーロッパの農業とアフリカの砂漠化についてもコメントした。
2	10/20	経 1	地域文化論・北米事情	レポート	提出期限が迫っているのだが、レポートがどういうものなのか分からず困っている。また、期限が近いということもあり、どこまで本気でやればよいか悩んでいる。	「スライド」「レポートって何？」を用いてレポートについて解説。どれだけ本気で、という点にうついては、まず、レポートの形式によって評価が違うこと、レポートの成績は全体の1/6という条件を確認し、優先順位をつけたタイムマネジメントをすすめた。
3	10/22	法 1	英語第二	プレゼン	3人1組で、自分たちで問題設定し、調べてプレゼン。論証することの根拠に自分達で調べたデータを使ってよいか、プレゼンは3人全員で話した方がよいか、という点が気になる。	自分達で取ったデータ以外にも公式のデータを探してみるとよいとアドバイスした。また、数的データだけでなく、質的データ(インタビュー等)についても検討してみることをアドバイスした。プレゼンの形式は3人であればどちらもよいと思うと伝えた。
4	11/4	文 4	ゼミ	卒論	卒論で行き詰った。テーマは台湾の本土化政策と郷土政策の関係について。両者の矛盾を論証しようとしたが、担当教授に面白くないと指摘され、困っている。資料が少ないのも問題点。残り2カ月という時間の中でどう進めていけばよいか分からない。	担当教授の意図を二人で考えてみた。単に矛盾としてしまうのではなく、どういった影響関係にあるのかをつっこんで考えてみることを提案した。資料については、キーワードを広げて検索しなおしたり、レファレンスに協力を仰いでみることを提案した。
5	11/13	法 1	英語第二	資料の探し方 ↓ プレゼン	ジェンダーについて資料を集めたい。	レファレンスと協力していくつかの資料を提示。ジェンダーに関する参考文献も追加で提示し、プレゼンの流れの参考にしてみたらどうかと提案した。また、各資料の参考文献を見ることで、イモツル式に本を探す方法も教えた。
6	11/25	経 1	英語セミナー	プレゼン・レポート	授業の内容をもとにアメリカの大学について調べ、自分で課題を設定して論ずるという課題。テーマについて調べて論ずるという課題は初めてなので、取り組み方が分からない。海外の大学についての英語文献をどう探せばよいかも分からない。	「スライド」を用いて簡単に説明。資料については、英語文献を探す前にテキストや日本語文献の内容を整理することで検索のためのキーワードをまとめることをすすめた。本を探す際には、該当書架の近辺をブラウジングするのがよいとアドバイスした。
7	11/26	法 1	民族文化論(オムニバス形式)	レポート	レポートの書き方が分からない。良い資料の探し方が分からない。	高校までのレポートと大学のレポートの違いを指導。形式的なこと(参考文献や脚注のつけ方)を『論文集』を見せながら教えた。内容についてはテーマが漠然としていたので、一緒にテーマを絞っていった。その後レファレンスと文献を検索した。
8	12/1	文 1	民族文化論(オムニバス形式)	レポート	レポートの書き方が分からない。小論文との違いが分からない。	「スライド」「レポートって何？」を用いてレポートについて説明。参考文献が指定されていたので、まずはテーマを決め、そのテーマで気になったポイントを見つけて問題設定することをすすめた。また、論文の書き方(形式)に注意するよう伝えた。

月日	所属	科目名	相談内容		対応内容	
			カテゴリ	詳細		
9	12/2			資料の探し方	英語文献の探し方を教えてほしい。キーワードは「ファンド」と「規制」。	① OPAC にて、fund regulation で検索、②実際に本を見て、目次や参考文献を見てみる、③訳書の出ている本にあたり、訳書を読んで見つけたキーワードを原著と照らし合わせて新たなキーワードを手に入れる、といったアドバイスをした。
10	12/2	理 1	英語	資料の探し方 ↓ プレゼン	1 グループ 15 分という持ち時間のプレゼン。アメリカの食中毒の件数について調べたい。課題は、これまでの授業の内容からテーマを選んで日米比較をしつつ発表するというもの。日本については調べられたが、アメリカについては調べられていない。	資料検索の方法として、① webcatplus を使う、②検索ワードを広げてみる、③ CiNii を使う、といったことを紹介。その後レファレンスと協力して対応。レファレンスが後日回答となったので、CiNii で見つかった（が、慶應にない）資料にあたってみることもすすめた。
11	12/2		英語	資料検索 ↓ プレゼン	新聞記事をキーワード検索したい。課題は自由だが、自分で決めたテーマは、ネパールにおける毛沢東主義派について。	日吉メディアセンターのサイトトップから各社新聞データベースを紹介。LexisNexis の簡単な使い方を説明。参考文献の書き方として、web に上がっているものをあたかも現物を見たかのように書いてはいけないという点についても説明した。
12	12/3			資料の探し方	新刊図書コーナーで3日位前に見た本を探している。タイトルは覚えていないが、起業に関する本で、タイトルにも「起業」というワードが入っていた気がする。表紙に自由の女神のようなイラストがあった。	レファレンスと協力して対応。OPAC で「起業」というキーワードで検索したが出てこなかったため、「起業」に関する本の多い請求記号「B@335@」を検索。出てきた物の中でそれらしいものを Amazon にて検索。本の表紙のイラストを確認した。
13	12/4		英語	資料の探し方 ↓ プレゼン	Boston University に関する資料がほしい。項目は何でもよいが、ウェブ資料でないことが条件。日本の大学と比較してまとめるのが課題。	レファレンスと協力して対応。OPAC のキーワード検索で "Boston University" を入れると関係者が書いた本が出てきてしまうので、人名・件名で検索。ERIC や Lexis-Nexis といったデータベースでも資料検索を行った。
14	12/4			資料の探し方	1980 年から 2009 年の内閣支持率の調査データを月別で手に入れたい。グループで作業しており、各新聞社ごとに担当を割り振っている。相談者は朝日新聞担当。	データベース検索で記事は出るが、統計資料は出てこなかった。Google にて「内閣支持率 データベース」で検索したところ、最終的に新聞社の知的財産に関する問い合わせに行きついた。
15	12/7	商 2	アカ・スキ	レポート	アメリカの保険制度の是非を問いたい。論文のテーマは決まっているが何から手をつけたらよいか分からない。	テーマが漠然としていたので、保険の何について書きたいのかを一緒に考えた。「保険」といっても切り口は様々あることを指導。まだ本を読んでいなかったようなので、まずは保険分野の本を読むようアドバイスした。
16	12/9		英語	資料の探し方 ↓ プレゼン	海外で日本人がしてしまいがちな（異文化交流における）失敗について調べたい。課題はその失敗を実演するというもの。	演ずるという形式だったので、統計やデータ集よりはアドバイス集、体験談がよいと判断、webcatplus の使い方を教えつつ、調べてみた。いくつかそれらしい本が出てきたので、実際に見てみることを、その周辺をブラウジングすることを勧めた。

	月日	所属	科目名	相談内容		対応内容
				カテゴリ	詳細	
17	12/9		情報	その他	基本ソフトウェアについての概要を知りたい。課題は基本ソフトウェアについて簡単に説明するというもの。プレゼンというほどのものではないとのこと。	まだ入門書の類も調べていなかったようなので、一緒に OPAC からキーワード検索をした。また、次以降の課題にも対応できるよう、webcatplus の使い方も教え、書架に行ったら周りの本をブラウジングしてみることもすすめた。
18	12/9		英語	資料の探し方 ↓ レポート	アメリカにおける育児休暇取得率や出産後の退職率・復職率について知りたい。レポートのテーマは自由だが、就業と出産・育児の関係について調べたい。	アメリカの統計本を紹介した他、webcatplus を案内した。要望に合致しそうな本が日吉にあったので、①その本を読むこと、②周りをブラウジングすること、③参考文献にあたることをすすめた。また、数的データだけでなく、新聞等の議論も見てみることもすすめた。
19	12/10		総合教育セミナー	レポート・プレゼン	テーマはイギリスの女子教育について。具体的には、労働者階級の子供がどういった義務教育を受けるのか調べたい。	OPAC をあまり使ったことがなかったようなので、まずは OPAC でいくつかキーワードを入れて検索すること、それで見つかった本の参考文献を追ってみることを提案した。
20	12/15	理 1	自然科学実験 (化学)	レポート	NaOH と HCl の反応熱の実験。なぜ温度が上がりが始めてから 5 分で実験を終了してよいのか分からない。考察と結論には何を書けばよいのか分からない。	実験書に載っている参考書と、化学書資料館を薦めた。考察については、基本に基づいて①先生に授業内で指示されたもの、②誤差 (原因を定量的に扱う)、の説明をした。
21	12/15		英語	プレゼン	英語のプレゼンに向けて外国人労働者についての資料を探している。CiNii の使い方を教えてほしい。	最近話題になったカルデロン夫妻の強制退去について興味があるとのこと、それについて調べてみたが、収穫はあまりなし。似たような事例について調べるとともに、外国人労働者に関する文献をいくつか紹介した。
22	12/17	法 2	英語	レポート	英語のエッセイを書くときの引用の仕方が分からないので教えてほしい。	既に行ったプレゼンを文章化することで、トピックの決定やりサーチについてはすでに終わっていたので、英語論文の際の注意点を確認していった。また、そのうえで英語論文の書き方に関する本をいくつか紹介した。
23	12/15	経 2	哲学	レポート	「経験」についてというレポート課題が出たのだが、何を書いてよいのか分からない。	基本的なレポートの書き方については知っているようだったので、どのような書き進め方があるかの例 (相談員だったらどう書くか) を出し、参考にしてみるよう伝えた。
24	12/18	塾 高		卒論 (塾高)	海外で自然災害が起こった際、日本や諸外国がどのような援助をどの程度行っているのかを知りたい。	レファレンスと協力しながら web サイトや図書を検索。外務省や JICA などに適当な資料があったので、それを参考にしてみるように伝えた。また、塾高の図書館スタッフの方にも相談してみるよう伝えた。
25	12/18	文 1	アカ・スキ	レポート	トピックについてのブレインストーミングを手伝ってほしい。取り組んでいるテーマは、『僕は勉強ができない』という作品の「ホモソーシャル」的な視点での分析。	まず、国民国家建設において「ホモソーシャル」「ヘテロセクシャル」が果たした役割について解説。次に、相談者がこの作品を「ホモソーシャル」的視点で分析しようとした理由を確認。また、自分の直感を大切にしつつ、落とし所を決めて作業する重要性を伝えた。

	月日	所属	科目名	相談内容		対応内容
				カテゴリ	詳細	
26	12/22	経 2	経済史 2	レポート	読書レポート（要約 3000 字、コメント 3000 字）の課題が出ている。本の候補 8 冊のうち 2, 3 冊に目を通した。何かアドバイスが欲しい。	具体的な内容には踏み込まず、例を挙げて話をした。要約にせよコメントにせよ、筆者の立場を明らかにすることが大事だと伝えた。また、コメントを書く際の参考文献や注の書き方を、『論文集』を見せながら伝えた。
27	12/22		フランス地域文化論	レポート	レポートの書き方が分からない。	「スライド」を使って説明。脚注の付け方についても説明。その後、課題文を読み込み、一緒にテーマについて考えた。全体のまとめと今後の流れについてもアドバイスした。
28	1/7		少人数セミナー	レポート	「写真について」という課題だが、何をテーマにすればよいのか分からない。アイデアが浮かばない。また、そもそもレポートとは何かも分からない。	「スライド」を用いてレポートとは何かを説明。既に読んだ本から気になった点を挙げてもらおうとしたが、うまく挙げられなかった。期限も近いので、テーマになりそうなことをリストアップし、期限や興味、学術性、文献の数などから決めていくとよいと伝えた。
29	1/7			レポート	文献 A に載っていた統計データ（実は文献 B を元に作成したもの）を引用する際に、文献 A から引用したとしてよいのか。なお、文献 B はアメリカのマイナーな雑誌で入手困難。	孫引きは原則禁止であり、文献 B を見て統計データを作成するのがよいと伝えた。しかし、今回は資料が手に入らないとのことで、探す努力をしたが手に入らないということを教授に伝え、孫引きしてよいか聞いてみるということを提案した。
30	1/8		英語初級	資料の探し方	アジア平和国民基金に関する資料を探したい。	① webcatplus → OPAC、② データベース → 新聞、③ CiNii、という 3 つの方法を紹介し、実際に①で資料を探してみた。2, 3 冊例を挙げた。
31	1/8	法	物理	レポート	「20 世紀以降の物理」について調べ、A4 を 1 枚以上のレポートで提出という課題。前は手書きだったので、今回は word で作り、レポートの形式もしっかりとしたものにしたい。	課題は調べ学習中心のものだったが、自分の意見も書けるとよいと思い、調べた内容 + (意見 or 意見の比較) + 参考文献リストという形を教えた。レポートの形式については、『アカスキ』等、論文・レポートの書き方の本をいくつかすすめた。
32	1/12	法 2	スペイン語協	レポート	ラテンアメリカの貧困問題についての調べ学習レポートの課題。普段コピー＆ペーストのレポートが多いので、本来どう書くべきか分からない。	レポート一般の話を中心に行った。参考文献の付け方は『アカスキ』と『論文集』で教え、脚注は word のつけかたを実際に見せた。論文検索は CiNii を教え、データについては表やグラフを用いるとデータが読みやすくなると伝えた。
33	1/13	経 1	中国事情	レポート	「自分にとって中国とはどのような対象か」というタイトルでのレポート。条件として、歴史的背景に言及すること、自身の立場を明確にすること、問いを立てること、がある。どのように進めていったらよいかアドバイスが欲しい。	担当教員から出された条件を確認し、興味のあるテーマについて語ってもらうことを通して、今後の方向性を考えた。興味あるキーワードで授業中に気になった点はないかと聞き、キーワードを問いの形にすることを行った。
34	1/13	文 1		レポート	レポートは書いたのだが、書式について不安が残っている。作文のように段落の最初は 1 マスあけるのか等。	『論文集』を見せながら、書式について説明した。レポートに不慣れのようだったので、表紙をつけた方がいいことや、引用の仕方などについても説明した。

	月日	所属	科目名	相談内容		対応内容
				カテゴリ	詳細	
35	1/14	経 2	ゼミ	レポート	ゼミの試験で1970年代の外国の財政に関するレポートを提出しなくてはいけないのだが、何から手をつけてよいのか分からない。	まず、そのゼミが何について研究するゼミかをよく知る必要があると伝えた。話を聞くと、すでにある程度調べており、米財政について扱いたいとのことだった。字数制限を考えて問題点を絞ることをすすめ、文献検索方法や書式についても説明した。

※あみかけのセルは聞き忘れ・書き忘れないしは回答拒否

※略称については以下の通り

アカ・スキ：アカデミック・スキルズ

「スライド」：レポートレクチャー用スライド

「レポートって何?」：レポートって何?のレポート

『論文集』：『アカデミック・スキルズ学生論文集』

『アカスキ』：佐藤編著『アカデミック・スキルズ』

学習相談アワーポスターなど

2008 年秋学期

学習相談アワー

レポートがなんだか
わからないあなたへ



レポートって何？
どうしたらいいの？

そんなとき、
相談してみませんか？
レポートの取り組み方や
プレゼンの基本について、
大学院生の先輩がサポートし
ます。
ぜひ気軽に
話しかけてください！

【日時】
11月27日(木)
12月4日、11日、18日(木)
14:00-17:00

【場所】
日吉メディアセンター 1階レファレンスデスク

【お問い合わせ】
日吉メディアセンターレファレンスデスク
平日8:45-17:00

※レポートの代筆や添削ではありません

2009 年春学期

学習相談アワー

レポートがなんだか
わからないあなたへ



レポートって何？
どうしたらいいの？

そんなとき、
相談してみませんか？
レポートの取り組み方や
プレゼンの基本について、
3・4年生や院生の先輩が
サポートします。
ぜひ気軽に
話しかけてください！

【日時】
6月8日(月)～7月10日(金)
毎週月～金13:00-18:00

【場所】
日吉メディアセンター 1階レファレンスデスク

【お問い合わせ】
日吉メディアセンターレファレンスデスク
平日8:45-17:00

※レポートの代筆ではありません

2009 年秋学期

学習相談アワー

レポートがなんだか
わからないあなたへ



レポートって何？
どうしたらいいの？

そんなとき、
相談してみませんか？
レポートの取り組み方や
プレゼンの基本について、
3・4年生や院生の先輩が
サポートします。
ぜひ気軽に
話しかけてください！

【日時】
2009年10月5日(月)～2010年1月15日(金)
月～金 13:00-18:00
※三田祭と冬休み期間はお休みです。

【場所】
日吉メディアセンター 1階レファレンスデスク

【お問い合わせ】
日吉メディアセンターレファレンスデスク
平日8:45-17:00

※レポートの代筆ではありません

レファレンスデスク看板

学

習
相
談

コーナー

レポート・プレゼンの相談、リクエスト受付中。

Mon. - Fri.
13:00 - 18:00

図書館内案内用ポスター①

**学習相談
コーナー**

平日 13:00~18:00
レポート・プレゼンの相談を受け付けています。



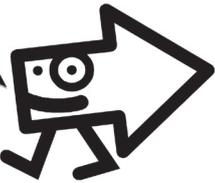
図書館内案内用ポスター②

**学習相談
コーナー**

平日 13:00~18:00

レポート・プレゼンの相談を受け付けています。お気軽にどうぞ!

月
日
直

こちらへどうぞ 

図書館内案内用ポスター③

**学習相談
コーナー**

平日 13:00~18:00

レポート・プレゼンの相談を受け付けています。お気軽にどうぞ!



日吉教員宛プロジェクト趣旨説明および協力依頼文書

各位

この度、教養研究センターではメディアセンターとの共催にて、「学生の学習環境を整える」プロジェクトを開始しました。

アカデミックスキルズ修了の学生相談員（第3学年、大学院生）が、メディアセンターのレファレンスカウンター内で図書館員の指導の下、学生からのレポート作成・文献探索に関する相談に対応するという取り組みです。

学生目線で学生の相談に乗ること、相談に乗ることで相談員自身の学力を高めること、および学生が学習面で直面する問題・悩みについての事例を集め、学習環境改善の材料とする、の三つが活動の目的です。

受け付ける相談はあくまでレポート作成の手続と文献の調べ方など、一般的知識やスキルに関するもので、内容に立ち入ったレポート作成の補助をするものではありません。

チラシを添付いたしますので、趣旨にご賛同いただいた先生方には、ご指導の学生へもお知らせいただければ幸いです。

この件について、御意見御質問などありましたら、下記までご連絡ください。

ご多忙のりお世話になりますが、何卒よろしくお願い致します。

教養研究センター

プロジェクト担当 種村和史

メディアセンター レファレンス担当(Ex. 32541)

hc-reference@lib.keio.ac.jp

各位

この度、教養研究センターではメディアセンターとの共催にて、「学生の学習環境を整える」プロジェクトを開始しました。

アカデミックスキルズ修了の学生相談員（第3学年、大学院生）が、メディアセンターのレファレンスカウンター内で図書館員の指導の下、学生からのレポート作成・文献探索に関する相談に対応するという取り組みです。

学生目線で学生の相談に乗ること、相談に乗ることで相談員自身の学力を高めること、および学生が学習面で直面する問題・悩みについての事例を集め、学習環境改善の材料とする、の三つが活動の目的です。

受け付ける相談はあくまでレポート作成の手続と文献の調べ方など、一般的知識やスキルに関するもので、内容に立ち入ったレポート作成の補助をするものではありません。

また、秋学期より、初の試みといたしまして、教養研究センター設置科目「アカデミック・スキルズ」の公開講座をメディアセンター内で実験的に実施いたします。講義の中から、「テーマを決める・選ぶ」「プレゼンテーションの基本」といったレポート作成の基本に関する内容を、授業担当者が講義いたします。

チラシを添付いたしますので、趣旨にご賛同いただいた先生方には、ご指導の学生へもお知らせいただければ幸いです。

この件について、御意見御質問などありましたら、下記までご連絡ください。

ご多忙のりお世話になりますが、何卒よろしくお願い致します。

教養研究センター

プロジェクト担当 種村和史

日吉メディアセンター・レファレンス担当(Ex. 32541)

hc-reference@lib.keio.ac.jp

アカデミック・スキルズ公開講座

第1回公開講座ポスター

教養研究センター・日吉メディアセンター共催
2009年度秋学期アカデミック・スキルズ
公開講座のお知らせ

Part1 講義
「テーマを決める・選ぶ」
講師：篠原俊吾 教授(法学部)
「プレゼンテーションの基本」
講師：横山千晶 教授(法学部)

日時：2009/10/14(wed) 16:30-17:30(60分程度)
場所：日吉メディアセンター1階セミナーコーナー
定員：15名程度(他にアカデミック・スキルズ履修者が20名受講します)

※予約不要。参加をご希望の方は、当日16:25までに
1階レファレンスデスク前に集合してください。

次回予定 Part2 ワークショップ
「さまざまな論点のマッピングと要約」
講師：横山千晶 教授(法学部)
日時：2009/11/4(wed) 16:30～
場所：日吉メディアセンター内

お問い合わせ：日吉メディアセンター(日吉図書館)1階レファレンスデスク
(平日8:45-17:00)またはhc-reference@lib.keio.ac.jpへ

第1回公開講座使用スライド①

テーマを選ぶ・決める

アカデミックスキルズ
篠原 俊吾

1

テーマ選びのコツ

1. 発表とは聞き手、読み手への「貢献」である
2. 「テーマ選び」とは「結論選び」である
3. 「ひっかかる」ように作る
4. 「独創」と「独断」は紙一重
5. 何事もほどほどに

2

1. 発表とは「貢献」である

- ・ 発表とは、聴衆、読み手への貢献である。
- ・ このテーマで話す(書く)と、どういう意味ある事実が説明できたことになるのか。聞き手(読み手)にとってどういうメリットがあるのか。
- ・ 何か新しい視点を提供することが重要。

3

2. 「テーマ選び」は「結論選び」

- ・ 発表とは、自分の主張の成立させる立証のプロセスを提示することである。
- ・ どんなに面白そうでも、立証できなければ発表にはならない。
- ・ 最初からある程度「あたりをつけて調べ始める」ことが重要。
- ・ 発表で大事なものは、(1)明快な主張、(2)説得力のある根拠、(3)分かりやすい説明の3つ。(1)と(2)のセットが全てのスタートである。

4

3. ひっかかるように作る

- ・ テーマになりそうなことが見つかったら、まず最初に「世の中の人はこの問題について、どう思っているのか、または、今までの研究ではどう考えられてきたのか。」を調べよう。既存の考えと自分の考えに大差がなければ、そのテーマは発表にはなりにくい。
- ・ 口頭発表では記憶に残ることが重要。従来の説の焼き直しでは、印象に残らない。

5

4. 独創と独断は紙一重

- ・ オリジナリティは確かに大事。しかし全てオリジナル→理解不能→単なる独断となりがち。
- ・ しっかりと先行研究を踏まえ、聴衆・読み手と前提知識を共有することで、初めて、オリジナルな部分が生きてくる。(メジャー8割、マイナー2割)
- ・ 調べることが自己目的化していないか。常に聴衆の視点から「これは本当に面白いのか？」自問自答する。

6

5. 何事もほどほどに

- ・ 論文には、字数制限、口頭発表には時間制限がある。扱う範囲は、この範囲に収まる内容か？盛り込みすぎているか？
- ・ 適切な情報量でないと、論文は表面的なことしか論じることしかできない。口頭発表は、盛り込み過ぎて、早口になり理解が得られない。

7

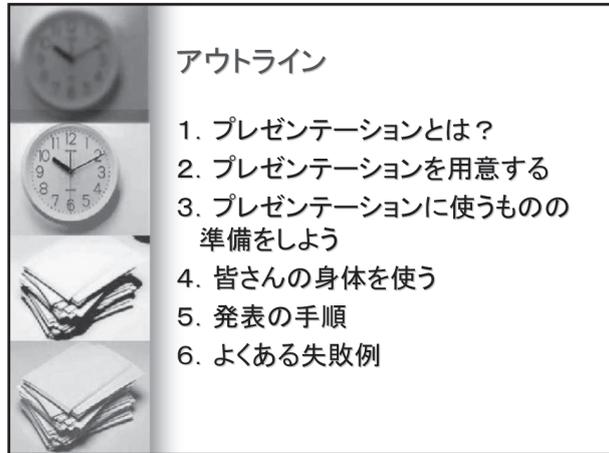
テーマの種類

- 1) なぜ、○○は、XXなのか。(謎解き型)
 - 2) どのように○○は XXに影響を及ぼしたか。(影響型)
 - 3) どうやったら、○○はXXにできるか(目的達成、提言型)
 - 4) ○○の状況はどうなっているのか。(現状リサーチ型)
 - 5) 一般的に○○だと言われているけど、実は、XXなのではないだろうか。
- ・ いずれにせよ、「これを調べたら、何が分かり、大局的にはどういう意義があるのか」を考えることが重要。

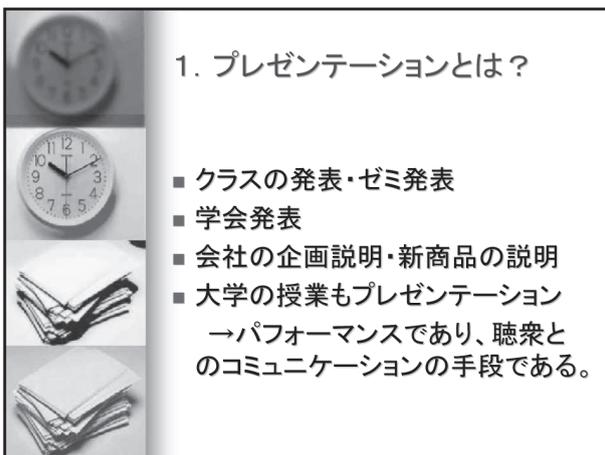
8



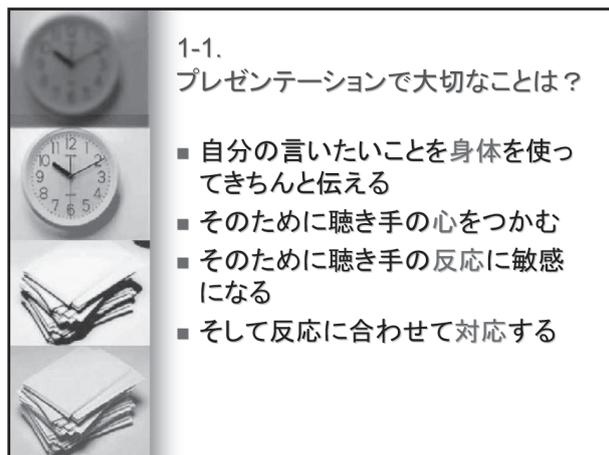
1



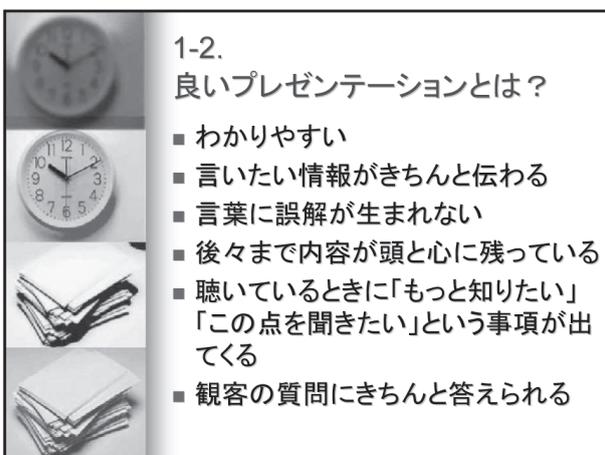
2



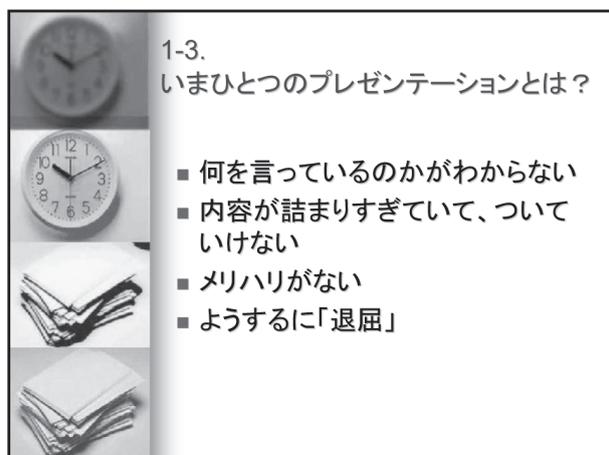
3



4



5



6



2. プレゼンテーションを用意する



- 原稿を作る？
- メモで済ませる？




7



2-1. 原稿を作るときのメリットとデメリット



- 所要時間が確定できる
- 言いたいことを過不足なく盛り込める



- × 棒読みになりがち
- × 観客の反応に対処できない
- × スピードが速くなり勝ち
- × 準備に時間がかかる



8



2-2. 原稿の使い方のお勧めは・・・



- 読むことを想定して原稿を作る
- 何度も練習
- 暗記するのはなかなか難しい。そのときはだいたいの流れをつかんでおく
- 大切なキーワードを原稿の中でチェックしておく。それが経路地点となる




9



2-3. 原稿を読む時間は？



- 1分間に読める字数は・・・

かなり丁寧な感じ 260字
 やや早めでわかりにくい 300字
 早口で何いているのかわからない 400字以上




10



- 観客の反応を見て途中で説明を加えたり、図示したりしていると、あっという間に時間が過ぎる！そのことを考慮しておくこと



→ だいたい1分200字から250字ぐらいで用意しておくといでしょう




11



2-4. 準備に必要な時間は？



- 長い原稿ほど準備に時間がかかると思ったら結構甘い！
- 短い時間の中にいかにわかりやすい構成で、要領よく情報を入れていくのが問題です
- プレゼンテーションの発表時間は厳守すること




12



3. プレゼンテーションに使うものの準備をしよう

- 1) パワーポイント
- 2) ハンドアウト(レジюме)
- 3) その他
 - 黒板
 - 映像・音響資料
 - 図表・掛図
 - OHPシート





13



3-1. パワーポイントのスライドショー

■ メリットは？

- ・視覚化することで、キーワードや説明を印象付ける
- ・図表を効果的に使うことができる
- ・スライドのデザインを工夫すると文字情報も楽しく伝えられる





14



パワーポイント

■ デメリットは？

- ・準備に結構時間がかかる
- ・アウトラインが見えにくいときがある
- ・話者とパワーポイント、どっちを見ればいいのか？
- ・話のスピード、理解のスピード、視覚のスピードがかみ合わないことがある





15



3-2. ハンドアウト(レジюме)

- アウトラインと簡単な説明
- 繰り返し参照したい資料を載せる
- グラフや数値統計など、基本となるものはパワーポイントやOHPなどで示すよりもハンドアウトの方がよい
- 参考文献表や参考資料を提示





16



ハンドアウト

■ メリット

- ・聴き手がアウトラインを追いやすい
- ・あとで見直すことができる
- ・その場で書き込みができ、ただ聞き流すことが少なくなる
- ・プレゼンテーションがいつ終わるのか、見通しがつく





17



ハンドアウト

■ デメリット

- ・ノートを取らない
- ハンドアウトのよくない使い方
 - ・アウトライン以上の細かな内容や大量の資料を載せる(一体何が言いたいのか?)
 - ・実際のプレゼンテーションで触れられていない内容が盛り込まれている(聴き手が混乱する)





18



3-3. 大切なこと!



パワーポイントもハンドアウトもまずは補助的なものと考えてみよう。大切なのは話者のあなた自身の声と身体ですよ!




19



3-4. その他



- 黒板
 - ・説明の補助やキーワードの提示として効果的
 - ・数学の数式などではその場で解く過程を示すことができる
 - ・しかし書いている時間がちょっともったいないこともある




20



その他



- 映像・音響資料
 - ・授業の内容を視覚的・聴覚的にわかってもらうのに有効
 - ・授業にメリハリをつけることができる
- OHPシート
 - ・最近少なくなってきたが、まだ使われる授業が結構多い




21



4. 身体を意識する



- ・姿勢
- ・目線
- ・身体
- ・声
- ・目で対話(近距離・遠距離)




22



5. 発表の手順



- 手順を挙げると・・・
 - 1) まず名前と所属を述べる
 - 2) 何を発表するのかテーマを紹介
 - 3) 配布資料の説明(枚数など)
 - 4) アウトラインは最初に説明
 - 5) 強調点やどうしてもわかって欲しいことは効果的に伝える
 - 6) 観客の反応に注意
 - 7) 時間を守る
 - 8) 最後は「ご清聴ありがとうございました」などの挨拶で締めくくる




23



6. よくある失敗例



- 例その1「時間におさまらない」
 - 1) 司会者にうながされて最後の部分を切り詰める
 - 2) 結局最も伝えたい部分がきちんといえない
 - 3) わけのわからないしまりのない発表になる




24



よくある失敗例

- 例その2「情報が多すぎる」
 - 1) がんばったのはいいが伝えたい情報が多すぎる→「私がんばっています」というアピールは意味なし！
 - 2) ハンドアウトにもパワーポイントにも資料が満載
 - 3) おかげで発表もめまぐるしくなる
 - 4) 聴き手は大混乱





25



よくある失敗例

- 例その3「パフォーマンスが懲りすぎ」
 - 1) パワーポイントを懲りすぎる
 - 2) 受けを狙おうと変なジョークや駄洒落を連発
 - 3) やたらジェスチャーが熱い
 - 4) 結局観客はしらけるか、ひく





26



よくある失敗例

- 例その4「私は何でも知っている」
 - 1) 基礎がしっかりしておらずとりあえず目先の情報だけが豊富
 - 2) 自分が何でも知っているという態度
 - 3) それで「提案」を行ってしまうと基礎がない分たたかれる
→ 常に知の裾野の広さを意識する





27



最悪の失敗例

- 時間に遅れる・時間を間違える・時間に現われない
- パワーポイントが写らない、AV資料の提示ができない

↓

時間には余裕を持って一度会場や設備を点検し、その場でパワーポイントを試してみることが大切！





28



では、早速プレゼンテーションの準備に取り掛かりましょう！

その前に、まずテーマを決めなくては…





29

プレゼンテーションの模擬

皆さま、こんにちは。〇〇学部〇年の〇〇と申します。

これから私の発表「大学における学生の評価」に移らせていただきますが、発表に先立ちまして配布資料について確認させていただきます。A3 両面コピーの資料が2枚ホチキス止めされたハンドアウトがお手元に一部ずつ配られておりますでしょうか。(お手元に配布資料がない方は、挙手をお願いいたします。

ではこれから発表に移ります。私の発表のアウトラインは次の3つです。1. 現在の慶應義塾大学での学生の評価の種類 2. 授業における評価とはどのようなものであるのか そして最後によりよい大学の評価を目指しての提案の3部構成です。では発表に移ります。

現在慶應義塾大学ではどのような授業の評価が採用されているのでしょうか? この評価方法には大きく分けてふたつがあります。ひとつはパスかフェイルか、そしていまひとつがA,B,C,Dの4段階評価です。4段階評価ではDを取った場合は当該科目の単位はおりません。私たちにとってはおなじみのこの方法ですが、他の大学ではどのようなになっているのでしょうか?

第2回公開講座ポスター

教養研究センター設置科目
「アカデミック・スキルズ」公開講座

**さまざまな論点の
マッピングと要約**

日時：11月4日(水) 16:30-18:00
場所：日吉メディアセンター
1F セミナーコーナー

レポートやプレゼンのために
集めた資料をまとめるにはどうするか。
コーディネーター、参加者全員で
アイデアを出し合ってみます。
他の人の方法、気になりませんか？

コーディネーター：横山千晶

事前予約は不要です。
塾生・教職員ならどなたでも
参加できます。
お気軽にご参加ください。

ワークシート その1

	名前	記事の番号
1		
2		
3		
4		
5		
	グループの名前	

ワークシート その2

名前 _____ 記事の番号 _____

A. 記事の見出し(新聞名、日付)

B. 要約のためのメモ

C. キーワード

D. 記事の要約(なるべく簡潔書きで)

グループワーク用新聞記事リスト

- ① 「ワクチン被害に補償」『産経新聞』2009年10月28日朝刊、社会面
- ② 「新型ワクチン 子どもに臨床試験」『神奈川新聞』2009年10月30日朝刊
- ③ 「新型インフル成人に免疫？」『読売新聞』2009年10月22日夕刊、2面
- ④ 「新型インフル本格流行 14歳以下が7割超」『朝日新聞』2009年10月31日、1面
- ⑤ 「妊婦・疾患ある人接種開始」『読売新聞』2009年10月30日夕刊
- ⑥ 「中外時評 安心もたらすワクチン政策を」『日本経済新聞』2009年11月1日、9面
- ⑦ 「新型インフル受験生の追試 大学、公平性が悩みの種」『朝日新聞』(名古屋版)2009年10月25日朝刊、2面
- ⑧ 「インフル大流行 その時、生活は 基盤担う企業、対応急ぐ」『朝日新聞』2009年10月27日夕刊、1面
- ⑨ 「JR3社、減収減益」『朝日新聞』2009年10月29日朝刊、11面
- ⑩ 「お歳暮、不況の影」『読売新聞』2009年10月29日朝刊、8面
- ⑪ 「もっと知りたい！ 空気清浄機インフルに有効？」『朝日新聞』2009年10月19日朝刊、37面
- ⑫ 「論点 新型インフル対策 災害時と同様の準備必要」『読売新聞』2009年10月28日朝刊、11面
- ⑬ 「新型インフル 休日診療長蛇の列 8時間待ちも医師悲鳴」『読売新聞』2009年11月1日朝刊、2面

学習相談員企画「レポートに困っていませんか？」

展示ポスター①（阿部和彦作成）

1. レポートとは何か

学習相談員 阿部和彦

レポートの特徴は次の3点

- 型が決まったモノ
- 論理的・客観的なモノ
- 自分で調べた結果を報告するモノ

レポート・論文

他の文章との違いはこんな感じ

	型が決まっている	客観的・論理的	自分で調べた結果を報告
感想文	x	x	x
小論文	△	△~0	x
レポート・論文	0	0	0

1

さらに詳しく知りたい方へ

「型が決まっている」ってどういうこと？

戸田山和久「論文の教室」
→B@816@To6@1
第2章[論文には「問いと主張と論証」が必要だ]
第4章[論文とは「型にはまった」文章である]

山内志朗「ぎりぎり合格への論文マニュアル」
→S@816@Ya2@1
論文ってなに？ p.19-27
● 論文の条件 p.31-41

佐藤望ほか「アカデミック・スキルズ 大学生のための知的技法入門」
→B@002@Sa6@1
● 問いの発見について p.109-115

松本茂「大学生のための「読む・書く・プレゼン・ディベート」の方法」
→B@002@Ma3@1
レポート・論文とは何か？ p.46-55.

河野哲也「レポート・論文の書き方入門」
→B@816@Ko7@2
レポートって何？ p.5-8.

2

「論理的・客観的」ってどういうこと？

野矢 茂樹「論理トレーニング101題」
→B@116@No2@3B
論理性について勉強できます。分かりやすい本です。

吉田健正「大学生と大学院生のためのレポート・論文の書き方」
→B@816@Yo3@1
【第一章 レポートとは】には、他の文章との違いについて詳しく書かれています。

滝川好夫「アピールできるレポート/論文はこう書く！」
→B@816@Ta11@1
p.5にはレポートの実証性と合理性について書かれています。

小林康夫「知の技法」
→B@002@Ko2@4
「はじめに」のところに、レポート（もっと言うと「学問」）の目指す普遍性（≒客観性）について書かれています。

「自分で調べた結果を報告する」ってどういうこと？

佐藤望編著「アカデミック・スキルズ」
→B@002@Sa6@1
p.115-121に、レポートを書く上でやってはいけない事が書かれています。

滝川好夫「アピールできるレポート/論文はこう書く！」
→B@816@Ta11@1
p.3-4に、こういうレポートは書いてはいけない、という事が書かれています。

3

2. 参考文献の使い方

学習相談員 永嶋弘樹

レポート＝自分の意見(+参考資料・意見等)

自分自身の言葉のみで書くのはほぼ不可能

→資料や意見を、参考・引用するのはOK

ただし!!正しい形式を守らなければならない。
守らないと知的ドロボー行為である「剽窃」になる

自分の意見と参考・引用した部分を

ハッキリと区別する必要がある!

1

ルールブックを探そう

お気に入りの1冊を見つけよう

ルールはたくさんあるので、レポートを書く度に本を借りるのではなく、1冊手元に持っておこう!

初級者にオススメの1冊

「アカデミックスキルズ」附録

佐藤望編著、慶應義塾大学出版会、2006年。

→B@002@Sa6@1

ルールだけでなく、レポート・プレゼンの基本、ノートの取り方など学生生活の強い味方になります!!

→クイックレファレンスコーナーで見よう

2

もっと詳しく知りたい方にオススメ

大学生のためのレポート・論文術

小笠原喜康、講談社、2002年初版。

文字や記号表記などの細かいルールまで載っています。

論文執筆を見据えた本格的な作りになっています。

→S@816@Og3@1

理科系の作文技術

木下是雄、中公新書、1981年初版。

理系レポート・プレゼン・論文に対応したルールブック。

数式・単位の扱い方などのルールはもちろんのこと、構成に重点が置かれた作りです。一見の価値あります。

→S@407@Ki1@1

3

わからないことがあったら

レファレンスデスクの学習相談員へ

↳ 1階中央のインターネットスペースの前



※代筆ではありませんよ(笑)

4

3. 要約の仕方

学習相談員 宮城輔

「『〇〇〇』の△章を要約し、それについて自分の意見を述べなさい」……
だっけ??

んで、要約って何だっけ……

(;-_-)
ただ短くまとめるだけじゃないのね。。

要約とは

原文を正確に理解し、それを自分の言葉で、他の人がわかるように、

「問い＋主張＋論証」の形に再構築したもの

次の本には「要約の仕方」について詳しく書かれているよ!!

1

オススメ本

～シェフの気まぐれ要約風～

佐藤望編著『アカデミック・スキルズ』第4章
→B@002@Sa6@1

- ・全体像を掴むために
タイトル→目次→はじめに→おわりに の順で目を通す
- ・要約の仕方
キーワードを含むキーセンテンスの発見
→それを段落ごと、節ごと、章ごとの順に積み重ねて全体の要約を作る

文章をつなげる時に全体の流れが論理的になるようにする
→接続詞の重要さ

松本茂・河野哲也『大学生のための「読む・書く・プレゼン・ディベート」の方法』の第1章
→B@002@Ma3@1

- ・パラグラフ単位で中心的主張とその論証部分に目印をつける
→それら部分の主張がどう組み合わせられて最も重要な主張を展開しているかを検討し、その最も重要な主張が何であるかも分析する
→全体の流れをまとめ要約を作り、それを読み返しながらかかりやすい文章にしていく

2

ワンポイント アドバイス

- ・要約力＝ノート力
要約のやり方はそのまま授業中のノートの取り方に応用できる
つまり、「いい」ノートとは講義を上手く「問い＋主張＋論証」の形に再構成しているのだ
- ・要約する意味
なぜ要約する必要があるのか？
それは「テーマの決定」と関わっている
先行研究を正確に理解した上での「テーマ決定」は非常に重要である
だから、原文を読み込んでいる時に気になった点をメモしておけばテーマも決めやすい。

詳しくはレファレンスデスクの学習相談員まで!!

3

4. テーマの決め方

学習相談員 水谷文彦

「授業中に扱った事柄で興味のあるテーマについて
○○○字以上でレポートを提出せよ」
「○○○(本の名前)を読み～～字のレポートを提出せよ」
「自分の興味のあることについて～～字のレポートを提出せよ」

こんなセリフは何回も聞いたけど...
レポートって何から始めたらいいのかわからなくて悩んでいるアナタ!

まずは「**テーマ**」を決めよう!
テーマとは「**私はこの問題に対してこう考える**」という**直言**のようなもの。

言い換えれば「**テーマ=問い**」だ。
与えられるのではなく、自分で「問い」を見つけて文章で相手に伝える。
「テーマ」なくしてレポートは**書き始められない!!!!**
そこで、悩めるアナタに「テーマ」を決める際の**3つ**のポイントを伝授しよう!

『レポート書け』っていきなり言われても...何書けばいいのよ...



1

これをチェック! 3つのポイント!

- **テーマの対象は明確に定まっているか**
まずは、扱う問題が**1つに絞**りこめているかどうか。例えば「愛とは何か」というテーマ。とても素敵なテーマだが、「愛」は**漠然**としていて何から書き始めていいかわからない。大きな問題は、さまざまな問題が絡み合っていてとてもレポートでは扱いきれない。**明確な「問い」**になるよう絞り込もう。ただの「愛」では漠然としていても映画『風の谷のナウシカ』におけるナウシカと蟲との交流に見られる愛情表現」と**絞り込み**をし、**具体性をませ**ば充分レポートで扱えるテーマになる。
- **リサーチの方法が明確か**
テーマが見えてきたら、次に**リサーチの方法**を考えよう。テーマを決めた時から、書き終わるまでの道筋が立っている必要は全くない。しかし、ある程度何を調べていけばよいかという方向性は明確であるべきだ。全く手が進まないようであれば、**テーマの設定が誤っている可能性**もでてくる。どうやって道筋を立てるべきかはレファレンスコーナーや授業の先生に**相談に乗**ってもらおう。最初からスムーズにテーマを決められる人なんていないのだ。
- **扱う情報量は適切か**
さて、テーマを設定したのはよいが**資料の情報**があまりにも多すぎたり、扱いきれないといったテーマは設定するべきではない。例えば探した資料がすべてラテン語だった、または高度な数式を検証する必要がある、といった事態では手の打ちようがない。もっとも長い時間をかければ解決できる問題ではあるかもしれないが、いまアナタには**「レポート締め切り」という制限**があるはずだ。この制限のなかで扱えるテーマを設定しよう。また、資料がまったくない。ゼロだ。というテーマも適切とは言えない。**情報量が適切かどうかの判断**も相談にのってもらって、一人で考えるよりスムーズに解決するだろう。

2

「テーマ=問い」

さて、テーマを決めることはある問題に対して「問いかけ」をする。とだ。しかし、「問い」であれば何でもよいのだろうか。答えは**否**。レポートで「私がアイスを食べたいのはなんでだろう?」という問いを解決したところで評価はされない。レポートの問いには何かしらの**意義が必要**であり、**公共的・普遍的な問いである必要**がある。そういった問いを見つかる場が大学なのだ。先程の例も「夏季と冬季における氷菓消費の変化」という問いであれば意義のある問いになるだろう。問いの設定、つまりテーマが決まってしまうと**レポートの7割は完成**した、と言われる。それほど**テーマの重要性は高く、難しい**。まずは一人で悩まずに色々な人に相談してみよう!

お勧め参考本

テーマの設定ならこの一冊!!
佐藤望編著、『アカデミックスキルズ』
慶應義塾大学出版会、2006年。
→B@002@SA6@1

テーマを探するときの手助けとしてならこの一冊だ!!
文藝春秋編『日本の論点』
→B@304@BU2@1

3

5. 情報収集のコツ

By 学習相談員 市村謙

あっ、レポート出てる...
といえど資料集めなきゃ!!



闇雲に集める前に、まずは情報収集のコツを知ろう!

おすすめ本①

情報収集といえば、まずはネット

→時間だけ浪費

→気がついたらmixiやyoutubeを見ていたorz
という経験アリの皆様、

江下雅之著『レポートの作り方』、中公新書、
2003年→1階ラウンジ S@816@Es1@1

この本の第二章を読もう!!

特にP36~37の「情報収集の基本姿勢」は
必見です。

1

5. 情報収集のコツ

なるほど、インターネット時代では
収集した情報の取捨選択が大切な
んだね!



うーん、でも情報の取捨選択ってど
うすればよいのか分からない...

おすすめ本②

情報収集した結果、どれが使えてどれが不必要
なのか分からなくなった...orz

という経験アリの皆様、

八幡紘史著『リサーチの技術』、PHP研究
所、2005年→B@007.5@Ya4@1

この本の第二章を読もう!!

特にp64~67の「情報収集の目的と目標を明ら
かにする」は必見です。

2

5. 情報収集のコツ

なるほど、情報収集の目的は自分の考
えを作る&深めることで、集め始める
前に目標を立てるべきなんだね!!



じゃあ、情報って具体的にはどうやって
収集すればよいの?

おすすめの収集例①

・日吉メディアセンターのHPをチェック!!

左上の「調べる・探す」をクリック。自分が欲しい情報を含んで
いそうな文献を色々なデータベースで検索してみよう。

※日吉メディアセンターHP→「調べる・探す」→「資料の探し方」で、さ
らに詳しく手順が分かるといいます。

今回は簡単なことしかお伝えできませんでした。もっと色々な
収集法を知りたい方(裏技色々あるでー)、上手く情報収集で
きないー!!という方は、

日吉メディアセンター一階レファレンスカウンターにいる学習
相談員にお気軽に相談してください! 待ってます!

3

6. 情報の組み合わせ方

学習相談員 間篠

資料は集まったけれど、この後どうまとめたらい！？

こんなときどうする？

レポート提出まで残り時間わずか。テスト勉強もしなきゃならないから、レポートだけに時間も使えない.....

そこで、他の学習相談員も紹介していた佐藤望編著『アカデミック・スキルズ』（慶應義塾大学出版、2006年）→B@002@Sa6@1

これの第5章「情報整理」がコンパクトにまとめられていて使いやすい。情報整理術「KJ法」はぜひ知っておくべき。オススメです。

1

レポートにKJ法を用いる

KJ法とは、簡単に言ってしまうと、頭の中だけでは整理できない量の情報を視覚化・図式化する方法。レポートに取り組む場合での方法はだまかに言って、以下の通り。

1. 資料から得られる情報を1行程にまとめ、カード(のりつきの付箋でOK)に書き入れる
2. カードをばらばらに広げ、グループ化する
3. それぞれのグループにタイトルをつけて並べる
4. グループ内の論理的なつながりを考えながら、レポートの流れをつくりあげる

【例】

かなり簡略化しているので、不明点も出てくると思います。やり方が分からない方は、本を読む。あるいは**レファレンスデスクの学習相談員までどうぞ**。学生なりのアドバイスを提供しています。

2

ひとまず課題を乗り切った方へ & 比較的時間のある方へ

<KJ法についてもっと知りたい人はこちら>
 ・川喜田二郎『KJ法—渾沌をして語らしめる—』（中央公論社、1986年）
 ⇒B@141@Ka11@1
 一度KJ法を使ったのなら、その使い勝手のよさに感嘆することと思う。しかし、KJ法はレポート作成のための情報整理術にとどまらない。グループで作業を行う際には特に役に立つ。KJ法についてはいろいろな本やwebサイトで紹介されているが、初歩について学んだなら、一度本家を見てみるのもよいのではないだろうか。なお、この著作は『川喜田二郎著作集』第5巻(中央公論社、1996年)にも所収されている(⇒2階東閲覧室、B@081@Ka7@1-5)。

<論文のアウトラインについてもっと知りたい人はこちら>
 ・戸田山和久『論文の教室』(NHKブックス、2002年)
 ⇒B@816@To6@1
 今回の課題で、行き当たりばったりな資料収集で大変なめにあったとしたら、今度はより計画的なレポート作成に挑戦してみたらどうだろうか。戸田山氏は、目次のような短いアウトラインを膨らませることで論文ができていくと説明している。資料収集・整理もそのアウトラインに沿っていけばよりスマートに行うことができる。論文の書き方の本には珍しく読みやすいスタイルなので、試験後の息抜きに一読してみるのもよいのでは。

3

学習相談員作成資料

実験レポートって何？

実験レポートって何？

理工学部システムデザイン工学科
2年 永嶋弘樹

1

はじめに

実験レポート
＝情報（結果や考察）＋科学的文書文法

実験レポートのスタートライン
『細かい形式・決まりく必要最低限の情報』

2

実験レポートの書き方とは？

・ダメな例
目的書いて・・・
方法書いて・・・
結果書いて・・・
誤差か・・・計算どうやるんだっけ？まあいいか
考察？よくわからないや
表紙をつけて・・・よし！提出♪

これは大学レベルではありません

3

考察あつての実験レポート

考察＝結果^k＋ α
＝結果を深め($k > 1$)、補足をする($\alpha > 0$)

自然科学実験物理学編のP17～19

★最低限抑える内容

①実験における誤差の計算
②担当教官やTAの人に指示された項目

**自分のできるところから
実験を考察してみましよう。**

4

これだけは守ろう!! その1

★表紙は実験書の専用用紙を使いましょう。
※学事センターでは提出できません!!
★締切厳守！必ず期日までに提出しましょう。
★実験を欠席した場合は、欠席理由の証明書を提出した上で補充実験をしましょう。
★データの改ざんは禁止。
実験値は大切に!!誤差は考察の対象です！

5

これだけは守ろう!! その2

★過去レポや友達レポのコピーは禁止。重罰の対象です。先生は過去レポ検索ができます。
★手書き提出の場合は特に丁寧に！
正当な評価を受けない可能性あり
★書き終えたら1度は読み返えそう。
有効数字や単位、文法的間違い。単位の付け忘れ、スケールの違いには特に注意!!

6

単位の表記法

- 高校までの表記
単位を[]でくる
ex. 2.0[m]や12[N/m]
- 大学での表記
[]は必要ありません。
ex. 2.4kgや3.5kg/m・s²

※文字ではなく、数値計算をおこなう場合には単位を省略せずに必ず書くようしましょう。

7

実験誤差に関する用語

★実験書で意味の確認
有効数字・標準偏差・実験標準偏差・不確かさ など

★誤差の計算手段 → 関数電卓とExcel
どちらも使えるようにしておきましょう

★Excelの利点
同じ計算は自動で行える
データからグラフを簡単に作れる

8

表やグラフの重要性

グラフや表…視覚的に結果を表す
良いグラフや表は良い考察を生み出します！

グラフの書き方は実験書のP20~にあります。
データの結び方や、単位の書き方が重要

実験後に担当教官やTAに質問をしましょう。
(実験時にTAのメールアドレスを聞いておきましょう)

9

参考文献の扱い方

★情報源ははっきり記そう。
計算・分析に必要な知識・定数などを見た
文献・Webサイト

★参考文献の記し方

基本：著者名、『タイトル』、出版社、発行年。
このスライドの参考文献にある『アカデミック
スキルズ』の教科書を見てみましょう

10

文法的注意事項

- (1)「だ・である」調の口語体で書くこと
- (2)意見を書く際に、一人称はなるべく使わない
- (3)受け身の分はなるべく避ける
×沈殿はろ過される→○沈殿をろ過する
- (4)あいまい表現は避ける
ex. 近い将来、非常に良い効率が可能となるであろう。
“近い将来” “非常に良い” この2つについては
特にあいまいさがあるので避けるべき表現です。

11

参考文献

木下是雄、『理科系の作文技術』、東京：中央 公論新社、1981年。
小笠原喜康、『大学生のためのレポート・論文術』、東京：講談社、2002年。
佐藤望、『アカデミックスキルズ：大学生のための知的技法入門』、東京：慶 應義塾大学出版会、2006年。
泉美治、『化学のレポートと論文の書き方』、京都：化学同人、1985年。

基本：著者名、『タイトル』、出版社、発行年。

12

日吉メディアセンター
学習相談アワー資料
作成者：学習相談員 間篠剛留

ピアメン・ミーティング議事録

1. 日時

2009年11月30日 10:45-12:15

2. 場所

日吉キャンパス来往舎応接会議室

3. 参加者

教養研究センター：柴田さん、横山先生

日吉リファレンス：和田さん、藤本さん

日吉ピアメンター：宮城、阿部、市村、水谷、永嶋、間篠

4. 議事要旨

(1) 具体的目標およびリーダー

ピアメン全体のリーダーは**宮城君**に決定した。今後宮城リーダーを中心に、ピアメンの業務を行っていくこと、ピアメン全体で積極的にリーダーを補佐することが確認された。そのもとで今後の具体的企画としては以下の3つがあがり、これらを推進していくことが決定した。

① 図書紹介（企画展示）

これまでの相談経験も踏まえて図書紹介を行いつつ、カウンターへの誘導を行う。

第1回は来年1月にメディア入口のラウンジにて行う予定。

12月中にその準備を行う。責任者は**宮城君**。

将来的には個々のピアメンの紹介も行っていきたいが、こちらについては今後検討。

② レポートについてのプレゼン

アカデミック・スキルズの公開講座のような形で、ピアメンがレポートについてのプレゼンを行う。※市村企画参照

こちらは来年5月に行う予定。今年度はその準備を行う。責任者は**市村君**。

③ 学生&教授ノート紹介（企画展示）

様々なノートを紹介し、ノートの取り方について考えてもらう。※水谷企画参照

こちらも企画そのものは来年度行う。今年度はその準備に充てる。

入口正面の展示ケースにて行う予定。責任者は**水谷君**。

2. ピアメンの業務内容について

(1) リファレンスとの協力体制について

同じカウンターに学習相談とリファレンスが揃っているという本事業の特徴を再確認し、両者の協力体制を強めることが確認された。特に、ピアメンやリファレンスに仕事を「振る」のではなく、両者が一緒に解決することが重要である。

(2) ピアメンの立場について

ピアメンの「ピア」たる意味が確認され、「教えてあげる」という姿勢だけでなく、「一緒に学ぶ」という姿勢も大事だということが再認識された。また、今後ピアメンが学生であることをよりアピールしていくべきではないかという意見も出された。1点目とも関連するが、ピアメンがリファレンスに学ぶことも重要である。

(3) 窓口について

以上の点を踏まえて、窓口を学習相談とリファレンスとにきっちり分けるか、あえて分けずにいくかという点について意見が交わされたが、一つの案に決定するということはなかった。また、ピアメンとリファレンスの位置をどうするかという点についても明確な改善案は出されていない。どちらにおいても重要なのは利用者にとってわかりやすいということであるが、この点については容易に答えの出る問題ではない。まずは、ピアメンとリファレンスの協力体制を確認しつつ、今後の業務の中でさらに検討していくという方向に落ち着いた。

3. その他

(1) リファレンスから学ぶということについて

情報検索についてリファレンスの方が対応している際、その横でピアメンはメモをとることが決定した。これは以下のような経緯からである。情報検索に関してリファレンスの方が説明をしている際、相談者の側に学ぶという姿勢に欠けることが多く、メモを取る人も少ないという意見があった。相談者にもぜひ、リファレンスの方の説明に学んでほしい。そこで、「ピアメンがリファレンスの説明に学ぶ姿勢を見せることで、相談者の側にも学ぶ姿勢が伝わるのではないか」という提案がなされ、採用された。

学習相談員自己紹介

(所属・学年は2009年3月時点)

間篠剛留 (社会学研究科修士2年)



教養研究センター設置の「スタディ・スキルズ」(現「アカデミック・スキルズ」の前身)を受講していた縁から、学習相談員に立候補しました。学習相談員をやっていて一番楽しいのは、相談者と一緒にレポートについて考えることです。一緒に考えていく中で、自分では出せないようなアイデアが相談者側から出てくるのはとても面白いことです。相談者が学ぶだけでなく、相談員も学ぶ。それはレファレンスの方に学ぶということも大きいですが、相談者からも学ぶことが大きい。まさにこれは「半学半教」だろうと思います。

阿部和彦 (商学部4年)



「アカスキの延長線上として、やってみたらどう?」と横山先生、武藤先生に三田で言われて決心し、実際やりはじめて1年が経ちました。この制度が黎明の段階でかなり実験的な要素が大きいこともあり、どのようにやっていこうかということを探索しつつ戸惑いで終わってしまった気がします。来年度からは日吉の学生さんのために、相談(優しく、ときには厳しく)や展示企画などを通して、学生ならではの視点から、できる限りのサポートをしていきたいと思っています。

市村 謙 (法学部3年)



「半学半教」の想いを持ってピア・メンターをさせていただきました。しかし、この一年間は「学」、つまり私が学んだことの方が多かったなと感じます。振り返ってみて最も印象に残っているのは、緊張し、恥ずかしそうに相談に来た女性とのやりとりです。私も彼女も同じ学生。本来緊張する必要などないはず。終始緊張し、帰っていった彼女の相談を受けた後に思ったのは、「心の距離」を作っていたのは自分ではないかということです。学習相談員という名称に気負いを感じ、教師のように振舞っていたのではないかと。勇気を振り絞って相談にきてもらったのに、自分は同じ目線で一緒に悩み、一緒に解決策を考えることができただろうか。反省は多いです。来年度は二年目。一年目に学んだことを活かしつつ、もっと積極的に挑戦していきたいと思っています。

水谷文彦（経済学部2年）



1988年生まれ。小中高を千代田区の暁星学園で過ごしました。理系の学部を目指していましたが、ロバート・キヨサキ著『金持ち父さん、貧乏父さん』という本を読んでから経済学部が面白いと思いついて数学で受験しました。文学部や理工学部と違い、専攻に分かれていないので何をしているか分からない経済学部ですが、最近行動経済学に興味があります。趣味はJazzを聴いたり演奏したりすることで、KMPというBig Band Jazzサークルでトランペットを吹いています。ピア・メンターへは、他の方と同様にアカデミック・スキルズという授業で横山千晶先生に紹介していただきました。ピア・メンターを通じてかなり勉強することができ、また勉強しなくてはいけなさと感じさせられることがありました。特に、同じ学生である相談相手のアカデミックな悩みをどう解決へ導くのか、ただ答えを与えるのではなく導くということがいかに難しいかを体感しました。しかし、お手本となるようなピア・メンターの仲間や図書館員の方々が周りにおり、どうやったらあのように相談にのれるのかと考えることができましたし、そんな環境にいらることができて幸せでした。

宮城 輔（経済学部2年）



経済学部2年の宮城輔です。このプロジェクトに携わるにあたって一つの不安がありました。それは「知っている」と「教える」の間にあるギャップをどう埋めるのかというものです。しかし先生方は「あまり自分で背負い込まないで、自分に出来ることをやればよい」とアドバイスしてくれました。そのことをいつも念頭に置きながら私はこの一年、相談者と一緒になって悩み、問題に取り組んできました。すると当初あった不安もいつの間にか消えていました。教えるとは学ぶこと、このことを痛感した一年間であり、この考え方は今後の私の日常生活においても活かされ続けると思います。

永嶋弘樹（理工学部2年）



塾生の質問に答えながら、自分の知識を再確認できるとは思っていましたが、私はさらに大きな2つのものを得ることができました。1つ目はメディアセンターがもっと活用すべき素晴らしい学びの場であるという認識を持てたこと。そして、多くの塾生の学ぶ姿勢を目の当たりにして、刺激を受け、学問に対し、より前向きな気持ちに慣れたことです。他人を育て、そこから学び、自らが成長する。塾生が塾生を育てる。これは“互いに”であることが身をもって体験できたプロジェクトでした。この体験をしたピア・メンター達が新たなピア・メンターを育てることで、貴重な体験をする人が増えていくのは素晴らしい限りです。来年度以降の企画が楽しみです。

学生の学習環境を整えるプロジェクトメンバー

教養研究センター

横山 千晶（法学部・教授）

種村 和史（商学部・教授）

篠原 俊吾（法学部・教授）

メディアセンター

島田 貴史（係主任、2008.4～2009.10）

和田 幸一（課長代理、2009.11～）

藤本 優子（事務員、2008.4～）

学習相談アワー 学習相談員（所属・学年は2009年3月時点）

2008・2009年度

間篠 剛留（大学院社会学研究科修士課程2年、）

2009年度

阿部 和彦（商学部4年）

市村 謙（法学部政治学科3年）

永嶋 弘樹（理工学部2年）

水谷 文彦（経済学部2年）

宮城 輔（経済学部2年）

慶應義塾大学教養研究センター

図書館に展開する半学半教の場作り
——「学生の学習環境を整える」プロジェクト 2008・2009 活動報告書——

2010年3月31日発行

編集・発行 慶應義塾大学教養研究センター
代表者 横山千晶

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1
TEL 045-563-1111 (代表)
Email lib-arts@adst.keio.ac.jp
<http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/>

©2010 Keio Research Center for the Liberal Arts
著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。